
魔法少女リリカルなのはMaterial ~ Wing of Revival ~

堕ちた聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはMaterial Wing of Revival

【Nコード】

N2518K

【作者名】

堕ちた聖騎士

【あらすじ】

10年前の『闇の欠片事件』で消滅したはずの『星光の殲滅者』が、再び『魔導師の杖』を手に空を駆け抜ける。機動六課を舞台に結ばれていく絆。『友』とは、『愛』とは、『生きる意味』とは何なのか。明かされていく真実を前に、彼女が導き出した答えとは。絶対運命が崩壊する時、星の光が未来を切り開く。魔法少女リリカルなのはMaterial Wing of Revivalが始まります。

主人公&デバイス&召喚竜

星華^{セイカ}

● 元『理のマテリアル・星光の殲滅者』

● 性別：女性

● 年齢：19歳前後

● 容姿

○ 年相応に成長してかなりの美女になっている（所謂、クールビューティー）

○ 髪の色は濃い栗色でショートカットのまま

○ 身長はなのはより少し高い

○ 体重とスリーサイズはルシフェリオンによって削除

● 性格

○ 普段は勿論戦闘中も冷静沈着で感情を表に出すのが苦手

○ 天然

● 趣味

○ 本を読み知識を蒐集する事

○ 最近料理を始めて基本的な料理なら腕ははやて並み

● 特技：料理・キラースマイル（普段とのギャップもありかなりの威力がある）

● 所属：機動六課

●階級：囑託魔導師

●魔力ランク：SS（フェザーオブメシア発動時はSSS）

●魔導師ランク：空戦AA+

●魔力光：赤色

●術式：ミッドチルダ式

●ポジション：センターガード

●デバイス：インテリジェントデバイス『ルシフェリオン』

○ヒートヘッド：なのはのアクセルモードと同様の通常モード

○ブラスターヘッド：なのはのバスターモードと同様の砲撃モード

○デイズターヘッド：なのはのエクシードモードと同様のフルドライブモード

○アカシックヘッド（AkashicHead）：不明・プロテクトが掛かっている為、使用不可

○フェザーオブメシア（FeatherOfMessiah）：不明・アカシックモード発動時に使用者の背に展開される翼

●デバイス：インテリジェントデバイス『トワイライト』

○自称ルシフェリオンの姉妹機を名乗る謎のデバイス・形状は不明で未だに姿を現さない

●バリアジャケットとデバイスの形状：基本はなのはと一緒の色違い・因みに星華となのはとフェイトのバリアジャケットとデバイスのデザインは作中のものを劇場版化させたもの

●使用魔法：基本的になのはの使用魔法と一緒に（威力は星華が上だが、制御はなのはが上）

■射撃魔法

○パイロシューター：なのはのアクセルシューターと同等・操作可能数は32個

○クロスブラストシュート：ティアナが使うクロスファイアシュートと同様の魔法だが星華は誘導魔法ではなく砲撃魔法として使用している

○クロスブラストフォースシュート：操作可能数の半数を牽制に使い残りの半数を4等分にして放つ砲撃魔法

○クロスブラストガトリングシュート：ルシフェリオンにスファイア生成を任せクロスブラストシュートを連続で発射する殲滅魔法

○ジャッジメントフォール：なのはのスターダストフォールと同じ物質加速射撃魔法だが威力を最大限まで高めているため命中精度は低い

○ブラストファイアー：なのはのデイベインバスターと同等

○ブラストファイアーバースト：ブラストファイアーに星華とルシフェリオンが開発した拡散プログラムを組み込み完成した散弾砲撃魔法・広範囲に攻撃を加える事ができる代わりに威力はかなり落ちてしまう

○アカシックブレイカー（AkashicBreaker）：不明

○クロスエンド・ドライブ（CrossEnd・Drive）：5発のスフィアを基点同士で繋ぎ構成された十字架の形をした剣を操る攻撃魔法・トロイメライのグリリアス・プレペンダーを参考にしているので敵の攻撃を防ぐことも可能・操作可能数は5本

■幻術魔法

○イリュージョンミスト：作中では自分の体の周囲にのみプリズム効果のある魔力粒子を散布して姿を隠した・本来は広範囲に散布することで様々な幻を見せて相手を翻弄する幻術魔法・確かに高度な

魔法ではあるが爆風で魔力粒子を吹き飛ばされると効果がなくなる等の弱点がある・同様の理由で風の強い場所での使用は不可能・以上の点を踏まえてこの魔法が一番効果を発揮するのは屋内戦闘である

■捕獲魔法

○チェーンルベライト：星華が使うルベライトの派生魔法・設置型でスフィアを鎖状に変換して目標を捕縛する・強度は問題ないが高ランク魔導師相手だと足止めにしかない

■移動魔法

○パイロフィン：なのはのアクセルフィンと同様の高速機動補助魔法

●レアスキル

○ハイスピードマジックリレーション（High Speed Magic Restoration）：その名の通り超高速で発動者の魔力を回復させるレアスキル・副作用で体が幼児化する欠点がある
○エンゲージリンク（Engage Link）：キスを媒介とした特殊な術式で、互いのリンカーコア間にパスを繋ぐ事で始めて真価を発揮する正体不明のレアスキル・任意で使用する事は出来ず、その条件も不明・現在判明しているのは、発動すればリンクを結んだ者の使用魔法の威力&効果をワンランク引き上げる効果がある事だけである

○スピリチュアルメディカライザー：『エンゲージリンク』保持者の精神異常を治療する効果がある

イシユタル（通称：イル）

●闇の欠片が星華の放ったアカシックブレイカーによって浄化されたことによって産まれた融合騎

●容姿はリインフォース？の髪をショートカットにして、顔立ちを少しボーイッシュにした感じ

●察知と空間把握の能力に非常に優れており、ユニゾンすれば高度の照準能力が得られるなど遠距離攻撃が中心の魔導師とは相性が良い

トロイメライ

●星華と盟約を結んだ竜種の召喚竜

●ルーツは謎に包まれており星華について何か事情を知っている？

●使用魔法

○グロリアス・プレベントー（Glorious Preventer）：トロイメライが使用したシールドタイプの防御魔法・意味は『光輝なる妨害者』・十字架が描かれた12枚の盾が展開され、心悪しき者は接近するだけで凄まじい衝撃派に襲われ弾き飛ばされる・問題は顕現に制限時間があることで、タイムリミットを少しでも経過すれば盾は自動的に消滅する

全てのプロローグ

星光の殲滅者 side

マテリアルSこと星光の殲滅者である私は少々戸惑っています。
目が覚めると、長時間居れば頭が可笑しくなりそんな染み一つ無い
真っ白な空間に居たからです。

星光：「ふむ、ここは何処なのでしょう？」

それに・・・

星光：「私は高町なのはに敗れ消滅したはずですが。どういうこと
でしょう？」

そう言った次の瞬間、私の目の前に人の形をした蒼い光が現れ声が
聞こえてきた。

???：「それについては、私が説明しましょう」

星光：「!?!?…あなたは？」

??：「私はアルス・マグナ。貴女を蘇らせた者です」

星光：「…そうですか」

アルス：「…」

星光：「……」

アルス：「……」

どうしたのでしょうか？

アルス：「驚かないのですか？」

星光：「驚いて欲しいのですか？」

アルス：「…すみません、今は忘れて下さい」

星光：「は、はい（内心、少々驚いてはいたのですが）」

アルス：「（もうちょっとつつこんでほしかったのですが、まあいいでしょう）それでは本題に移りましょう、貴女はアカシックレコードという概念を知っていますか？」

アカシックレコードですか。

星光：「確か、宇宙や人類の過去から未来までの歴史全てがデータベース的に記されているという一種の記録をさす概念、でしたか？」

アルス：「よくご存知ですね。実はそのアカシックレコードの一部に歪^{ひず}みが生じ始め、そして本来起こるはずのなかったイレギュラーが発生し始めているのです」

星光：「それでその事と消滅したはずの私がここにいる事とどういう関係が？」

アルス：「問題はそこです。私はとある事情で動けない身なので歪んだアカシックレコードが引き起こす事由には干渉できません。明確な理由は教える事ができないのは大変申し訳無いのですが、貴女には私の代理として事に当たって貰いたいです。もちろんできるだけの支援はしましょう、引き受けて頂けませんか？」

なるほどそういうことですか、しかし…

星光：「私はかまいませんが、失敗したとはいえ私は闇の書の復活をはたそうとしたプログラム、さらに言えば人ですらないのですよ？」

アルス：「かまいません、それに君には只のプログラムとしてではなく、ひとりの人間として生きて頂きたいのです。ひとりの人間として生き、そして生きるという事の意味を考えてみて下さい」

星光：「（プログラムではなく、ひとりの人間としてですか。私にその資格があるのでしょうか？）…分かりました」

アルス：「ああ。ではそろそろ送り出す時間です。あと、ここで話した内容は貴女の記憶には残りませんが、異変は自ずと起き始める筈です。月並みですが、御武運を」

その言葉を聞くと同時に私の意識は闇に沈んでいった。

星光の殲滅者 side out

アルス side

???:「本当に、あの娘で良かったのか？もう1人の方に任せても……」

アルス：「彼女を送り込むと色々問題が出ますからね。……後は任せましたよ『機動六課』」

アルス side out

To Be Continue...

再誕する星

星光の殲滅者 side

「クラナガン郊外／リニアール付近森林地帯」

太陽の柔らかな光が差し込む森の中で私は目覚めた。

星光：「…ここは、どこでしょうか？」

すると私の胸元から声が聞こえてきた。

ルシ：「おはようございます、マイロード。気分はいかがですか？」

星光：「ルシフェリオンですか。そうですね少々体の感覚にずれがあるように感じるのですがどういうことでしょうか？」

ルシ：「それが、起動後にマイロードの体を完全スキャンしたのですが、御体の構成物質がプログラムではなく人間と同様になっているのです。ですが安心して下さい、体は全くの正常です。違和感も時間が経てば無くなるでしょう」

星光：「体が人間に？問題が無いのなら、考えるの次回ですね。あと、先ほどの質問ですがここは何処で今はいつでしょうか？」

ルシ：「ここはミッドチルダグラナガン郊外のリニアール付近森林地帯。そして今は新暦0075年です」

星光：「あれから10年ですか。…それでこの体というわけですか？」

私の体は19歳と言われても納得できる体に成長していた。

ルシ：「作為的な何かを感じますが」

（JAM：「違いまよ!!!？」）

星光：「何か聞こえた気がします。ああ、ルシフェリオン？私の容姿はどうなのでしょう？」

ルシ：「!!!？え、ええ、とても似合っていると思います／／／（ああ、マイロードなんて美しい／／ハッ!?今一体私はなにを、私はデバイス私はデバイス私はデバイス私はデバイ……）」

星光：「（なにか聞こえますが、気にしたらいけないような気がします）……”ドガアア”……！？ルシフェリオン、今のは！？」

今の爆音は……まさか近くで戦闘が！？

ルシ：「サーチ中です……。出ました！！現在地から5時の方向に3Kmの地点で魔法による戦闘を確認しました」

自身の状況確認をしている場合ではないようですね。

星光：「ルシフェリオンいけますね」

ルシ：「もちろんです、マイロード。ですがお気を付けてください、あなたの体はまだ本調子ではないのですから」

星光：「分かっています。ルシフェリオン、セットアップ！！」

ルシ：「スタンバイレディ、セットアップ」

そして、私は再び空を駆ける。

星光の殲滅者 side out

To Be Continue . . .

過去の残光

高町なのはside

〓 10年前 / 第97管理外世界地球海鳴市上空 〓

私と星光の殲滅者さんの戦いは、お互いに手札と魔力をほぼ出し尽くし終局を迎えようとしていました。

なの：「そろそろ、決着をつけよう？」

星光：「そうですね。では、お互いに全力全開で!!」

なの・星光：「「いきます!!カートリッジロード!!」」

レイ・ルシ：「「ロードカートリッジ」」

私と彼女のデバイスから薬莢が次々と吐き出されていく…

なの：「全力全開!!スターライト…」

星光：「集え、明星、全てを焼き消す焔となれ！ルシフェリオン…」

なの・星光：「ブレイカー…！！」

…ガガガガガガガ！！…

私と彼女の最大威力の砲撃が拮抗して凄まじい音をたてる。だが、徐々に私の方が押され始めた。

なの：「くうう…！！（このままじゃ競り負ける！？）」

心が挫けそうになる。その時、私の大切なパートナーが声を掛けてくれた。

レイ：「マスター…！私達はまだいけます…！」

なの：「…！！…そうだね、私とレイジングハートならまだいけるよね…！」

レイ：「もちろんです…！」

なの：「それに、決めたんだ。みんなのいるこの空を守るって。だから、絶対負けない！！」

押し負けていた私の砲撃が、私の意志に応えてくれたかのように威力を増して、その魔力の激流は彼女を彼女の魔法ごとのみこんだ。

- 数分後 -

なの：「・・・ハア・・・ハア・・・私の勝ちだね」

星光：「・・・ええ、私の負けですね」

そう言った彼女の体はぼろぼろだったけど、その顔はどこか嬉しそうに微笑んでいた。

なの：「ハウッ！？」（女の子同士なのに何でドキドキするの！？あの笑顔は反則だよ）／／／

星光：「？？？」

フェイ・ヴィー：「なののはー！！」

なの：「！！！？…フェイトちゃん！ヴィータちゃん！みんなも！」

みんな来てくれたんだ。

フェイ：「なのは、大丈夫？顔が赤いよ？」

なの：「え！？う、うん、大丈夫だよ。フェイトちゃんも」

顔が熱くなっているのを誤魔化して、お互いの無事の確認をしていると彼女が声をかけてきました。

星光：「あなたがここにいるということは、他のマテリアルも敗れたようですね。」

フェイ：「…ええ、あとはあなただけです」

星光：「そうですか…フフ」

そう言った彼女は笑っていた。

ヴィー：「テメエ、何が可笑しい！！？」

星光：「いえ、気分を害したのなら謝ります。ただ、何となくですがこうなるような気はしていたので」

なの：「どういうこと？」

星光：「所詮、私達は世界の害でしかない闇の残滓ですから。こうなることが当然の帰結でしょう？」

シグ：「では、貴様は何のために戦ったのだ？」

星光：「知りたかったのです。高町なのは、いえ、あなた達のこと
が」

みんな：「「「え？？」」」

星光：「私は闇の書の一部ですから、あなた達と闇の書の防衛プログラム
の戦いを見ていました。そして知りたくなつた、なぜあんな
絶望的な状況で諦めることもなく立ち向かえるのか。そして、何故
私はそれを知りたいと思つたのか。あなた達と戦えばその答えを
得られるかもしれない、と考えました。それが理由です」

そう言った彼女の表情には羨望と悲しみが浮かんでいました。

なの：「…それで、答えは見つかったの？」

星光：「…いえ、あなたとの戦いは非常に心滾るものでしたが、最後まであなた達を理解することは出来ませんでした。どうやら私はたやはり只の壊れたプログラムでしかかったようです」

その言葉を聞いた瞬間、私の中で何かが弾けた。

なの：「そんなことない！！あなたは只のプログラム何かじゃない！！…だから、そんな悲しい事言わないで」

もつと伝えたい言葉があつたのに、私の目からは自然と涙が溢れてきて

みんな：「」「」……「」「」

星光：「すみません、不用意な発言でした。…そろそろ時間のようにですね」

そう言った彼女の体がだんだんと光になって消えていく…

なの：「ああ!？」

星光：「・・・ありがとう・・・高町・なの・・・もし・再び・会えたら・・・その時は・・・その・時は・・・」

最後まで口にすることなく、彼女は光となり夜明けの光に溶けて消えていった。

「現在・ミッドチルダ・機動六課隊舎」

「???」・・・今の夢は、あの時の?」

それは、彼女との再会の日に見た夢だった。

なのはsideout

To Be Continue・・・

憂いを帯びて

『機動六課』。それは新たに発見されたロストロギア『レリック』とそれを狙う謎の機械兵器『ガッジエトローン』の出現。『レリック事件』と呼ばれるそれらの状況に迅速に対応するために八神はやてが立ち上げた、ロストロギア関連の任務を扱うための部隊である。

なのはside

〓 早朝・機動六課・食堂〓

朝早いので人があまりいない六課の食堂で私は溜息をついていた。

なの「……ハア」

そんな私をみかねたのか、二人が声をかけてくれた。

フェイ：「なのは、朝から元気がないけど大丈夫？」

なの：「え！？……にや、にやははは、大丈夫だよフェイトちゃん」

はや：「ほんまか？なのはちゃんは、放つといたらすぐ無茶するからね。それに、溜息ばかりついたら幸せが逃げて行くで？」

なの：「あ、あははは。はやてちゃんもありがとうね、心配してくれて」

フエイ：「それで、本当にどうしたの？相談に乗るよ？ね、はやて？」

はや「もちろんや。悩み事ぐらいいくらでも聞くで」

やっぱり二人とも凄く優しい。そんな二人と親友だなんて、それだけでも私は幸せ者なのかもしれないね。

なの：「ありがとう、二人とも。実はね……」

私は今日見た夢の内容を二人に包み隠さず伝えた。

はや：「ほうか、10年前の夢をな」

フェイ：「それで元気がなつかたんだね。10年前もあの後、なのはしばらくの間元気なかったから」

なの：「ごめんね？心配掛けちゃって」

フェイ：「大丈夫だよ、それになのはの言いたいことも分るよ。あの最後の子、他のマテリアルと明らかに違う考えを持ってたし、なによりとても純粋な目をしてたしね」

はや：「そうやね」。確かに、この微笑みからは全く悪意は感じへんしね」

そう言っただはやてちゃんは、私達の前に彼女が戦闘直後に見せたあの微笑の画像を表示した。

なの：「は、は、はやてちゃん！！この画像どこから！！？」

この画像はレイジングハートの中に隠してあったのに！？…ハッ！！

なの：「レイジングハート？これはどういつことかな！？」

レイ：「申し訳ありませんマスター、実は先日のメンテナンス時にシャーリーに画像のファイルを発見されて、さらに運の悪いことに別件で来ていたはやてにそれを見られてしまい・・・」

なの：「はーやーてーちゃーん?？」

はや：「そ、そないに怒らんでもちよつとした冗談やんか。それに、こんなええもん（画像）独り占めはようないで、なあフェイトちゃん?…あれ?返事が無い」

そういえば、さっきからフェイトちゃんが会話に交じってないような。気になってフェイトちゃんの顔を見てみると…

フェイ：「//////////」

湯気が出てもおかしくなくらいに、頬を真赤に染めていた。

なの：「フェ、フェイトちゃん大丈夫!？」

フェイ：「//////////」

はや：「こりゃあかん、完全にノックアウトや。（まあ、顔のベ-

スがなのはちゃんやからしゃあないか」

なの：「どうしようはやてちゃん？ シャマル先生呼んで来ようか？」

はや：「大丈夫や、そのうち治るて。それよりなのはちゃん、夢は夢やあまり気にしすぎたらあかんで？」

なの：「…うん。そうだね、ありがとうはやてちゃん」

確かに、はやてちゃんの言う通りだ。夢の事を気にしすぎてみんなに心配されたら教導官として恥ずかしいね。

ちなみに、フェイトちゃんの復活には数分かかりました。

なのは side out

午前中の訓練が終わり、FW陣に新たなデバイスを手渡した次の瞬間、ついにその時が来た。

機動六課中に鳴り響くアラート、それは六課にとっては初任務、FW陣にとっては初実戦を意味していた。

そして、『機動六課』と『彼女』の出会いまでのカウントダウン開始を告げる合図でもあったのです。

T o B e C o n t i n u e . . .

再会は突然に 前編

「ミッドチルダ郊外・リニアレール付近・上空 -」

フェイトside

機動六課の初任務は、成功という形で終わろうとしていました。

フェイ：「これで…ラスト！バルディッシュ！！」

バル：「プラズマランサー」

私の周りに雷の槍が形成されていく。そして…

フェイ：「ファイアー！！！」

…ズガガガガガガガ…！！！！

複数の雷の槍が、全てのガジェット・ドローン？型を貫いて爆散させる。

フェイ：「バルディツシュ、残数は？」

例え敵がいなくなっても油断はしない、それが命取りになることを知っているから。

バル：「敵ガジェット、完全に沈黙を確認」

フェイ：「うん。ありがとうバルディツシュ」

バル：「いえ、当然の事をしたまでです」

フェイ：「ふふ……」

相変わらずちょっと無口だけど、やっぱり私の最高のパートナーだ。

なの：「フェイトちゃん」

一息ついているとなのはがこちらに飛んできた。

フェイ：「なのは！！そっちは大丈夫だった？」

なの：「もちろん！！エースオブエースは伊達じゃないよ。ってね？」

フエイ：「あはは、なのはったら。それじゃあFW陣と合流しようか？あっちも終わってたみたいだし」

なの：「そうだね。不安がなかったって言ったら嘘になるけど、やっぱりあの子達全員素質があよ」

フエイ：「ふふ、さすが教導官だ《ロングアーチ1からスターズ1、ライトニング1へ！！》ッ！？どうしたのはやて！！？」

その声音から只事じゃないのがすぐ分かった。

はや：《停止中のリニアの真上から未確認の大型ガジェット出現、さらに正体不明のSSランク相当の魔力反応がリニアに急接近中や、二人とも急いでFW陣と合流してや！》

なの：「了解しました！行こう、フエイトちゃん！」

フエイ：「うん！！！」

…五人とも無事で居て!!!

フェイス side out

ヴァイス side

「3分前・リニア上空・JF704式へり内」

ガジェットも殲滅できた、レリックも回収成功、リニアも停止して任務完了だと思った。だが、リニアの真上に奴が現れた瞬間、それが間違いだとすぐに理解した。

ヴァイ：「……嘘だろ？何だよ、あれ!!!？」

それは、形状の細部こそガジェットに似ていたが、ガジェット？型の数倍の大きさのある異形の竜だった。

ヴァイ：「!?!?すぐにあいつ等に連絡を!!!」

その時、俺に出来たのはFW陣に緊急連絡を入れる事だけだった。

ヴァイス side out

スバル side

「同時刻・リニア上部」

初実戦だったから、緊張して最初は失敗した。けど、あとは中々の内容だったと思う。

スバ：「やったね！ティア！！」

ティア：「はいはい、分かったから静かにしなさい。まだ任務は終わってないんだから」

そう言っていたが、ティアの顔は少し嬉しそうだった。

スバ：「うう…分かったよ、行こうティ《お前等！！》すぐそこから

回避しろ！！！！」ッ！？ヴァイスさん！！？」

ティア：「！？スバル上！！」

ティアがそう叫んで、真上を見ると何か大きな物がすごい勢いで落ちて来ていた。

スバ：「くっ、マツハキャリバー！！」

マツハ「はい！！」

ローラーブレードを緊急駆動させてティアに向かって全力で駆ける、そしてティアを抱えて回避しようとした次の瞬間、後ろで爆音がして凄まじい衝撃が私達を襲った。

スバ・ティア「きゃあああああああ……！！！！」

スバ：「イタタタタ…」

凄い衝撃だったけど、なんとか大丈夫みたい。それより…

スバ：「ティア、大丈夫!!?」

ティア：「そんな大きな声で叫ばなくても聞こえてるわよ、バカスバル!!」

スバ：「無事でよかったよ。…それにしてもいったい何が?」

周りは粉塵が舞っていて何も見えない。

ヴァイ：《・・・お・・・い・・・おい!無事か!!!?》

スバ：「はい!二人とも無事です!エリオとキャロは!?」

ヴァイ：《二人ともフリードに乗って離脱したから無事だ!隊長達が向かってる、二人とも急いで退避しろ!今、そこに落下したのは未確認の新型ガジェットだ!!》

その言葉を聞いた瞬間粉塵が晴れ、私が見たのは数十メートル先で顎門を開き、私達に収束砲を放とうとしている竜の形をした異形のガジェットだった。

「あ・・・」

その声を発したのは私だったか、ティアだったのかは分からない。けど、確かなのは私達は『助からない』ということだった。その思考に達した時、奴の口から『それ』は放たれた。そして、凄まじい閃光と共に放たれた魔力光が、私達を飲み込もうとした瞬間その声は聞こえた。

????:「ルシフェリオン!!!」

ルシ:「はい！オーバルプロテクション!!!」

…ズガガガガガガガガガ!!…

音が止んで、眼を開けて前を見ると、私の憧れの『あの人』にとてもよく似た女性がほんの少しだけ微笑みながら声をかけてきた。

???：「大丈夫ですか？」

こんな状況なのに、私はその顔を見てなぜか鼓動が早くなるのを感じた。

これが、私の二人目の憧れの人になる『彼女』との出会いでした。

スバル side out

To Be Continue . . .

再会は突然に 後編

星光の殲滅者 side

「ミッドチルダ郊外・リニア上」

星光：「…ふう、何とか間に合いましたか。ルシフェリオン、彼女達に怪我は？」

ルシ：「マイロードが守ったのですから、もちろん大丈夫です」

私の質問にパートナーがそう答えた。

星光：「（少々、過大評価な気もしますが）そうですね、では早々にこの木偶を片づけるとしましょうか？」

そう言って、私は突然出現した私を警戒している機竜にデバイスを向ける。

スバ：「あ、あの!!」

唐突に、助けた2人の内の蒼い髪の少女が声を掛けてきた。

スバ：「じ、時空管理局機動六課所属スバル・ナカジマです！」

すると、橙色の髪の少女も。

ティア：「お、同じくティアナ・ランスターです！貴女の所属を答えて下さい、黙秘する場合は拘束します！！」

死の恐怖を体験したからか、少々前後不覚になっているようですね。すると…

ルシ：「まったく、時空管理局が聞いて呆れますね。状況を把握できていれば今すべきことは何なのか、馬鹿でも分かりますよ？」

ルシフェリオンは2人を罵倒した。

ティア：「なっ！！？」

ランスターと名乗った少女は亜然としている。勿論、ナカジマと名乗った少女も同じ様な反応をしている。そして私は…

星光：「ルシフェリオン言い過ぎです。ですが、2人共彼女の言った通りですよ。今、あなた達がすべきなのは私の素性を追求する事ではなく、これ以上の被害をどう抑えるかでしょう？」

そう諭すと、彼女達はなんとか落ち着いたようで…

ティア：「…そうですね、すみませんでした。命も助けて頂いたのに」

スバ：「す、すみません」

星光：「いえ。！！…2人共下がっていて下さい。あちらも痺れを切らしたようです」

スバ・ティア：「「！！？」」

どうやら様子見を止めたのか機竜が攻撃態勢に移行していた。

星光：「あなた達はそのケースを確保するのが任務でしょう？離脱して下さい」

スバ・ティア：「「でも！！」」

星光：「いいから、任せて下さい、ね？」

そう言って微笑むと2人は…

スバ・ティア：「ハ、ハイ！！／／／／／／／／／／」

顔を真っ赤にして頷いた。

星光：「……では、いきますよルシフェリオン？」

ルシ：「イエス、マイロード！！（またフラグ立ててる！？）」

スバ：「で、ではお気を付けて！！」

ティア：「行くよ、スバル！」

そう言うって2人はナカジマの足元から発生した蒼いレールの上を走って離脱していく。

それに気付き機竜が2人に向けて背中 of 砲門から魔力弾を放つ。

星光：「ルシフェリオン！！」

ルシ：「プロテクションEX！！」

…ズドオオオオオン…！！！！

私は射線上に入って障壁を張り攻撃を防ぐ。

星光：「他の者に目移りするとは図々しい木偶ですね、貴方の相手はこの私『星光の殲滅者』です。…貴方は私の心を滾らせてくれますか？ルシフェリオン！！」

ルシ：「オールライト！パイロシューター！！」

その声と共に私の周りに幾つもの魔力球が発生する。そして…

星光：「シュート！！！！」

幾つもの光の軌跡を残して魔力弾が機竜に殺到する。しかし…

星光：「む…」

その全てが分解されて打ち消される。

ルシ：「マイロード！あの機体の周りにアンチマギックフィールドが発生してます」

星光：「なら、それに合った戦い方をするまでですね」

あの破壊不可能と言われた防衛プログラムでさえ絶対ではなかった、ですからこの世に絶対の物などありません。

こちらの攻撃が通らなかったことに、勢いづいたのか機竜が砲撃を連射する。

ルシ：「パイロフィン！」

高速機動補助魔法を使い全ての砲撃を回避する。

星光：「魔法が通らないなら通す攻撃をするまで！！ルシフェリオン、モードブラスト！！」

ルシ：「ブラストモード！！」

砲撃モードになったルシフェリオンを構えて収束魔法を放つ。

ルシ：「ブラスト！」

星光：「ファイアー！！」

放たれた収束砲は機竜の遥か上方に向かって飛んで行く。それを見た機竜は嘲笑うかの様に顎門を開きこちらに収束砲を放とうとする。

星光：「…ふっ。やはり所詮は木偶ということですね」

…ズガアアアアン…！！！！

リニアが走る側面の崖が収束砲によって削られ大小様々な岩石が落ちてくる。機竜も気付いて砲撃を中止して今居る場所から飛び退こうとする。ですが…

星光：「もう遅い！！ジャッジメントー…」

カートリッジを2発消費して、落下している岩石に物質加速魔法を掛ける。そして…

星光：「フオール！！！」

…ズガガガガガガ…！！！！

加速した岩石が逃げ遅れた機竜を、決り、潰し、破壊していき、粉塵が舞った。

そして粉塵が晴れた後には原型を残していない機竜の姿があったのみだった。

星光：「…終わりましたね。やはりこの程度では心滾る事はなかったですが」

ルシ：「お疲れ様で！？マイロード！AAランクの魔力反応が2つ接近中です！！」

星光：「!？」

その声で振り返ると、遙か上空に私が再び見えたかった白いバリアジャケット着て魔導師の杖を持った魔法少女が居た。

そして、先程助けた少女達と話している『彼女』に声をかけた。

星光：「お久しぶりです、高町なのは」

星光の殲滅者 side out

そして、物語は初まりを迎える。

To Be Continue...

友達の定義

「ミッドチルダ郊外・リニアレール付近上空」

なのはside

はやてちゃんの緊急連絡を受けて、私達はFW達の元へ急行していた。すると、並んで飛んでいたフェイトちゃんから念話が届いた。

フェイ：《完全にしてやられたね》

なの：《うん。あれだけ広範囲に広がっていたのは、私達をリニアから引き離して本命のガジェットを投入するためだったんだ。けど…》

フェイ：《けど？》

なの：《うん。さっきヴァイス君から送られてきた、新型ガジェットが出現した時の映像を見たけど、あの大きさと移動速度がかなり遅いはずなのにリニアが止まった次の瞬間に崖の上から現れる。まるで、リニアがどこで止まるか分かっていたかの様に》

フエイ：《確かにちよつと気になるね。でも、今は皆の所に急ごう。強力なジャミングがかけられているのか、最初の画像以降の状況が分からないし》

なの：《そうだね、ごめん。急ごう！》

そう言った次の瞬間、リニア付近から強大な桜色の魔力光が見えた。

なの・フエイ：「「！！？」」

レイ：「今の魔力反応は99・9%の確率でマスターと酷似しています！」

私達が驚いているとレイジングハートがそう報告してくれた。

なの：「（私と同じ魔力反応で同じ色）…まさか！！？」

ある可能性に思い至り飛行スピードを最大まで上げる。

フエイ：「なのは！？」

フェイトちゃんが驚いているが、今は急いで確認しないと。

数分後、黒煙の上がつているリニア付近に着くと空中に待機しているFW陣を見つけた。

なの・フェイ：「みんな！！」

スバ・ティア：「なのはさん！！！」

エリ・キャロ：「フェイトさんも！！！」

みんな少し不安だったのか安堵の表情を浮かべている。

なの：「みんな無事で良かったよ」

フェイ：「それで、リニア停止後に現れた新型ガジェットは？」

ティア：「…それが、私達は強襲に対応できずに撃墜されそうになったんですが」

スバ：「その時に私達を助けてくれた人がいて、その人が此処まで逃がしてくれたんですが……」

スバルはすごく言い辛そうにしている。

なの：「どうしたの、スバル？」

そう言うとティアナが代わりに答えてくれる。

ティア：「そ、それが、雰囲気は違いますが。デバイスとバリアジャケット、そして顔がなのはさんにどことなく似ているんです」

なの・フエイ：「！！！？」

私の考えが確信に変わろうとした時…

エリ・キャロ「あっ！！！？」

話の蚊帳の外だったライトニングの2人が私達の後方を見て声を上げる。

そして私達が振り向くと、そこには私と色違いの黒と紫のバリアジヤケットを身に纏った短髪の私とよく似た顔の女性が立っていた。

??：「お久しぶりです、高町なのは」

そう言った彼女は10年前と同じように少しだけ微笑んだ：

なのはsideout

星光の殲滅者

声をかけるまでは良かったが、まったく反応がない。むしろ啞然としている。

星光：《無理もありませんね。消えたはずの存在が突然成長した姿で現れて挨拶しているのですから》

そう、ルシフェリオンに念話を飛ばす。

ルシ：《マイロード、蘇った理由を聞かれた場合はどうします？》

星光：《そ、それは考えていませんでした。しかし、私自身にも分からない事を説明しようがありませんよ？》

ルシ：《怪しまれるのは承知の上で、そう言って頂く他ないでしょう。最悪、何らかのロストログアが原因ではと主張しましょう》

念話で会話していると、やっと彼女が声をかけてきた。

なの：「あ、あの本当にあなたなの？」

星光：「ええ、あなたと10年前に戦った『星光の殲滅者』です。こうしてまた再び見える事になるとは思ってもみませんでした」

なの：「うん！私もだよ！…でもどうしてあなたが？」

彼女は目に涙を浮かべながら、聞いてきた。

星光：「その話は後でしましょう。高町なのは、貴女にお願いがあるのですが聞いて頂けないでしょうか？…10年前にも最後に言うとした事なのですが」

なの：「え？…うん、分かった言ってみて？」

そう言ってもらったのはいいのですが、改めて考えるとなんだか恥ずかしくなってきました。

星光：「えっと、その、だから…あの／／／」

しどろもどろになって、顔が赤くなってくるのが分かる。すると、彼女も…

なの：「／／／／／…どうしたのかな？大丈夫？」

何故か顔を赤くして近づいて来て心配そうに聞いてくる。（他の人達もなんだか顔が赤いし、待機状態に戻したルシフェリオンも激しく明滅していますね。）

星光：「（うう、何を恥ずかしがっているのでしょうか？何時も通り冷静に冷静に）…あ、あの！わ、私と友になって頂けないでしょうか！？」

聞いたのはいいのですが、顔が熱くなってまともに彼女の顔が見れ

なくて下を向いてしまう。

そして彼女が何かを言いかけた時、耐えられない程の痛みが全身を襲い自分の体が自分のものじゃないような感覚に陥り、何も聞こえなくって飛行制御が出来なくなり落下していくのが分かる。

誰かの悲痛な声が聞こえて、暖かい何かに体が包まれた瞬間、私は意識を手放した。

星光の殲滅者 side out

「ミッドチルダ・???」

???：「刻印ナンバー?、護送態勢に入りました」

小さなモニターに映る女性が喋る。

???：「ふむ」

その声を聞いて反応したのは巨大なモニターを前に一人佇む白衣の

男。

???：「追撃戦力を送りますか？」

女性がそう問うが…

???：「やめておこう。レリックは惜しいが、彼女たちのデータが取れただけでも十分さ」

白衣の男が意見を却下する。すると、巨大なモニターが別の画面へと切り替わりそこに映っていたのは戦闘中の機動六課の魔導師達。

???：「それにしても、この案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって興味深い素材が揃っているうえに…」

そして今度はモニターにフェイトとエリオが映し出される。

???：「この子達を、生きて動いている『プロジェクトF』の残滓を手に入れるチャンスがあるのだからね。そして…」

モニターがさらに切り替わり映し出されたのは、今回の事件に突如介入してきた『星光の殲滅者』だった。

??：「あの情報に記されていなかった存在、ぜひとも彼女も手に入れたいね。今回の事で未来が少しでも変わるのか非常に興味深いよ。くくく……」

その笑みは自分の欲望を満たすためなら何でもする、そういう類のものだった。

T o B e C o n t i n u e . . .

貴女の名前は

なのはside

「機動六課・部隊長室」

あれから事後処理をフェイトちゃん達にまかせ、突如苦しみだして墜落しかけた彼女をヘリに乗せて機動六課に急いで戻った。

搬送中に容態は落ち着いたので今は治療室でシャル先生に診てもらっている。

さっきまで彼女の傍に居たのですが、はやてちゃんに呼ばれたため事後処理を終えて帰ってきたフェイトちゃんと合流して部隊長室に入った。

なの：「スターズ1、高町なのは一等空尉入ります」

フェイ：「同じくライトニング1、フェイト・T・ハラOWN執務官入ります」

一応、形式上の挨拶をして入室する。

はや：「2人共お疲れ様や。そないに堅苦しい挨拶せんでもええよ」

リン：「お疲れ様です」

はやてちゃんが苦笑しながら返答する。

シグ：「しかし主はやて、そういう事は例え形式上とはいえしつかりやるべきかと」

はやてちゃんのデスクの傍に立っていたシグナムさんが、それを聞いて発言する。

はや：「うつ！…ま、まあええやないか今ここに居るのは皆身内みたいなもんやし」

ヴィー：「はやての言う通りだぜ、シグナム。あんまり堅苦しいのもどうかと思うぜ？」

するとソファアに座って、その会話を聞いたヴィータちゃんが苦笑しながら言う。

シグ：「むう、しかしだな…」

微妙な空気になる部隊長室。

なの：「まあ、その話は置いて。任務報告を先にしようか？」

私の一言で、なんとか空気が払拭できた。

シグ：「確かに。すまん高町、テストロッサ」

ヴィー：「すまねえ」

はや：「そうやね。…じゃあ、報告を聞こか？」

フェイ：「まず、ガジェットは全機撃破。そして、肝心のリニアで密輸されていたレリックも無事確保し本局に移送され嚴重封印中です。問題は…」

はや：「リニア停止後に現れた？型とは別の竜型のガジェットやね？」

はやてちゃんが厳しい顔をして尋ねる。

フェイ：「…うん。竜型のガジエットの戦闘能力は映像を見ても分かるけど、問題なのは竜型の動力源にレリックが使われていた事なんだ」

全員：「「「！！？」」「」」

その場にいたフェイトちゃん以外の全員が驚愕する。

はや：「…それで、そのレリックは？」

フェイ：「リニアのレリックと一緒に封印中です。けど、動力炉と付近の回路は解析されない様に自壊されていました」

はや：「…さよか。厄介な奴が出てきたもんやな」

シグ：「確かに、今のFW陣では荷が重い相手ですね」

ヴィー：「今後、奴が出てきたら私等が戦うしかねーな」

今度は空気が重くなる。

なの：「みんな！そんな暗い顔してちゃ、FW陣も他の人達も不安になるよ？こんな時こそ私達がしっかりしないと」

フェイ：「なのはの言う通りだよ。みんなもつと毅然としなくちゃ」

はや：「そやね」シグ：「そうだな」ヴィー：「だな」

それぞれが頷く。

はや：「さて、気を取り直して。今回の一番の問題は『彼女』やね。シャマル？」

そう言うとシャマルさんと『彼女』のいる医療室と通信が繋がる。

シャマ：《あ！はやてちゃん。どうしたんですか？》

はや：「うん、彼女の診断終わったかと思てね」

その言葉を聞いたシャマルさんが難しい顔をする。

なの：「どうしたんですか？彼女に何か？」

私も不安になりそう尋ねる。

シャマ：《…いえ、健康面では全く問題ないんですが》

シグ：「だったら何が問題なのだ？」

ヴィー：「そうだが、スバルとティアナはあいつのおかげで命を落とさずに済んだんだぜ。問題がないならいいんじゃないか」

リン：「本当です。2人が無事でよかったですよ」

フェイ：「まあ、どうして消滅したはずなのに存在しているのかという疑問は残るけどね」

シャマ：《問題がないのが問題なんです》

なの：「どういう、意味ですか？」

シャル先生の言っている意味が分からない。

シヤマ：《彼女は私と同じプログラムです。ですが、精密検査をしたら彼女の身体ははやてちゃん、なのはちゃんと同じ完全に人間だったんです》

全員：「「「！！！？」」「」」

その事実には部隊長室に居た全員が驚愕する。

シグ：「どういう事だ？ 奴は種類は違えど私達守護騎士と同じプログラムのはずだ」

はや：「そやね、その事も含めて彼女にはいろいろ聞かなあかね」

『彼女が目覚めるのを待つ』それが私達が今できる判断でした。

なのは side out

星光の殲滅者 side

Ⅱ 2日後・機動六課医療室Ⅱ

私が目を覚ました時、始めに見たのは白い天井で。

星光：「…ここは？」

起き上がると、色々な医療機器が置かれた白を基調とした部屋でした。

星光：「どうやら、何処かの医療施設の様ですね」

???：「あら？起きたんですね、体におかしな所ないですか？」

声をかけてきたのは、白衣を着た金髪の女性でした。

星光：「…あなたは、確か」

???：「夜天の書の守護騎士が1人『湖の騎士・シャマル』です。

お久しぶり、というのも変ですか？」

星光：「ふふ、確かにそうかもしれませんがね。…」
「ナデナデ」何で撫でるんですか？／／／

頭を撫でられて、何故か顔が熱くなる。

シャマ：「あら、嫌でした？」

星光：「いえ、その、こういう事をされるのは初めてなもので、すみません／／／」

その時ドアが開いて、高町なのはが急いだ様子で入ってきた。

なの：「シャマル先生！彼女が目覚めたって・本当・です・…かな？」

そしてシャマルに頭を撫でられている私を見て固まった様に動けなくなる。

なの：「シャマル先生、何で彼女の頭を撫でてるのかな？（黒笑）」

何故か背後から黒いオーラを出す高町なのはを見て顔を青くして震えるシャマル。

シャマ：「そ、それじゃあ先にはやてちゃんの所に行ってるわね！
？（逃）」

何かから逃れる様に部屋を退室するシャマル。

なの：「体、大丈夫？」

そして彼女は黒いオーラを引っ込めて、私を心配してくれる。

星光：「ええ、全く問題ありません。…あの、心配してくれてありがとうございます。／／／」

なの：「う、ううん！？気にしないでいいよ、だって『友達』でしょ？／／／」

そう言って彼女はあの時の問いに応えてくれた。

星光：「！？…いいのですか？私は敵だったのですよ？」

まだ半信半疑で、そう聞いてしまう。

なの：「そんなの関係ないよ。私の大事な仲間も守ってもらったし。それに、何より私が『あなた』と友達になりたいんだ／＼」

星光：「あ・ありがとうございます、高町なのは／＼」

そう言った私の顔は赤くなり、目からは一筋の涙が零れた。

なの：「うん、こちらこそ。あっ！あと、名前で、『なのは』って呼んでくれる？」

星光：「分かりました、なのは」

なの：「うん」…そういえばあなたの名前どうしよう？何時までも『星光の殲滅者』って呼ぶ訳にもいかないし」

確かにその通りですね。

星光：「では私はあなたに、なのはに私の名前を決めていただきました
いのですが？」

私は自然と、そう提案していた。

なの：「え！？…私でいいの？」

星光：「ええ、なのはだからお願いしたいんです」

なの：「分かった。考えておくね」

私の真剣な想いを察してくれたのか、彼女は了承してくれた。

なの：「それじゃあ聞きたい事もあるし、一緒に来てもらえる？」

遂にきましたか。…あれ何か忘れているような。

星光：「あっ！そう言えばルシフェリオンは！？」

つい、忘れてしまいました。

なの：「ふふ。大丈夫、先に部隊長室に持っていつてもらったから（笑）」

星光：「そ、そうですか。では、行きましょうか？」

そう言って私はなのはと連れ立って医療室を出た。

〓数分後・機動六課部隊長室〓

私が入室するとそこにはフェイト・T・ハラウン、八神はやて、そしてその守護騎士達とユニゾンデバイスが居た。

はや：「病み上がりやのにごめんな。あと、先に大事なパートナー返しとかなあかな。フェイトちゃん？」

八神はやてがそう言うのとフェイト・T・ハラウンが傍に来てルシフェリオンを差し出してくれた。

星光：「感謝しますフェイト・T・ハラウン。ルシフェリオンもお待たせしました」

ルシ：「いえ！私はマイロードが無事ならばそれだけで…」

星光：「ありがとう、ルシフェリオン」

はや：「再会を喜んだる所悪いんやけど、話聞かせてもらってもええか？」

星光：「ええ、お役に立てるか分かりませんが」

それに答えられない事もありますしね。

はや：「ありがとな。じゃあ、1つ目の質問や。なぜ10年前に消滅したはずのあんたが存在し、しかも私等と同じくらい成長してるかやね」

この質問は皆さん気になるようで耳を傾けている。

星光：「すみませんがそれは分かりません。私の記憶は10年前に消滅した瞬間で途切れています。それに、目覚めた時にはこの姿でリニアールの近くの森の中で倒れていました。まあ、推測だけするなら何らかのロストログアが原因かもしれません」

嘘は言っていないませんが、さすがに皆さん懐疑的な目をしていますね。

はや：「分かった。2つ目の質問や。あんたが倒した竜の形をしたガジェットドローンに関して何か知つとる？」

星光：「竜の形をした？…ああ！あの木偶人形ですか。あれはガジェットドローンと言つのですか？」

はや：「その口振りやとほんまに知らんみたいやね。じゃあ、最後に1つだけ何でスバルとティアナを助けてくれたん？」

おそらくそれが1番重要な質問なのだろう、八神はやてそれに他の皆さんも顔が真剣です。

星光：「…八神はやて、あなたは目の前で誰かが傷つこうとしているのを黙って見過ごせますか？それが答えです」

私はそう言つて真つ直ぐ彼女を見つめ返した。

はや：「…ごめんな、意地悪な質問やったわ。そこで、1つ提案があるんやけど、あんたに囑託魔導師になつてもろて機動六課に力を

貸し欲しいんや」

星光：「！！？…本気ですか？」

はや：「本気も本気や。あんたが寝とつた間にみんなで決めたんや、最終的な判断は最後の質問でしたんやけどな。文句なしの合格や」

そう言つて皆さんが頷く。

はや：「まあ、本音を言つと理由は2つある。1つ、あんたが人間の体で生き返つた（？）理由も気になるけど、それを考えると本局に引き渡すのは危険やと感じた事。2つ、新型のガジェットの事もあるから戦力増強の意味合いもあるんや」

確かに理には適っている、けど…

星光：「…本当の理由は、私の監視ですか？」

はや：「！！？…確かにそれもある。やけど信頼関係を築くには時間がかかる、そのためにもこの話引き受けて欲しいんや。もし引き受けてくれるんやったら衣食住とかその他諸々ちゃんと面倒みたるで？」

確かに理由があつたとはいえ、敵対していた彼女達から信頼が得られるとは思っていません。

なの：「大丈夫、私は信じてるから」

そう考えていると、なのはが優しく声をかけてくれた。

星光：「なのは…」

正直な所、八神はやての提案は正直ありがたかった。確かに、管理局の本局に連行されたら身動きを取れなくなる上に身体検査と称して何をされるかわからない。さらに、あそこで彼女等と出会ったのは偶然とは思えない。

…何より私は此处に居たい、彼女達と共に居たいと思っている。

星光：「…その提案お受けします。よろしく願いします八神はやて」

私は頭を下げてそう言った。

はや：「そうか！ありがとな引き受けてくれて。あと、一応自己紹介もしてこか。私は八神はやて、階級は二等陸佐や。なのはちゃんのこととも名前で呼んどるみたいやし、はやてでええよ。」

彼女がそう言うのと全員が次々と自己紹介していく。

フェイ：「フェイト・T・ハラOWN執務官です。私もフェイトでいいよ」

シグ：「シグナム二等空尉だ。シグナムでいい」

ヴィー：「ヴィータ三等空尉だ。私もヴィータでいい」

シャマ：「シャマル医務官です。シャマル先生って呼んで下さい」

ザファイ：「ザファイラだ」

リイン：「私ははやてちゃんのユニゾンデバイスでリインフォース？空曹長です。リインって呼んで下さ

いっ」

やはり守護騎士達は私を警戒しているのか少し口調が固い。（シャ

マルとリインは例外のようですが。）

フェイ：「あと、あなたの名前も決めなくちゃ。『星光の殲滅者』だと色々問題あるし。」

自己紹介が終わると、フェイトがそう提案した。

星光：「それについてはなのはに一任しましたよ」

なの：「うん。それでどんな名前がいいか考えてたんだけど、1つ名前を思いついたの」

なの：「あなたの名前は『セイカ星華』、輝く『星』の様に美しい『華』と書いて『星華』だよ」

星光：「『星華』。・・・それが私の名前」

私は自分の名を呼んでみる。

なの：「…気に入ってくれた？」

なのはが不安そうに聞いてくる。

セイ：「はい、とても気に入りました。なのは、この名前は必ず大切にします」

セイ：「ありがとう！」

私はそう言って、今出来る精一杯の笑顔で彼女に応えた。

その後、何故か皆の顔が赤くなっていたのは何故でしょう？

星華 side out

To Be Continue

死力尽くして 前編

星華 side

〓 早朝・機動六課隊舎 〓

朝起きると体が全く動かなかった。

また、体の調子が悪くなったのかと心配したのですが、どうやら違った様です。

何故なら、私の体はなのはとフェイトに抱き枕の様に腕を回されていたからです。

自身の状況を理解したと同時に昨日の出来事が思い起こされた。

〓 昨日・機動六課部隊長室 〓

今後の予定の打ち合わせも終わり、解散しようとしたところで問題が発生した。

今日、私が何処で寝るかという事だった。

はや：「あかん！肝心な事忘れとったわ。…うん、どないしよう。
実は今、空いてる部屋がないんよ」

セイ：「問題ありません。毛布さえ貸してもらえれば何処かのソファで寝ますので」

そう言った瞬間。

なの・フェイ：「「そんなの、ダメ！！！」」

なのはとフェイトが少し怒った様子で顔を近づけてくる。正直な所かなり怖い。

セイ：「だ、大丈夫ですよ」

2人のあまりの迫力に思わず体が下がる。

しかし、彼女達はさらに迫ってきてダメ押しで

なの・フェイ：「「ダ・メ」」

セイ：「ハ、ハイ！」

思わず返事をしてしまう。（この2人に逆らえる人っているの
でしょう？）

はや：「まあ、落ち着きや2人共。けど、セイカちゃんも女の子と
しての自覚をもうちよつと持ちや？」

はやてが苦笑しながら言う。

セイ：「???…分かりました？」

よく分かりませんが一応頷いておく。

はや：「なんで疑問形!?…まあええわ、とりあえず今日はうちの
部屋に泊まるか?（そのなのはちゃんに勝るとも劣らへん体を触れ
るしな♪）」

そう言った、はやての顔はすごく爽やかだが、何故か背筋に悪寒が走る。

本能がはやての部屋に行つてはいけないと警告している。だが、断る理由にはならないので正直焦る。

なの：「駄目だよ、はやてちゃん…」

天の救いだと思った。しかし…

なの：「だつて、セイカちゃんは私とフェイトちゃんの部屋で一緒に寝るんだから」

どうやら勘違いだったらしい。

はや：「ええ」。そんなんずるいで、なのはちゃん（せつかくのお触りが！）

はやてが不満の声を挙げる。その言葉を聞いた瞬間なのはとフェイトの背後から黒いオーラが噴き出て部屋の空気が凍る。

なの：「何か言った、はやてちゃん？（はやてちゃんの考えてる事

なんて丸わかりだよ？」（黒笑）

はや：「いえ！？何でもありません！！（怖！）」（泣）

はやては涙目になりながら返事をする。他の人達も部屋の片隅に集まって震えている。正直私も体が凍りついた様に動かない。

フェイ：「セイカも私の部屋でいいよね？」（黒笑）

その誘いを断れるわけもなく私はなのはとフェイトの部屋で寝ることになった。

とりあえず、今後なのはとフェイトには逆らわない様心に誓った。

〓 現在・機動六課隊舎 〓

なんとか2人を起こさずにベットから抜け出し周りを見る。

最初部屋に入った時も驚いたが、隊舎の部屋がこんなに広くていいのかと改めて思う。

そして、ブラインドを少し開けた先に綺麗な海を見た私は自然と外に向けて足を進めた。

〓機動六課訓練場付近〓

心地のいい海風が吹いている。

今、私は海辺の手すりに手について海から吹きつける風に身を任せ
ていた。

セイ：「気持ちのいい朝ですね。そう思いませんか、ルシフェリオ
ン？」

首にさげている大切なパートナーに声をかける。

ルシ：「ええ。私には風を感じることは出来ませんが、この風景は
素直に美しいと思えます（もっともこの世で一番美しいのはマイロ
ードですが。・・・ああ、海風に吹かれる御姿も美しい、この画像
も隠しファイルで永久保存です）」

同意してくれるのは嬉しいのですが、何故かルシフェリオンから邪念が溢れ出ている気がした。

????:「ああー!!」

ふと後方から声が聞こえ、振り向くと並木道をなのはとフェイトが走ってきた。

なのはは少し息切れしている。

セイ:「2人共どうしたのですか?そんなに慌てて」

不思議に思いそう声をかける。次の瞬間、地雷を踏んだ事を理解した。

なの:「だ・れ・が・心配かけたと思ってるのかな?」(怒)

なのはに両頬を軽く引つ張られる。

セイ:「イヒヤイ!イヒヤイ!ヒヤメテクダヒヤイ!!」

軽くだが、痛いものは痛いのです。思わず涙が出て来てしまっ。

ルシ：「そろそろ止めて頂けますか？高町なのは／＼／＼（痛がつて涙を浮かべるマイロードも可愛らしい！）」↑病気である

フェイ：「そうだよなのは。セイカも痛がつてるし、ね？／＼／＼（うう、涙を浮かべる顔を可愛く思う私ってorz）」↑やや病気である

なの：「そ、そうだね。ごめんねセイカちゃん？／＼／＼（な、何だか涙目のセイカちゃんを見てるとゾクゾクして止められなかったけど何でだろ？）」↑無自覚な末期である

セイ：「うう、痛かったです」

頬に手をやると、引っ張られた所が少し熱かった。

そしてなのはとフェイトは顔を赤くし、ルシフェリオンに至っては触れられないくらい熱くなっていた。

何故？

なの：「本当にごめんね？…でも、セイカちゃんだって悪いんだよ？何も言わずに居なくなるんだから」

確かに伝言もなしに出てきたのは軽率でした。

セイ：「…すみません、以後気を付けます」

なの：「うん、分かってくればいいの」

フエイ：「…じゃあ、この話はここまで。なのはこのまま教導、セイカは私と先に朝食を食べてからシャマル先生に診てもらって問題がなかったら午後からウォーミングアップしてもらって明日にでも囑託魔導士試験を受けてもらいたいんだ」

フエイトが話を切り替え、今後の予定を聞かせてくれる。

なかなか無茶苦茶なスケジュールですね。

なの：「でも、試験って筆記テストもあるんだよね？セイカちゃんは大丈夫？」

セイ：「その点は問題ありません、元『理のマテリアル』は伊達ではありませんよ?」

魔法関係の知識に関しては、かなりのものと自負していますからね。

なの：「セイカちゃんがそこまで言うなら問題ないね。頑張って!」

セイ：「任せて下さい。あと、フェイト?午後からのウォーミングアップには屋内施設があればそれをお借りしたいのですが。いろいろ試したい魔法があるので」

10年前と同じ魔法と戦い方では恐らく勝てませんからね。

フェイ：「分かった。はやてに伝えておくね?」

今日はなかなか忙しくなりそうですね。

セイ：「サポートお願いしますね?ルシフェリオン。」

ルシ：「勿論です、マイロード。」

さあ、頑張らしようか！

星華
side out

To Be Continued . . .

死力尽くして 中編

「機動六課訓練室」

なのは side

セイカちゃんの試験当日、私は次の模擬戦の準備を終え2次試験の儀式魔法試験が行われる訓練室の前で彼女の様子を見ていた。

訓練室ではセイカちゃんがバリアジャケットを展開し、足元に魔法陣を発生させて詠唱の準備をしている。

??：「おや、なのはちゃんやないか？どないしたん？訓練場の方の準備は出来たん？」

後ろから声がかかり振り向くとはやてちゃんとリインが居た。

なの：「あーはやてちゃん、リインも。うん、訓練場の準備が早くできたからセイカちゃんを迎えに来たついでに2次試験の様子を見に来たんだ」

本当はセイカちゃんが気になって急いで準備したんだけどね。

リン：「そうなのですか、お疲れ様です」

なの：「ありがとう、リンもお疲れ様。それで、はやてちゃん？
筆記試験はどうだったの？」

昨日の様子を見る限り大丈夫だと思うけど。

はや：「なのはちゃんはほんま心配性やな。大丈夫や、彼女の試験結果はほぼ満点やったから安心しい」

その言葉を聞いてとりあえず安心した。

私を見てニヤニヤしているはやてちゃんには後でお仕置きなの。

リン：「あ！はやてちゃん、なのはさん、セイカさんの準備でき
たみたいですよ」

それを聞いてセイカちゃんの方を見ると、確かに準備が終わっているようだった。

はや：「そうみたいやね。ほな、うちは最後の確認に行ってくるわ。
なのはちゃんとリインはここにおってな？」

リイン：「はいです」なの：「分かったよ」

そう言って訓練室に入って行くはやてちゃんを見送り再び彼女に目を向ける。

そして、心の中でセイカちゃんにエール送った。

『頑張つて』と。

なのはside out

星華side

儀式魔法の準備も終わり、試験開始を待っているとはやてが近づいてきた。

はや：「セイカちゃん、準備の方はええか？もし緊張しとるんやっ

たら体ほぐしたるで？」

そう言っではやてが指を怪しく動かしながら尋ねてくる。

今のはやてからは邪な気配を感じますが、同時に心配もしてくれているようです。

少し分かりにくいですが。

セイ：「ありがとうございます、はやて。心配してくれて嬉しいです」

そう言っで微笑むと…

はや：「さ、さやか／＼／＼／＼（無自覚なんやろうけど、その笑顔は反則やでー！？）」

はやては顔を真っ赤にしていた。

セイ：「????大丈夫ですか？顔が赤いですよ？（今の会話で顔を赤くする要素がありましたか？）」

さすがに心配になりはやての額に自分の額を当てる。

ルシ：「マ、マイロード！（な、なんて羨ましい！ふ、ふふふ。
これで八神はやてもブラックリスト入りですね）」

はや：「！？…だ、大丈夫やから心配せんでもええよ！？／／／／
／／／／（もう無自覚とかそういうレベルとちゃうで！？）」

セイ：「そうですか（さらに酷くなっている気もしますが）」

本人がそう言うのならと、彼女から離れる。

【ちなみに、はやては気付いてなかったが訓練室の外で禍々しいオ
ーラが発生していたのは余談である。この日の夜、訓練場から部隊
長の悲鳴が上がったのは言うまでもない】

はや：「ほ、ほな！時間も無いし始めよか！」

その言葉を聞き気持ちを切り替えて意識を集中する。

セイ：「…では、いきます。―我、星光の殲滅者『星華』の名のもとに召喚する。盟約を結びし加護の名を持つ気高き竜よ、我が求めに応じ顕現したまえ！汝、守護せし者『トロイメライ』！…」

【詠唱が終わると同時に前方の地面に漆黒の魔法陣が展開され、中から鋼の様な肉体を持った黒竜が姿を現した。その威容はまさしく守護者と呼べるもので、顔は厳つくはあるがその眼は全てを見通すかの様な神秘的な眼をしていた。そして竜は顎門を開き言葉を紡いだ】

トロイ：「昨日^{おけい}ぶりだなセイカよ。これが汝の言っていた試験とやらか？」

セイ：「申し訳ありません、トロイメライ。本来ならこのような事でお呼びすべきではないのですが」

トロイ：「かまわんよ。汝は我が認めた盟友だ、気にするな」

セイ：「ありがとうございます。…はやて？彼を送還したいのですが、よろしいですか？」

一通りの会話を終え、トロイメライを見て呆然と立ち尽くしているはやてに声をかける。

はや：「…あ、ああ！データは十分取れたから試験終了や」

試験終了を告げられ再びトロイメライに向き直る。

セイ：「トロイメライ、協力感謝します」

トロイ：「なに、また困った事があれば何時でも呼び出すといい」

セイ：「はい。では送還します。ルシフェリオン？」

ルシ：「オールライト。――送還――」
そうかん

再び魔方陣が現れ、竜の体が少しずつ飲み込まれていく。

トロイ：「セイカ、次に見える時を楽しみにしているぞ」

そう言い残し彼は元の世界へと帰っていった。

「機動六課訓練場付近」

模擬戦を行う訓練場に向いながら、はやて達はトロイメライについて話していた。

はや：「いやゝ、えらいもん見せてもうたわ」

リン：「元の姿のフリードより大きかったですゝ」

なの：「確かに見た目は凄く大きくて少し怖かったけど、とても優しい眼をしていたよ」

はや：「それにしてもセイカちゃん、ようあんなすごい竜を召喚できたなゝ。あの竜、魔力反応オーバースやったんやで？」

試験が終わった後、データを見て3人共驚いていましたからね。

セイ：「召喚する事自体は比較的簡単だったんですが、契約を結ぶための条件に問題があったんです」

なの：「条件？」

セイ：「ええ、制限時間内に彼が発生させた障壁を抜いて彼の体に直接ダメージを与える事が条件でした」

はや：「な、なんやえらい原始的な契約のしかたやな。けど、障壁を抜くだけなら割と簡単やと思うんやけど？」

確かに普通はそうかもしれない。だが、トロイメライの障壁は違った。

セイ：「私も最初はそう思いました。しかし、トロイメライは唯でさえ強固な障壁を張っていて、更に攻撃が来る場所をピンポイントで強化してくるため、私も射撃魔法のほとんど防がれました。・・・正直な所、ブラストファイアーまで防がれた時はショックでした」

その時のことを思い出してしまい少し凹んでしまう。

リン：「大丈夫ですよ！セイ力さんは凄く強いです、自信持つて下さい！」

リンがこちらに飛んできて頭を撫でてくれる。

セイ：「あ、ありがとうリン。／／／／／」

リン：「は、はいです」。／／／／／

【この時、2人の後ろでタイミングを逃したなのははやてが非常に悔しそうな顔をしていたのは想像に難くない】

なの：「そ、それでどうやって条件クリアしたの？（うう、私が慰めたかったのに）」

セイ：「それは勿論、ルシフェリオンブレイカーを「ちょいまちい！？」...何でしょう？」

はや：「訓練室でブレイカー撃つたんか！？」

はやてが慌てた様子で聞いてくる。

セイ：「大丈夫ですよ、戦闘は彼が創った仮想空間でしたから」

はや：「さ、さよか。よう考えたら当たり前か／／／／／」

なの：「もう、はやてちゃんたら」

談笑しながら訓練場に向かうとすごい人ばかりが見えてきた。

セイ：「何でしょう？」

なの：「行ってみよう！」

少し速足で訓練場へと向かう。

そして近づくと、金色の長髪が綺麗な女性が怒った様子で駆け寄ってきた。

フエイ：「4人共遅いよ！何してたの！？」

セイ：「ルシフェリオン、予定よりどれ位遅れています？」

ルシ：「15分程度遅れています」

思ったより話し込んでしまっていたようです。

確かこういう時の謝り方は…思い出しました！

まずは手を握り…

セイ：「フエイト…」

フエイ：「えっ？…えっ！？」

次に、顔を近づけ相手の目を真っすぐ見つめて…

セイ：「待たせてしまい申し訳ありません。ですが怒らないで下さい、怒ると貴女の美しい顔が台無しです。笑って下さい、貴女には笑顔が一番似合いますから」

フエイ：「は、はい／＼／＼／＼（もう何でもいいや）」

如何にか許してもらえたようですね。

……ゾクッ！？……

今まで感じた事のない寒気がして振り返ると『魔王』がいた。

なの：「セ・イ・カ・ちゃん？何をしているのかな？（黒笑）」

いつの間にか周りからフェイトも含めて誰もいなくなる。

セイ：「わ、私の知識の中にあつた女性に対する謝り方が今のだつたんです」

もしかして私は致命的なミスをしてしまいましたか？

なの：「へえ？そうなんだ？（黒笑）」

正直、今のなのには勝てる気が全くしない。

セイ：「な、何でもしますから許して下さい！？」

もう何だか泣きそうです。

なの：「…いいよ、許してあげる。あと、今言つた事忘れないでね？」

そう言ってもらい安心したのですが、よく考えると私は一体何を許してもらったんでしょう？

なのはの怒りが収まったのが分かったのかフェイト達が戻ってきた。

よく見ると人だかりの中には、守護騎士達や、先日助けた2人を含めたFWの4人も居る。

フェイ：「じゃ、じゃあ時間も押してるし早く試験を始めよう？（もうちょっとセイカに手を握っていて欲しかったな）」

はや：「そやね、試験相手もお待ちかねみたいやしね（フェイトちゃん、羨ましいなあ）」

その言葉を聞いて海上の訓練施設を見ると、一人の騎士が立っていた。

星華 side out

遂に『星』と『炎』が激突する。

T
O
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

死力尽くして 後編

Ⅱ 機動六課訓練場 Ⅱ

なのは side

今私達は、海上に建造された訓練場の全体を見渡せる場所にいるが、定員オーバーしそうなくらいの人数が居ました。

何故かというと、機動六課の人員の殆どが観戦に来ていたからです。

なの：「はやてちゃん？これじゃあ仕事が滞らない？」

はや：「ま、まあ大丈夫やろ。ちゃんと後でその分の仕事はしてくれるやろし（汗）」

はやてちゃんは、この皺寄せが自分にこないかと冷や汗をかいているようだけど、なんとなく現実になりそうだから怖いね。

フェイ：「なのは、どっちが勝つと思う？」

苦笑していると、フェイトちゃんが声をかけてくる。

そうだね、セイカちゃんかシグナムさんか。

なの：「うーん、ちょっと難しい質問「シグナムだ！」「！？」

ヴィー：「…シグナムが勝つに決まってるだろ！私達の『将』が負けるはずねえ！」

それまで一言も喋らなかったヴィータちゃんが激昂する。

…やっぱり、まだセイカちゃんの事を認められないんだね。

はや：「まあまあ、ヴィータ少し落ち着き。うちやって、シグナムが簡単に負けるとは思ってたへん。けど、勝負ゆうんはやってみんと分からん、そうやる？」

それをはやてちゃんが、優しく諭す。

本当にはやてちゃんは守護騎士みんなのお母さんみたいだね。聞かれたら怒られそうだけど（笑）

ヴィー：「ごめん、はやて。ちょっと熱くなってた。なのはとフェイトもすまねえ、大声出しちまって」

ヴィータちゃんがこちらにも謝ってくれる。

本当にはやてちゃんが絡むと素直になるね。

フェイ：「気にしてないよ。…確かにシグナムが負けるとは思えないけど、セイカの戦闘能力は未知数だからね」

シャマ：「確かに、セイカちゃんと戦闘した事があるのはなのはちやんだけなものね」

フェイトちゃんの言葉にシャマルさんが続く。

はや：「そういう意味でも、彼女の實力を測るにはいい機会やという事やね」

その言葉と同時に皆の視線が訓練場の中心に佇む2人に集まる。

どうやらあちらも何か話していたようだが、それも終わったのか2

人の体が光に包まれる、それが晴れるとバリアジャケットを展開しデバイスを構えて臨戦態勢に入ったセイカちゃんとシグナムさんが姿を現す。

それまでは騒がしかった観客席が静寂に包まれる、2人の放つ張り詰めた空気に吞まれて誰も声が出せない様だった。

私も少し右手が震えて、それを左手で押さえつける。

はや：「そ、それじゃ2人共準備はええか？」

はやてちゃんが冷や汗をかきながら声をかける。

シグ：《勿論です、主》

セイ：《こちらにも構いませんよ、はやて》

応えた2人のは口調は穏やかだけど、抑えきれない闘志が声に滲んでいた。

はや：「…さ、さやか。ほな、模擬戦開始！？（泣）」

はやてちゃん、半分自棄^{はんぶんやけ}だね。気持ちは分かるけど。

だけど、今ははやてちゃんに同情するより彼女の模擬戦の方に集中しないよね。↑何気に酷い

なのはside out

〓 5分前〓

星華side

私とシグナムは立体化された市街地の中心に居た。

セイ：「これが本物じゃないとは少々驚きですね」

私は近くの建物に手を触れながら呟く。

シグ：「まあ、これは高町が完全監修した自慢の施設らしいからな」

シグナムがそう答えてくれる。

セイ：「そうですか…」

シグ：「……」

会話が途切れてしまい沈黙が続く。

セイ：「そろそろ時間のようですね、定位置に着きましょ…うか？」

シグ：「ああ」

それぞれが開始位置に立つ。

シグ：「なあ、セイカ」

セイ：「…何でしょう」

シグナムが真剣な顔で声をかけてくる。その顔は『騎士』其の物だった。

シグ：「正直な所、私はお前の事をまだ信用できない」

セイ：「いえ、それが当然の反応でしょう。貴女は『烈火の将』、主を守る騎士の長なのですから」

シグ：「その通りだ。…だが、主はやてが信じたお前を信じたいのも確かだ。お前の目には全く曇りがないからな」

セイ：「ありがとう、シグナム。そう言っただけでも嬉しいです」

シグ：「だが私は不器用でな、言葉で分かり合つというのは苦手だから、これ以上の事は剣で語ろうと思う」

セイ：「…確かに言葉だけでは分からない事もありますね。その提案受けましょう」

私達の遣り取りは普通の人から見れば奇妙に思えるかもしれないけど、私とシグナムはこの瞬間同じ気持ちを共有していた。

『この人と戦いたい（分かり合いたい）』と。

シグ：「レヴァンティン！」

セイ：「ルシフェリオン！」

レヴァ：「騎士甲冑、展開開始」

ルシ：「スタンバイレディ、セットアップ」

お互いにバリアジャケットを展開し、デバイスを構える。

そして、お互いが発する気によって空気が軋む音がする。

はや：《そ、それじゃ2人共準備はええか？》

そこにはやてから通信が入る。

シグ：「勿論です、主」

セイ：「こちらにも構いませんよ、はやて」

今の私達はもうお互いしか見えていない。

はや：《…さ、さやか。ほな、模擬戦開始！？（泣）》

その瞬間お互いが動き出す。

【そして今此処に後に『星炎の悪夢』と語られる模擬戦の火蓋が切
って落とされた】

戦闘が始まった瞬間、パイロフィンで空中に飛び上がりシグナムと
の距離を空ける。

様子見なのか、シグナムはレヴァンティンを構えたまま動かない。

セイ：「ルシフェリオン、モードはパイロを維持。次いで、パイロ
シューターを限界数展開」

ルシ：「イエスマイロード、パイロモードを維持。続いてパイロシ
ューターを32個展開します」

その言葉と共に、私の周りに32個のシューターが展開され、その内の半数をシグナムに向けて放つ。

シグ：「ふっ！…はっ！…せいっ！」

しかし、幾ら死角から同時に攻撃を加えても、全て紙一重で躲されるか剣によって切り裂かれ少しずつ数を減らされていく。

未だにシグナムは開始位置から殆ど動いていない。

ルシ：「小手調べとはいえ、ここまで防がれるとは」

ルシフェリオンが珍しく感心している。最低限の動作だけで防がれましたから、無理ありませんか。

そう思っている間にもシューターの数を減らされ向かわせた殆どを掻き消されてしまう。

セイ：「では、そろそろ殲滅を開始しましょう。ルシフェリオン、引き続き消滅した分のシューターの生成を。私はシューターで牽制しつつクロスブラストを掃射します」

ルシ：「イエスマイロード」

私はもう一度展開したシューター群の半数を放ち、残った半数を4等分にしそれぞれを1つに集め・・・

セイ：「クロスブラスト、フォースシュート!!」

回避に専念しているシグナムに4条の閃光を放つ。

……ズドドドド!!……

4つの爆音と共に黒煙が覆い彼女を視認できなくなるが構わない。

セイ：「クロスブラスト、ガトリングシュート!!」

スファイアが必要数揃い次第次々と魔力砲撃を放つ。地面に着弾しなかった砲撃がビル群を穿ちその内の幾つかが倒壊する。

シグ：「くっ、パンツァーシルトが!？」

防御魔法では耐えきれなくなったのかシグナムが空中に飛び出す。

セイ：「態勢は整えさせない！ルシフェリオン、新開発魔法を使います」

ルシ：「イエスマイロード、ブラスト」

杖の先端に新しいプログラムを組み込んだ魔力を収束させて…

セイ：「ファイアー！！」

彼女に向け放つ。

シグ：「こんなもの当たる訳がないだろう！」

シグナムが射線上から離れて回避しようとする。

セイ：「確かに。ですが、その程度の回避では不十分ですよ？」

ルシ：「…バースト」

シグ：「なっ！！？」

ルシフェリオンの言葉と同時に収束砲が拡散し無数の閃光が彼女を襲い爆発する。外れた砲撃も建造物に当たり爆散する。

ルシ：「着弾を確認しました」

セイ：「ですが、彼女がこの程度で落ちるとは思えません。警戒を最大限につ！！？」

次の瞬間、背筋が凍る程の剣気を感じ振り向きながら杖を掲げる。

……ガキン！！……

そこには、騎士甲冑を破損させながらも剣を振り下ろした『烈火の将』がいた。

シグ：「くっ！この攻撃を防ぐとはな」

セイ：「わ、私もあの一瞬で背後に回られるとは思いませんでしたよ」

剣と杖が激しく火花を散らし拮抗する。

セイ：「ルシフェ、ぐうつ!!?」

残ったシュータを操作し反撃に移ろうとした瞬間、腹部に強烈な回し蹴りを喰らい吹き飛ばされる。

……ズドオオオオオン!!……

轟音と共に私は乱立するビルの上に叩きつけられた。

星華 side out

なのは side

全員：「「「……」」」

今、観客席はセイカちゃんの殲滅射撃を見て騒然としている。

はや：「い、これは想像以上やな」

フェイ：「あつ！またビルが1棟倒壊したよ」

リン：「凄いです」

ヴィー：「あ、あれくらい大した事ねえよ」

なの：「あははは…」

驚愕の声を上げる人も居れば、感嘆の声を上げる人も居る。ヴィー
たち^{っわ}ちゃん、声^{こゑ}が上^あず^わつて^るよ？

リン：「あつ！シグナムが出てきたですよ」

セイカちゃんの連続砲撃に耐えきれなくなったのかシグナムさんが
空中に退避する。

そこにセイカちゃんが収束魔法を放つ。

ヴィー：「あんなの当たるわけっ！！？」

ヴィータちゃんが何かを言おうとした瞬間砲撃が拡散してシグナムさんに襲い掛かり魔力爆発を起こすのが見えた。

なの：「レイジングハート、今の砲撃は？」

レイ：「恐らく砲撃魔法用に新しく開発したプログラムを組み込んでいるでしょう」

フェイ：「昨日の準備期間中に開発したんだと思うよ」

はや：「やけど、そう考えるとかなりの開発技術やね。これだけでも本局の人間が欲しがりそうやわ」

なの：「確かに凄いけど、あれだけだとシグナムさんは落とせない！？」

そう思っていると、警戒しているセイカちゃんの背後にシグナムさんが現れレヴァンティンを振り下ろす。しかし、寸前で気付いたのかセイカちゃんガルフエリオンを使い防ぐ。そして、反撃しようとするが強烈な回し蹴りを腹部に喰らいビルに激突する。

なの：「セイカちゃん!？」

フェイ：「大丈夫だよ、なのは。激突寸前にアクティブガードを発動させてたから」

物凄い勢いでビルに激突したから思わず声が出てしまう。それを、フェイトちゃんが落ち着かせてくれる。

なの：「ご、ごめん。ありがとうフェイトちゃん」

頭を冷やして再び戦闘フィールドに目を向けた瞬間、セイカちゃんの居るはずのビルから滞空しているシグナムさん目掛けて桜色の収束砲が放たれた。

なのは side out

シグナム side

最初の連続射撃とその後の拡散砲にはかなり驚かされたが、それだけでは致命的なダメージにはならな

かった。

シグ：「…この程度なのか？セイカよ」

そう呟いた瞬間、先程の収束魔法を上回る速度と威力の砲撃が飛来する。

シグ：「くうっ！！？」

レヴァ：「主！？」

防御も間に合わずギリギリで回避するが、バリアジャケットの掠った部分が消し飛ぶ。

上空に気配がして空を見上げると、魔導師の杖を振りかぶりこちらに突撃して来る『星光の殲滅者』が見えた。

シグナム side out

星華 side

私はルシフェリオンが発動してくれたアクティブガードのおかげで最低限のダメージで済んでいたが、殆ど体が瓦礫に埋もれた状態でした。

セイ：「ぐうっ！…あそこから蹴りが飛んできるとは思いませんでしたよ」

ルシ：「大丈夫ですか！？マイロード（あの女、よくもマイロードを足蹴に！！）」

セイ：「ありがとう、ルシフェリオン。貴女のおかげでこの程度のダメージで済みましたから」

ルシ：「い、いえ！？（ああ！マイロードに褒められた。ありがとう『烈火の将』！！）」↑完全に矛盾している

しかし、このままだと押し切られますね。どうすれば勝てるのでしょうか・・・

セイ：「いえ、違いますね。『どうすれば勝てるか』ではなく『何が何でも勝つ』ですね」

ルシ：「マイロード？」

ルシフェリオンが不安そうな声で私を呼ぶ。

セイ：「どうやら私は小難しく考え過ぎていたようです、今は私の全力を相手にぶつけるのみです。全力でサポートをお願いしますよ？ルシフェリオン」

ルシ：「オールライト！マイロード！」

その言葉と共に杖を瓦礫の隙間から見えるシグナムに向ける。

セイ：「全力・全開！」

ルシ：「ブラスト！」

セイ：「ファイアー！！！」

……ドゴォン！！！！……

放たれた桜色の閃光は瓦礫を吹き飛ばし一直線に彼女へと向かう。

この収束砲は確実に避けられる、なら即座に次の手を打たなければ。

セイ：「パイロフィン！」

ルシ：「フルスピード！」

高速機動魔法で一気にシグナムを見下ろせる位置に移動する。そして、魔導師の杖を振りかぶりながら勢いをつけて振り下ろす。

セイ：「一撃粉碎！！」

……ガキン！！……

シグ：「くううう！！？」

セイ：「やはり、受け止められますか！？」

かなりの衝撃が襲ったはずだが、それでも完全に受けきられる。

即座に剣を弾き距離をとって体勢を整えようとするが、相手がそれを許さない。

シグ：「陣風！！」

レヴァ：「シュトゥルムヴィンデ」

刀身から衝撃波が放たれ襲い掛かってくる。

ルシ：「プロテクションEX！」

回避が間に合わず、障壁を張り防ぎきる。だが、彼女の狙いはこの隙を突くことだった。

シグ：「レヴァンティン！カートリッジロード！」

レヴァ：「シュランゲフォルム！」

技後硬直が解ける頃には、私の周りは連結刃によって囲まれていた。

シグ：「チェックメイトだな？」

セイ：「いいえ、まだです！参ります！」

ルシ：「チェーン・ルベライト」

先程、シグナムの周りに設置しておいたスフィアから無数の鎖状のバインドが伸びシグナムの四肢と連結刃を絡めとり動きを封じる。

シグ：「くっ！？…先程の近接攻撃はこの為か！」

セイ：「ええ、気付かれないか冷や冷やしましたよ」

だが、長くは持たない。もう既に鎖に亀裂が入り始めている。

セイ：「止めます！！ブラスト・ファイアー！！！」

……バキィ！！！！……

発射される寸前でバインドが破壊される。

シグ：「レヴァンティン！！」

レヴァ：「シュランゲバイセン・アングリフ！！」

シグナムは防御を捨てて攻撃を選んだようですね。

次の瞬間、桜色の収束砲と連結刃による紫色の斬撃がぶつかり合い・

……ドガアアアアアン！！……

その大爆発は私達を呑み込んだ。

星華 side out

To Be Continue . . .

激闘の後は

【星華とシグナム、両者の強力無比な砲撃と斬撃がぶつかり合い大爆発が起こる。至近距離での技の撃ち合いだったので、2人共爆発に巻き込まれたのは必然だった。その黒煙が晴れた時、両者はデバイスと身に付けたバリアジャケットと騎士甲冑をボロボロにしなながらも全く戦意を失うことなくお互いに睨みあっていた。しかし、その視線は敵意を宿したものではなくお互いを好敵手と認めたものだった】

星華 side

〓機動六課・訓練場上空〓

セイ：「はあ…はあ…、お互いボロボロですね？」

シグ：「はあ…、そうだな。ギブアップしてもいいんだぞ？」

その言葉に思わず笑ってしまう。シグナムも答えが分かかって言っているのだろっ、彼女も顔が笑っている。

セイ：「折角の心滾る戦いをこの程度のダメージで止める訳ないでしょう？まだ、行けますよね？ルシフェリオン？」

ルシ：「オフコース、勝つのは私達です」

所々に亀裂が入りながらも、頼もしい返事をしてくれるパートナーに思わず嬉しくなる。

シグ：「言うじゃないか。だが、勝つのはこちらだ。そっだな、レヴァンティン？」

レヴァ：「ジャ、当然です」

彼女のデバイスとその主もこちらと同意見の様だ。

再び魔導師の杖を構え臨戦態勢に移る。シグナムも剣を構え、和んでいた空気が一気に張り詰める。

セイ：「行きます！」 シグ：「行くぞ！」

なの・フェイ・はや：「「「ストローップ！……」」」

戦闘を再開しようとした瞬間、私はなのはとフェイトに体を抑えられ、シグナムははやてにハリセンで叩かれていた。^{はた}↑何故？

セイ：「何で止めるんですか？」

折角の戦いに水を差されたので、声を出して抗議した。

なの：「もう2人共ボロボロだし、セイ力ちゃんの实力は皆も十分に分かったから。それに、この前も戦闘後に倒れたんだから無茶しちゃだめだよ」

フェイ：「そうだよ、私とはやてだって心配してるんだよ？」

・理由は納得できるし、心配してくれて嬉しいのも確かなんですが・

セイ：「ううう、いいところだったんですよ？（涙目）」

今後、何時ここまで心が滾る戦いができるか分からないので、少しだけ悲しくなる。

なの：「ぐはっ！？（その涙目は反則なの！！）」

フエイ：「鼻血が・・・」

はや：「（あかん！？これ以上何かあつたら理性がもたへん！！）」

なのはの顔が真っ赤になり、フエイトに至つては鼻血が出てティッシュで鼻を押さえている。ルシフェリオンも激しく明滅しているし、私が一体何をしたというのでしょうか？

【因みに、この時ルシフェリオンが使っていたのは映像記録機能であり、この映像が永久保存されたのは言うまでもない】

セイ：「…仕方が無いですね、興が削がれましたし今回はここまですですね。シグナム、この決着はいずれ着けましょう」

シグ：「ああ、楽しみにしているぞ」

なの：「それじゃあ、降りようか？結果発表もあるし、FW陣にも紹介したいからね」

セイ：「分かりました」

【星華とシグナムは後日決着を着けることを約束して矛を収める事になり、全員で下へと降下した。今は隊長陣とFW陣以外は解散して六課の主要メンバーが集まっている。】

「訓練場付近」

はや：「合格や！」

セイ：「凄くあっさりと言われましたが、本当なのですか？」

あまりにも軽く言われたので、なのはに確認を取る。

なの：「あはは、本当だよ。あの模擬戦闘だけ見てもセイ力ちゃんの実力は本物だし、筆記試験は完璧の上に召喚したのは竜種だからね文句のつけようがないよ」

それを聞いて安心するが、はやてが何時の間にか離れて座り込み人差し指での字を書いているのが少し気になった。

???：「ええ！？貴女も竜を!？」

突然、声を上げたのはピンク色の髪をした幼い少女で、しかし大声を出したのが恥ずかしかったのか顔を赤くして俯いてしまう。

セイ：「貴女は確か…」

確か、私が最初に彼女達と接触した時、赤い髪の少年と一緒に竜の背に乗っていた・・・

フェイ：「なのは、自己紹介を先に済ませようか？」

なの：「そうだね。それじゃあ、皆？自己紹介を順番にお願い」

FW陣：「」「」「はい!」「」「」

スバ：「スバル・ナカジマ二等陸士です！先日は危ない所を助けて頂きありがとうございます!！」

エリ：「エリオ・モンディアル三等陸士であります!」

キャラ：「キ、キャラ・ル・ルシエ三等陸士です。こっちは友達のフリードリヒです。フリードと呼んであげて下さい」

フリー：「キュク」

ティア：「ティアナ・ランスター二等陸士であります！スバルと同じく、先日はありがとうございました」

FW陣の面々が順番に挨拶してくれる。何故か緊張はしているが。

（特にキャラが）

セイ：「私の名前は『^{セイカ}星華』です。たった今、囑託魔導師になったばかりですが、以後宜しくお願いします。それと、私は囑託なので敬語や敬礼は不要ですよ？呼び方も自由にして下さい」

自己紹介などしたことがなかったので少し不安だったが、なのはとフェイトに顔を向けると頷いて肯定してくれたので問題なかったようだ。

なの：「自己紹介はそれ位かな？それじゃあ、セイカちゃんに質問がある人居るかな？」

FW陣：「「「はい！！」「」」

なのはの言葉に全員が反応する。先刻の返事より元気な気がするのは気のせいでしょうか？

なの：「うん。それじゃあ、自己紹介をした順に質問しようか？」

スバ：「はい！…え〜と、セイカさんはなのはさんのお姉さんなんですか？顔立ちも似てるますし、デバイスとバリアジャケットに至っては違いは色だけですし」

スバルの質問に他のメンバーも気になっていたのか、興味津々な顔をしている。

セイ：「難しい質問ですね。例えて言うなら、私となのはは限りなく近く、限りなく遠い存在といったところですね」

事情を知っているなのは達は苦笑していますし、言えるのはここまですですね。流石に、まだ本当の事を言うには時期尚早ですから仕方ないですね。

スバ・キャロ・ティア：「「「???」」」

エリ：「……」

私の答えに3人は不思議そうな顔をするが、赤い髪の少年の顔が青くなっているのが気になった。

セイ：「エリオでしたか？顔色が悪いですけど大丈夫ですか？」

エリ：「い、いえっ！？大丈夫ですから！？」

なの：「それじゃあ、次の質問は誰かな？」

エリ：「あつ、僕です！えっと、セイ力さんは何故あれだけの実力があるのに、^{いままで}今迄管理局に入らなかったんですか？」

セイ：「そうですね。先程のスバルの質問も含めて、何時か話す日も来るでしょう。今は、私が貴方方の味方であるという事だけは憶えて置いて下さい」

キャロ：「それじゃあ、次は私ですね。セイ力さんは竜を召喚したって言っていましたけど。どんな竜なんですか？」

セイ：「防御能力のみが極限まで特化された守護竜で、名を『トロイメライ』と言います。リイン？彼の映像を出せますか？」

リイン：「勿論ですよ」

そう言つて、リインが皆の前にスクリーンを出してトロイメライの姿を表示してくれる。

スバ・エリ：「「カッコイイー！ー！！！」」

フリー：「キュークー！！！」

ティア：「キャラはあの竜知ってる？」

キャラ：「い、いえ。一族の文献にもあの様な竜は載っていませんでした」

ティア：「そう……」

セイ：「その内、見える機会もあるでしょう。最後の質問は貴女ですか？」

ティア：「あつ、はい！さっきの戦闘中に使用していた砲撃魔法は私にも使えますか？」

酷く真剣な目をしている。この瞳は、力を求めて止まない者の目ですね。

セイ：「確かに、ティアナのデバイスに私とルシフェリオンが考案したプログラムをインストールすれば使用可能ですが、扱いが難しい上に体にも負担が掛かります。今の貴女では使用するのは不可能でしょう」

ティア：「…そうですか」

セイ：「ですが、貴女には可能性があります。これからの訓練次第では扱えるようになるでしょう。もし、私に教えて欲しい事があれば言ってください、必ずティアナの力になりましょう。尤も、^{もっと}私は固定砲台の様なものですから射撃に関する事しか教えてあげられません」

ティア：「あ、ありがとうございます！！」

はや：「質問はもう無いようやね？…ほな、今日はこれで解散！他

の六課メンバーとの挨拶は明日でええよね？なのはちゃん？」

はやて、何時の間に復活したんでしょうか？

なの：「うん、それでいいと思うよ。それより、セイカちゃんはバリアジャケット解除しないの？ちよっと、目のやり場に困るんだけど／＼／＼／＼／＼」

そう言われて自分のバリアジャケットを見ると所々破損して素肌が見えてしまっている。周りを見渡すと全員が顔を背ける、同性の体を見ても仕方がないでしょうに。

【今気付いたのか星華の姿を改めて見た何人かが顔を赤くしている。どの人の顔が紅潮したかは皆様のご想像にお任せします】

セイ：「確かにそうですね。ルシフェリっ！？くううう、体が…熱い！！？」

ルシフェリオンにバリアジャケットの解除を命じようとした瞬間、全身が特にリンカーコア付近が熱くなり手で押さえる。

ルシ：「マイロード！！？」

なの：「セイカちゃん!!?」

【なのはがルシフェリオンの声に反応し、セイカに駆け寄り触れようとする。その時、星華の体を光が包み込み弾かれてしまう。そして光が消えた時、立っていたのは10年前に戦った時の姿をした星華だった】

セイ：「この姿は一体？バリアジャケットの形状も10年前に戻っていますし」

なの・フェイ・はや・リイン・シャマ・スバ・ティア：「「「「可
愛い——!!——!!——!!」」」」

シグ・ヴィー・エリ・キャロ：「「「……／／／」」」

セイ：「えっ！何なんですか！？何処を触っているんですか！？…
ふあっ！？そこは駄目ですう！！?」

星華 side out

【その後、セイカは暴走していないシグナム達に助けを求めるが顔を真っ赤にして反応が無く。孤立無援の状態で、暴走したなのは達

に弄られ放題となり、開放されたのは数十分後であった】

T o B e C o n t i n u e . . .

彼女達の日常？

【なのは達から開放されたものの、疲労困憊の星華はこの体で誰かの部屋に泊まるのは限りなく危険だと察知し、幼くなつてしまった体を精密検査する為にも医療室に泊まることにした。翌日、星華の体は元に戻り検査結果も出たため、今は主要メンバーと一緒に食堂に集まっている】

Ⅱ 機動六課食堂Ⅱ

星華 side

セイ：「『ハイスピードマジックリカバリー 高速魔力回復能力』ですか？」

囑託魔導師試験が終わった翌日、シャル先生から告げられたのは聞いたことがないレアスキル名だった。他の人達も聞いた事がないのか首を傾げている。

シヤマ：「ええ、前例が無いから便宜上つけたんですけど、的確な名前だと思えます。セイカちゃんが少女体になっていた時の魔力回復量が成人体だった時の数倍だったんです。おそらく、そのスキルの副作用的なものが昨日の年齢逆行現象だったんです」

なの：「そのレアスキルは体に負担はかからないんですか？」

なのはが深刻な顔をして聞いてくれる。私を心配してくれているのがよく分かる。

セイ：「なのは、心配してくれてありがとう（ニコニコ）」

なの：「ううん！気にしないで！！／＼／＼（この笑顔の為なら何でもできるよ）」

【心配するタイミングを逃した数人が悔しそうな顔をしていたのは言うまでもないだろう】

シャマ：「その点は問題ないわ。少女体になっている間は新陳代謝も活性化しているから、寧ろ健康状態が良くなるぐらいだから大丈夫よ」

その言葉を聞いて全員が胸を撫で下している。

スバ：「そのスキルって任意で使えるんですか？」

皆に心配してくれたお礼を言おうとした瞬間、スバルが言った台詞で昨日の惨劇が脳内でフラッシュバックしてしまう。

私の体は自然と駆け出していた。

星華 side out

Side：なのは

はや：「そういえばそうやね。セイカちゃん、どうなん？ってセイカちゃんが居らん！？」

その言葉に振り向くと先程まで座っていたセイカちゃんが居なくなっていて、周りを見渡すが見る影もない。すると廊下からリインがゆっくり飛んでくる。

リイン：「どうしたんですか？」

フェイ：「リイン、お仕事お疲れ様」

リン：「はいです。…そういえば、セイカさんが涙目で廊下を走っていきましてけど何かあったんですか？」

なの：「本当に!？」

もしかして、昨日の事思い出しちゃったの!？

ティア：「スバル!あんたが余計な事、言うから!！」

スバ：「私!？だけど、ティアだって昨日、小さくなったセイカさんを撫でまくってたじゃんか!？」

全員：「「「うつ!?!?」「」「」

私を含め全員が思い当たる節がある為、呻き声を上げる。

なの：「と、とりあえずセイカちゃんを探そう!？」

そう言うと、それぞれがセイカちゃんを探しに走っていく。

フェイ：「なのは。私たちも行こう！」

なの：「うん！」

そして、私もフェイトちゃんと一緒に食堂を出た。

なのは side out

【その後、機動六課のメンバーと星華の追いかけっことは半時間程度続き、なのはとフェイトが捕まえ何とか^{なだ}宥めることに成功した。しかし、怯えていた星華を見て六課メンバーは気分転換に星華を首都グラナガンに連れて行く事を決めた。・・・誰が一緒に行くかを決める為、また一悶着あったがここでは割愛させていただきます（笑）】

スバル side

〓 首都グラナガン 〓

私とティアナ、なのはさんは紆余曲折（思い出しただけでゾッとす

る)を経てセイカさんと首都グラナガンに来ていた。

セイ：「凄いですね。やはり、知識として知っていると実際に見てみるのでは違いますね」

セイカさんは街並みを冷静に見ているが、その瞳は抑えられない好奇心を湛えていた。

スバ：「やっぱり、セイカさんって見た目は『クールビューティー』だけど、どこか可愛らしいよね？」

前で喋っているなのはさんとセイカさんに聞こえないくらいの声で隣を歩いているティアに声を掛ける。

ティア：「そうね。例えて言うなら『体は大人だけど心は子供』って感じね。まだ出会ってから数日だけど、セイカさんって普段は冷静沈着に見えるけど、時折見せる子供っぽい部分があって、そのギヤップがまた可愛い…。って、何言わさんのよ!？」

スバ：「痛った〜い!?何も殴ることないじゃん!！」

途中まで素直に喋っていたティアが急に正気に戻り、私の頭を思いっ切り殴る。私はあまりの痛さに頭を押さえて蹲る。

ティア：「うつさい！馬鹿スバル！！」

なの：「2人共ー！置いてくよー！！」

ティア：「今行きます！！…何時までしゃがみこんでるのよ？なのはさんとセイカさんが待つてるわよ？」

スバ：「はーい」

それにしても、セイカさんの顔を見ると湧き上がって来るこの想いは何なんだろう。なのはさんに対して抱^{いだ}いている憧れとは違うのは判るんだけど。

【スバルが星華に対して抱いている想いが恋愛感情なのか、はたまた別のものなのか。それは本人も含めて誰にも分からない。しかし、スバルがそれを理解するのはそう遠くない未来だろう】

スバル side out

【その後なのは達は星華にミッドチルダの要所を案内して回り、今は機動六課近辺まで帰ってきて海岸沿いを歩いている】

星華 side

セイ：「なのは、スバル、ティアナ、今日はありがとうございました。とても有意義な一日を過ごさせて貰い、とても楽しかったです」

情報を蒐集するだけでは、知り得ない事もあるということを実感した1日でした。

なのは：「うっん、私達も楽しかったから気にしないで。ね？スバル、ティアナ？」

スバ：「そうですよ、私もセイカさんと出かけることが出来て嬉しかったですから」

ティア：「あんたの場合、一番嬉しかったのはアイスを食べたことでしょうか？」

スバ：「えゝ。そんな事ないよゝ」

ティアナが呆れた様に言い、それをスバルが否定しているが、確かにタワーの様に積まれたアイスを見た時は流石の私も開いた口が塞がりませんでした。

セイ：「また、なのは達とこういった時間を過ごせるのでしょうか？」

太陽が水平線に沈んでいくのを見て思わず悲観的な言葉が口から漏れてしまう。

なの：「????セイカちゃん、何か言った？」

また言い争いを初めてしまったスバルとティアナを見かねて、歩みを止めていたなのには聞こえなかったようですね。

セイ：「いえ、何でもありませんよ。…そろそろ暗くなるので、帰りましょうか？」

なの：「そうだね。スバル〜！ティアナ〜！帰るよ〜！！」

スバ・ティア：「はい！！」

私がこの世界に現れた理由、必ずしも良いものであるとは限らない。万が一それが彼女達を傷つけようとした時は、私の命に代えても守らなければ、なのは達は私の様な紛い物では無いのですから。

星華 side out

【星華は分かっていたいなかった、なのは達にとって星華は出会ったばかりではあるが、掛け替えの無い『仲間』だという事を。例え与えられた命であろうとも、そこに生きようとする意志さえあればそれは些細な問題だということを。】

【それは、なのは達にも言えることで、星華の体は確かに大人になったかもしれない、だが精神・心は10年前のまま成長していないという事に気付いていなかった】

【後日、そのお互いの認識のズレが大変な事件を引き起こす引き金なるうとは誰も予測できなかった】

To Be Continue . . .

【因みに、ルシフェリオンはシャーリーにフルメンテナンスのために連れて行かれたらしい、はやて曰く荷馬車で揺れる子牛の様だっ

たそうだ（合掌）

帰郷 導入編

【模擬戦が終了してから数日、機動六課は特に目立った出勤もなく、比較的穏やかな時間が流れていた。星華は囑託魔導師である為、他の局員達とは違い事務作業が多くない。FW達の訓練に参加している時以外は本を読む事ぐらいしか時間を潰す方法がなかったが、今は元になったなのはの影響もあるのか食堂で手伝いをしながら料理の腕を磨いていた】

星華 side

スバ：「セイカさん！スパゲッティのセットを大盛りでお願いしますます！！」

早朝訓練が終わったのか、スバルが凄い勢いで注文をしに来た。

セイ：「スバルは朝から元気ですね。訓練が終わったばかりで疲れていないのですか？」

その証拠に、向こうのテーブルではティアナ、エリオ、キャロの3人が疲労困憊の様子で机に突っ伏しているのが見えた。

スバ：「えへへ、本当はバテバテなんですけど、御飯が食べれると思うと元気が出るんです」

一食で食べる量と合わせて考えても、何かと常識では測れない子です。

セイ：「本当にそうだとしても疲れていることに違いはないでしょう？料理は出来しだい持って行くのでティアナ達の所に戻って休んでいて下さい」

スバ：「そ、そんな！自分で持って行きますよ！」

ルシ：「この後も訓練の反省文作成等の事務作業があるのではないのですか？今、貴女にできるのは休める時に休むことだと思いますが？」

スバ：「うつ！？…そ、それじゃあ、お願いします」

ルシフェリオンの説得（？）で納得したのか、スバルはテーブルへと戻って行った。

セイ：「優しいですね、ルシフェリオン？」

ルシ：「わ、私は唯単にマイロードの好意が無下にされるのが許せなかっただけです」

ルシフェリオンの声が上擦っているのが分かる、これが最近読んだ書物に書いてあった『ツンデレ』というやつなのでしょうか？

ルシ：「それよりマイロード？注文を伝えなく宜しいのですか？」

セイ：「そうでしたね。料理長！スパゲッティのセットを大盛りでお願いします！」

すると、調理場から妙齡の美しい女性が出て来る。師事していて分かってきたのですが、彼女は男顔負けの竹を割ったような性格で、同僚の話ではその性格のせいで婚期を「セイカ？」！！？

料理長：「何か失礼なことを考えてなかったか？」

セイ：「いえ！滅相も御座いません！」

因みに、機動六課で逆らってはいけない人物ランキングで4位だそうです、尤も私も同意見ですが。

料理長：「まあいい。それじゃあ、今日のスバル達の朝食はあんたが作りな」

セイ：「わ、私ですか？」

料理長：「ここ数日で、基本的な料理は作れるように教育してきたつもりだからね。そろそろ一度、誰かに食べてもらって評価してもらうのも良い経験になるだろう。（基礎的なことは最初から出来ていた上に、教えられた事を吸収して自分の物にするスピードが尋常じゃなかった。全く、魔導師じゃなかったらスカウトしてるんだがね）」

セイ：「分かりました、頑張ってみます」

ルシ：「マイロード、私も及ばずながらサポートさせて頂きます。スバル・ナカジマ達をギャフンと言わせてやりましょう！」

料理長：「ははは、その意気だよ。頑張んなー！」

その言葉を聞くと同時に、私は調理場に入り腕を振るい始めた。

数分後、私はスパゲッティとサラダが大量に盛られた皿を持ってスバル達が座っているテーブルに来ていた。

セイ：「お待たせしました。スパゲッティとサラダのセットの大盛りになります」

スバ：「あつ！セイカさん、ありがとうございます」

御飯を見た途端、元気になるスバル。エリオも目を輝かせている。何回か2人が食事している所を目撃したことがあるが、あれだけの量が何故胃に収まるか不思議でしかたなかった。

ティア：「すみません、こんなことまでしてもらって」

スバルから話を聞いていたのか、ティアナが申し訳なさそうな顔をする。

セイ：「気にしないで下さい、好きでやっている事ですから。それより、手伝いも終わったのでご相伴に預らせて貰っても宜しいですか？」

エリ：「勿論ですよ」

キャラ：「こっちの席が空いてますよ」

キャラが自分の隣の席を勧めてくれる。

最初の頃と比べて大分私に慣れてくれたようで少し安心した。

セイ：「ありがとう、キャラ。フリードも元気そうで何よりです」

キャラの近くに居るフリードにも声を掛ける。

フリー：「キュク、キュク〜」

セイ：「そうですか、それは良かったですね」

キャラ：「えっ！？セイカさん、フリードの言ってる事が解るんですか！？」

私とフリードの会話が成り立っている事に驚いたのか、キャラが思わず席を立つ。他の3人もキャラ程ではないが驚いた顔をしている。

セイ：「完全に理解できている訳ではありませんが、大体ならフリードの言っている事が解りますよ。恐らく『トロイメライ』と契約を結んだ影響だと思いますが。それより、早く食べないと御飯が冷めてしまいますよ」

ティア：「そ、そうですね。3人共、この後も楽しい仕事が待っているんだから早く食べなさい」

ティアナの言葉を聞き全員が食事を始めたが、デスクワークが苦手なのだろう若干顔が引き攣^{ひき}ってる。後ではやてに許可を貰^{もら}って手伝いますでしょうか？

スバ：「んむ？…このスパゲッティ、何時^{いつ}ものと味が少し違うね？」

レシピ通りに作ったのですが一口で気付くなんて、やはりこの子は食に関して規格外のようですね。

エリ：「そう言われるとそうですね。でも、僕はこの味の方が好きですね」

キヤロ：「私も」

フリー：「キョククッ」

セイ：「御口に合ったようで何よりです」

ルシ：「マイロードが作ったのですから当然の結果と言えるでしょう」

ルシフェリオンの言は過大評価だと思うが、自分で作ったものを褒められるというのは存外悪くないですね。

ティア：「この料理、セイ力さんが作ったんですか!？」

今日はよく誰かに驚かれる日です。

セイ：「ええ、料理長に一任されて」

エリ：「手伝い始めたのは最近なのに、凄いですね」

セイ：「いえ、まだまだ精進あるのみです。スバル達も味に関する意見があれば遠慮無く言って下さい、今後の参考にさせて頂きます」

4人の評価をルシフェリオンに記録してもらいながら、朝食の時間は過ぎていった。

あれだけ大量にあった朝食が無くなった頃に、なのはとフェイトがこちらに歩いて来るのが見えた。

セイ：「お早うございます、なのは、フェイト」

フェイ：「お早う、セイカ」

なの：「お早う、セイカちゃん。皆は朝食はもう済んだのかな」

スバ：「はい。セイカさんの手作りだったんですけど、とても美味しかったです」

なの・フェイ：「へえ、セイカ（ちゃん）の手料理を食べたんだ？（黒笑）」

【なのはとフェイトがその言葉を吐き出した瞬間、食堂の空気が凍

りついた。そのことに気付いた局員達は素早く食事を終えて、足早に食堂を出て行った。星華とFW陣と召喚竜は逃げることもできず震えるだけ。ティアナはこの状況を作った原因であるスバルを睨むが、彼女は俯いているため気付かない。エリオとキャロに至っては蚊帳の外のはずだが修羅になったフェイトを見て半泣きである。星華は状況が全く掴めず同じく修羅になったなのはを見て戸惑うばかり。その後、自分達の置かれている状況とその理由を唯一理解しているティアナが星華に、なのはとフェイトにも手料理を作ること約束させ事無きを得た】

【一悶着あつた朝食の後、星華となのは達隊長陣は部隊長室に召集され、明日の任務についての概要を聞いていた】

セイ：「管理外世界への派遣任務ですか？」

私は意外な任務の内容に戸惑いの声を上げる。

はや：「そや、聖王教会からの正式な依頼なんよ」

セイ：「確か機動六課はレリック専門の部隊だったと記憶しているのですが？」

はや：「うーん、確かにそうなんやけどな、今回聖王教会が感知したロストロギアの正体がよう判らんらしいんよ。やから、レリックである可能性も踏まえてうちの部隊が行くことになったんよ」

はやての説明によると、聖王教会がレリックを広域搜索していたところ、とある管理外世界で何らかのロストロギアの反応があったらしい。しかし、正体が掴めず専門の部隊を出すことになったのだが、動かせる部隊がここ以外になかった為、急遽機動六課が調査を行うことになったらしい。

ルシ：「要するに、盪回しにされたものを最終的に押し付けられたという訳ですか」

はや：「うぐっ！？…そ、そんな事より、驚くのはこっからやで？何と、調査に行くんは第97管理外世界『地球』、しかも我等が故郷『海鳴市』なんや！…」

リイン：「ですー！！」

はやてはルシフェリオンのストレートな言葉により大ダメージを受けたが、直ぐに持ち直し異常なテンションで今回の目的地を告げた。

それを聞いてなのは達は里帰りができると喜んでいたが、私は言い知れぬ不安に駆られていた。

自分が一度散った場所であることも要因の一つだが、それ以上に何かよくない事が起きそうな不吉な予感がしたのです。

ルシ：「マイロード、大丈夫ですか？」

私の様子がおかしいことに気付いたのかルシフェリオンが心配してくれる。

セイ：「ええ、問題ありません」

そう言ったものの、この心を覆う暗雲は晴れそうになかった。

星華 side out

【星華の胸騒ぎは現実のものとなる。第97管理外世界『地球』の『海鳴市』で正体不明のロストロギアに反応して、何かが深い眠りから目覚めようとしていたのである】

To Be Continue . . .

帰郷 前編

【第97管理外世界『地球』への派遣任務についての説明を受けた翌日、星華達は目的地に行く為に転送ポートがある場所まで六課所有のへりに乗って向かっていた】

星華 side

「へり内部」

キャラ：「え〜っと…第97管理外世界、文化レベルD、次元航空無し、魔法無し…えっ!？」

地球の情報を閲覧していたキャラが何かに驚き大声を上げる。

ティア：「どうかした？キャラ」

キャラ：「第97管理外世界って魔法文化レベルが無いんですよ…」

ティア：「ホントっ!?!じゃ、どうしてなのは隊長や八神部隊長の

ようなオーバーSランク魔導師が？」

ティアナが驚いているキャラに声を掛けるが、その理由を知り逆に驚愕の声を上げる。

はや：「偶々（たまたま）やと思うよ？言つなれば突然変異？？」

ティア：「す、すみませんっ！」

はや：「ええよ、別に」

ティアナの言葉に笑顔で応えるはやて。

なの：「私とはやて部隊長が魔法と出会えたのは本当に偶然だからね」

FW陣：「」「」「へえ」「」「」

セイ：「なのとはやて程の魔導師が生まれた世界ですか…」

なのはとフェイトが出会ったのも地球の海鳴市、『偶然』という言葉

葉で済ませていいものでしょうか？

なの：「ん？どうしたのセイカちゃん？朝からあまり元気が無いけど」

セイ：「大丈夫です」

昨日から感じている不快感のせいで少しだけ素っ気無い返事をしてしまう。

なの：「そ、そう」

エリ：「と、ところでセイカさんはどここの出身なんですか？」

私達の会話に不自然なものを感じたのかエリオが話題を変えようしてくれる。

セイ：「自己を確立したという意味では地球ですね」

F W 陣：「「「「えつと？」「」「」

私の言葉を理解できていないようですね。少々、分かり辛かったでしょう？しかし、地球出身と言うには私は生い立ちが特殊すぎますし。

なの：「セ、セイカちゃんは私と一緒に地球出身ってことだよ」

なのはのフォローにFW陣は納得したかのように頷いていた。

何時か本当のことを彼女達に伝える日が来るのでしょうか？そして私という存在を……。いえ、今は考えても仕方が無いことですね。

【その後、リインの体が人間サイズになったのを見てFW陣が驚いたりして一騒動あったが、星華達は予定通り転送ポートに到着した。そして、所用が有ると言うはやてと副隊長達と別れ先に現地入りすることになった】

【星華、なのは、フェイト、FW陣とリインは青々とした木々の隙間から暖かな木漏れ日が差し込み、時折綺麗な小鳥の囀りが耳に心地よく残る穏やかな森に転移した】

「はい！到着です！」

元気よく告げるリイン。何時もよりテンションが少し高いのは気のせいではないようです。やはり、『帰郷』というのは特別なものなのでしょうね。

ティア：「ここが…」

スバ：「なのはさん達の故郷…」

スバルが感慨深げな声を上げる。こちらは憧れの人の故郷を見ての感動といったところですか。

フェイ：「そうだよ」

なの：「ミッドと殆ど変わらないでしょ？」

ティア：「空は青いし、太陽も1つだし…」

キャラ：「山と水と自然の匂いもそっくりです！」

フリー：「キュクル〜」

エリ：「湖、綺麗です！」

なの：「うん」

自分の故郷を褒めてもらいなのはも上機嫌のようですね。私も此処の澄んだ空気の影響が不快感が少しだけ軽減した気がします。

ティア：「…というか。ここは具体的には何処でしょう？何か、湖畔のコテージって感じがしますが」

リン：「現地の方がお持ちの別荘なんです。捜査員待機所としての使用を快く許諾して頂けたですよ」

なの：「あっ！！」

なのはが音のする方を見て声を上げる。そして全員の視線も其方へ向く。

ティア：「あっ…自動車？こっちの世界にもあるんだ」

車を見て呟くティアナ。

セイ：「どれだけ原始的な世界を想像していたんですか、ティアナ？」

ティアア：「す、すみません!？」

なの・フェイ：「あ、あははは」

???：「なのは!フェイト!」

自動車が停まり1人の女性が出て来て、なのはとフェイトに駆け寄る。

なの・フェイ：「アリサ(ちゃん)!!」

アリ：「何よもう、ご無沙汰だったじゃない!」

なの：「にやはは、ごめんね?」

フェイ：「色々と忙しくて…」

アリ：「私だって忙しいわよ。大学生なんだから」

勝ち気そうな金髪の女性と親しく喋るなのはとフェイト。確か、あの女性はなのはの親友の…。

リイン：「アリサさん、こんにちはですっ」

アリ：「リインも久しぶり」

リイン：「はいです」

フェイ：「あつ、紹介するね？私となのはの幼なじみの…」

フェイトが金髪の女性を不思議そうに眺めているFW陣に彼女の紹介を始める。

セイ：「見つかって、質問されても面倒なので隠れましょうか？」

恐らく、何故なのはと同じ顔をしているのかを追求される可能性が高いですからね。

ルシ：「オールライト、イリユージョンミストをマイロード周囲限定で展開します」

この場にいる全員に気付かれないように、プリズム効果のある霧を身に纏いその場を後にした。

星華
side out

なのは side

アリ：「アリサ・バニングスです。よろしく！」

F
W
陣：「「「「よろしくお願いします！」「」」」

アリ：「うん！元気があつて大変よろしい」

フエイ：「あれ？セイカは何処？」

フェイトちゃんの声で、セイカちゃんは何処にも居ない事に気付く。

スバ：「さっきまでそこに…本当だ」

アリ：「なのは、セイカって誰？」

なの：「えっと、ミッドチルダで保護した私達と同年の女の子な
んだけど、今は過去にフェイトちゃんがやってた囑託魔導師として
私達に協力してくれてるの」

ティア：「あれ？この反応って…」

姿形も見えないセイカちゃんを探していると、ティアナが何かに気
付く。

なの：「どうしたのティアナ？」

ティア：「いえ、さっきまでセイカさんが居たところに幻術魔法を
使った痕跡があるんですけど。それもかなり高度なものが」

なの・フェイ：「「えっ！？」」

セイ：『なのは、フェイト、聞こえますか？』

私とフェイトちゃんが驚きの声を上げた次の瞬間、セイカちゃんから念話が入る。

フェイ：『セイカ！？急に居なくなってどうしたの！？』

なの：『今何処に居るの！？』

セイ：『すみません、気分が少々優れなかったので勝手に離れました。後で合流場所のデータをルシフェリオンに送信しておいて下さい。…それでは』

フェイトちゃんと一緒に理由を聞くも、適当にはぐらかされて一方的に念話を切られる。

キャラ：「セイカさんからですか？」

フェイ：「うん、気分が優れないから後で合流するって」

エリ：「セイカさん、大丈夫ですかね」

ティア：「それにしたって幻術魔法で姿を消します？」

スバ：「セ、セイカさんにだって色々あるんだよ」

アリ：「そのセイカって子に会って見たいわね。私に挨拶もしないで居なくなるなんて良い度胸じゃない」

フエイ：「まあまあ。あれ？なのは、如何したの？」

なの：「ふふふ、勝手に居なくなったら駄目だって前に言ったのね。約束を破ったらどうなるか体に分らせる必要があるのかな？」

全員：「「「（ひい！！？）」「」」」

なのはside out

【笑っているなのは顔を見てそこに居る全員が声にならない悲鳴を上げる。何故ならなのは目は全く笑っていなかったのである。そして、此処に居ない星華に訪れる未来に思わず同情してしまった】

【その後、合流したはやての指示に従いそれぞれが分かれて探索の任に就いた。探索中に聖王教会から今回感知されたロストログアが只の紛失物であり事件性が無いと連絡が入り一同は胸を撫で下ろした。今、なのは達はあの後合流した星華と共になのはの実家が経営している喫茶『翠屋』の前まで来ていた】

星華 side

スバ：「大丈夫ですか？」

セイ：「ええ、生きているって素晴らしいですね」

スバルに声を掛けられるが、先程のなのはの『O・H A・N A・S I』の影響が可笑しな返事をしてしまう。

ティア：「あははは。（自業自得だとは思っけど、少しかわいそうね。それにしても、震えているセイさんも一寸可愛いかも。って、何考えてんのよ私は！？）」↑少しずつ毒されていくティアナ

なの：「何してるの？」

スバ：「今、行きます！！ほら、ティアもセイカさんも！」

ティア：「分かってるわよ！」

セイ：「ええ。（ここもできれば来たくなかったのですが、今度逃げれば命の保障は無さそうですし仕方ないですね）」

星華 side out

【スバルとティアナの次に遅れるようにして『翠屋』に入っていく星華。この後、なのはの家族と色々ある事も知らずに（合掌）】

To Be Continue . . .

帰郷 後編

【なのはとリインは翠屋に入って直ぐにカウンターに居たなのはの母親である桃子の元へ駆け寄って行く。スバルとティアナは2人の後をゆっくりと、星華は顔が見えないようにしながら全員と距離を置いてついて行った】

星華 side

なの：「お母さん、ただいまー!!」

桃子：「なのは！お帰りー!!」

セイ：《ルシフェリオン、私の記憶が可笑しいのでしょうか？なのはの母親の姿が10年前から殆ど変わっていないような気がするのですが》

なのはの母親である桃子さんの容姿は、30代前半と言われても思わず信じてしまいそうな程に美しかった。

ルシ：《マイロード、その可能性は極めて低いです。目の前にある

現実を受け入れるべきかと》

セイ：《そうですね》

若くは見えるが、なのはを見るその目はとても暖かなものを宿している気がした。これが母親というものなのでしょうか？……いえ、私が考えても詮無きことですな。

ティア：《お母さん、若！？》

スバ：《……ほんとだ》

リンが桃子さんが挨拶している間にティアナとスバルが何か念話を使って会話をしています。憶測ですが私とルシフェリオンが話していた内容と同じような気がします。

士郎：「おお！なのは、帰ってきたな」

美由希：「お帰り！なのは」

なの：「お父さん！お姉ちゃん！」

一気に騒がしくなった店内に厨房からなのはの父親と姉である士郎さんと美由希さんが顔を出した。

ティア・スバル：「「ええと……」」

なの：「あつ！この子達、私の生徒」

話についていけず呆然としている2人になのはが気付き、家族に紹介する。こちらには気付いていないようで一安心ですが、時間の問題ですね。

士郎：「ほお！こんにちは、いらっしやい」

スバ：「は、はい！」

ティア：「こんにちは！」

なのはの両親だからといって緊張しすぎではないですか？

桃子：「ケーキは今、箱詰めにしてるから」

なの：「うん」フェイトちゃんと待ち合わせ中なんだけど、居ても平気？」

桃子：「勿論」

士郎：「コーヒーと紅茶もポットに入れておいたからな！持ってたあげな」

リイン：「わあ！ありがとうございますっ」

桃子：「お茶でも飲んで休憩してってね」

美由希：「え」と？」

スバ：「あっ！スバル・ナカジマです！」

ティア：「ティアナ・ランスターです」

桃子：「スバルちゃんに、ティアナちゃん」

なの：「あれ？セイカちゃんは？」

桃子・士郎・美由希：「「「セイカ（ちゃん）？？？」」」

セイ：「うつ！？」

ルシ：《：マイロード、覚悟を決めた方がよろしいかと》

ルシフェリオンの言う通り、騙し騙しで先送りにしたけど此処までのようですね。

セイ：「初めまして、星華と言います。宜しくお願いします」

覚悟を決めて、軽くお辞儀しながら自己紹介をして顔を上げる。

士郎・美由希：「「「なっ！！？」」」

桃子：「あらあら、なのはにそっくり」

士郎さんと美由希さんの反応は予測通りですね。桃子さん、その予想外の反応と語尾の弾んだ感じは何なのでしょう？

スバル：《やっぱり驚いてるね？》

ティア：《そりやそうでしょ、自分の家族と同じ顔の人が突然現れたら誰だって驚くわよ。（私達にも理由は隠されているみたいだし、セイカさんって一体…？）》

美由希：「も、もしかして、なのはって双子だったの！？」

士郎：「ち、違う！？そんな訳ないだろう！」

それにしても、桃子さんとは対照的に驚き過ぎではないですか？

桃子：「2人共、落ち着きなさい（ニコ）」

士郎・美由希：「「は、はい！！？」」「」

こちらにも伝わるほどの覇気が彼女から発せられて、慌てふためいていた2人が一瞬で黙り込む。

この瞬間、なのはは確かにこの母親の娘である事を確信した。何故

なら、なのはが怒った時の雰囲気と良く似ていたから。

と同時に高町家のパワーバランスが見えてきた。（桃子>>>越えられない壁>なのは>士郎・美由希）

桃子：「なのは？それで、この子は？」

なの：「う、うん。向こうの世界で保護した子でね、今は囑託の魔導師として私達の仕事を手伝って貰ってるの。顔が似ているのは偶々だよ、世の中には自分と同じ顔の人が3人居るって言っし。ましてやこの広い次元世界、同じ顔をしている人なんてもっといるかもしれないでしょ？」

少し苦しい理由付けですが、なのはが必死に弁明してくれる。

セイ：《なのは、ありがとうございます。それと、すみません。家族に？をつかせてしまって》

なの：《う、ううん。気にしないで》

美由希：「そっか」

士郎：「それにしても、なのはとよく似てるな。並んでる所を見ると本当の姉妹みたいだな」

士郎さんと美由希さんは納得したようですが、桃子さんはどうなのでしょう？ニコニコしていて何も表情から読み取れません。

桃子：「ええ、…そうだ！いつそのこと家の娘になっちゃっ？」

セイ：「……はい？」

そして、桃子さんが唐突に無茶苦茶な事を言い出す。

どうやら、私に苗字が無いことで、私に肉親が居ないことを気付かれたようです。見かけとは違い恐ろしく鋭い感性をお持ちのようです。いえ、美由希さんに調子を合わせている士郎さんですか。全てを見通すような鷹の目がこちらを見詰めているのに気付く。

なの：「そんな、まだ早いつていうか。もっとお互いを理解してからでも遅くないかな、なんて……／＼／＼／＼」

何だか桃子さんが言った娘の意味となのはの考えている事に食い違いがあるような気が。…寒気もしますし、深く掘り下げない方がいいですね。

そして、なのは言葉の意味が分かっているのか桃子の笑みが深まり、何か悪戯を思いついた子供のような顔になる。

桃子：「セイカちゃん、ちょっとこっちに来てくれる？」

セイ：「ええと、拒否権は？」

桃子：「ありません」

セイ：「……………ですね」

そして、私は桃子さんに手を引かれて店の奥に入って行った。

【桃子さんによって店の奥にある更衣室に連れて行かれた星華は月村家の白と紫を基調としたメイド服に着替えさせられた後、再びカウターに入る通路にまで戻ってきた。因みに、何故翠屋にメイド服があったかは桃子さんの秘密だそうです】

セイ：「桃子さん、本当にこの格好をして出ないといけないんですか？」

桃子：「もちろん」

ルシ：「良くお似合いですよ、マイロード。自身を持って下さい）
奴等にこの艶姿を披露するのは少々癪ですが、羞恥に頬を染めるマイロードを見る為には致し方ないです）」

何時もは私を助けてくれるルシフェリオンの珍しい裏切りによって、私は諦めてなのは達の待つ店先に出て行った。

なの：「……あつ！遅かったねセイ…力…ちゃん？」

全員：「」「」……「」「」

私が来たことに気付いて全員が振り返ると同時に固まってしまった。
なのは、疑問系は酷いと思います。

セイ：「…やっぱり似合ってますかね？このメイド服」

リン：「そんな事ないですよ！凄く可愛いです」

セイ：「ありがとう、リン。お世辞でも嬉しいですよ」

そう言って、リンの頭を撫でる。

リン：「えへへ／＼／＼（お世辞じゃなくてほんとに可愛いと思っただけです）」

なの：「お、お母さん、そのメイド服（うう、完全に褒めるタイミング逃しちゃったよ。だってあんな可愛い格好で突然現れるんだもん、意識が一瞬飛んじゃったよ）」

桃子：「ええ、月村さんのお宅で頂いたの」

確か月村家というのは、なのはの親友の1人の生家の名前でしたね。なのはから引き継いだ知識ではかなりの資産家で、メイドも確か2人は居た筈です。

スバ：《ねえ、ティア？》

ティア：《何よ？》

スバ：《セイカさん、可愛いね》

ティア：《…そうね》

スバ：《…ティア？》

ティア：《…何？》

スバ：《セイカさんに抱きついちゃだめかな？》

ティア：《…駄目でしょ（私だって我慢してるんだから。っていうか、あの可愛さは反則）》

士郎：「いや」。最初は吃驚したけど、よく似合ってるじゃないか」

美由希：「ほんとだね、いつそ翠屋で働いてみる？」

セイ：「いえ、今は彼女達の前でやるべき事がありますので」

私が復活した理由が分からない今、彼女達と共にいることが1番都合が良いはずです。

桃子：「……そうだ、それじゃあ1つだけお願いできるかしら？フ
イトちゃんが来たら笑顔で出迎えてあげて欲しいんだけど……」

セイ：「……それくらいなら構いませんが」

今、一瞬だけ桃子さんの笑顔にそれとは違う感情が過よぎった様に見えたのですが、気のせいでしょうか？

ティア：「……あつ！来たみたいですよ」

外の道路の脇にライトニング用にレンタルされた黒色のボックスカーが停まる。何でも、車の色を指定したのはフェイトで、更に最初は車種をスポーツカータイプにしようとしたらしい。勿論、目立ち過ぎる為、はやてに却下されたらしいが。

セイ：《ルシフェリオン、出迎えと言ってもどうすればいいんでしょうか？》

ルシ：《そうですね、作り笑顔で構いませんから（寧ろそうして下さい）愛想よく『いらっしやいませ、ご主人様』と、言って下さ

い。これが、その服を着た人の正しい出迎え方です（先日のフェイトの反応を見る限り面白い事になりそうですね）《

セイ：《わ、分かりました。頑張ってみます》

ルシフェリオンが言うのですから、そのやり方で間違いないのでしよう。

フェイ：「皆々、迎えに来たよ」

セイ：「いらっしやいませ、ご主人様♪（ニコ）」

フェイ：「……」

ルシフェリオンの言葉通りに挨拶をするが、フェイトは時間が止まったかの様に動かなくなる。

セイ：「…あの？フェイト？」

固まっているフェイトに恐る恐る声を掛ける。

フエイ：「グハッ！！？」

次の瞬間、フェイトが鼻血を大量に噴いて倒れ込む。

スバ・ティア・リイン：「「（時間差！？）」」

エリ・キャロ：「「フェイトさん！？」」

なの：「フェイトちゃん！？大丈夫！？」

フェイト：「なのは、メイドっていいものだね」

美由希：「いやゝ、賑やかだね」

セイ：「そういう問題ですか？」

星華 side out

桃子・士郎 side

桃子：「あなた、あの子……」

士郎：「ああ」

桃子：「なのはも気付いてないみたいだけど、セイカちゃんの瞳、昔のなのはとよく似ている気がするわ」

士郎：「そうだね。だけど、きっと大丈夫だよ」

桃子：「でもっ!？」

士郎：「私達の娘を、なのはを信じよう」

桃子：「……そうね、なのはならきっと」

桃子・士郎 side out

To Be Continue . . .

迫り来る闇

【星華のメイド姿にノックアウトされたフェイトの回復を待つて、星華となのは、フェイト達は今回の任務での拠点であるバニングス家所有のコテージに戻ってきた。既に到着していた『アリサ・バニングス』となのは達とは旧知の仲である『月村・すずか』に星華は質問責め（特にアリサに）に遭ったが、先程の翠屋での説明と同様のもので何とか納得してもらえた（実際に納得したかは別だが、何か言えない事情があると察してくれたようだった）】

【その後、フェイトの使い魔である『アルフ』や同じくフェイトの義理の姉である『エイミイ・ハラオウン』とその親友である『高町・美由希』も合流して更に賑やかになったコテージで、はやてが作ったバーベキュー等の食欲をそそる料理の数々が並べられたテーブルを全員で囲んで座り、全員に食事が行き渡ったのを確認したはやてと隊長2人が挨拶をして夕食会が始まった（因みに、シャマルの料理の腕前が壊滅的に酷いことがFW陣にばれてしまったのは余談である）】

【そして、六課メンバーでは初対面の人も居るので各自自己紹介することになり、まずは現地の人間であるアリサとすずか、続いてアルフとエイミイ、最後に美由希がなのはの姉としての思いを告げて現地合流組の自己紹介は終わった。次に、FW陣の自己紹介も恙無つつがなく終わり、星華の番が回って来た】

セイ：「……私の番ですか、っ！！？」

スバル達の自己紹介も終わり、私に出番が回って来た為席を立つたが先程（自己紹介を始めた頃）から次第に強くなっている不快感に体がふらついてしまう。

なの・フェイ：「セイカ（ちゃん）！？」「」

私の横に座っていたなのはとフェイトが体を支えてくれる。

他の人達も心配そうな顔で此方を見詰めている。

セイ：「す、すみません。少々、立ち眩みがただけで問題ありません」

なの：「少々所じゃないよ！顔が真っ青だよ！」

アリ：「コテージの中で休ませましょ！すずかー！！」

すず：「うん！ベッドの準備をしてくるよ」

？？《《タ・リ・・ナイ》》

全員：「「「！！？」」」

すずかがコテージに行こうとした瞬間、聞くだけで心が凍りつく様な不気味な声が辺りに響き渡る。

？？《《チカ・ラ・・タリ・・ナイ》》

はや：「シャマル！サーチャーの反応は！？」

シャマ：「……そんな！？コテージを中心に完全に囲まれています！？」

シグ：「何故気付かなかった！？」

シャマ：「サーチャーに異常はみられないし、突然現れたとしか…」

セイ：「考えるの後です。今は戦闘態勢を整えましょう、ルシフェリオン！」

ルシ：「オールライト。スタンバイレディ、セットアップ」

幾分か気分が良くなったので、待機状態のルシフェリオンに起動を指示、素早くバリアジャケットを展開してデバイスを構える。

ヴィー：「だな。敵さんもゾロゾロ来たようだぜ」

逸早く騎士甲冑を展開しグラーフアイゼンを構えたヴィーいちはやタが敵の接近を知らせる。

??：《《マリヨク・ヲ・シュウシュウ・セヨ》》

そして、全員がバリアジャケット・騎士甲冑を展開、デバイスを構えると同時に、先程までは不明瞭に聞こえていた声が明瞭になりコテージの周りの暗がりという暗がりから黒い人型をした『何か』が無数に這い出してくる。

アリ：「…何よあれ？」

すず：「気持ち悪い」

こちらの様子を窺っているのか、ある程度の距離を置いて停止する。

美由希：「え〜と、私はどうすれば？」

エイ：「取り合えず、下がっていた方が良さそうなのは確かだね」

アル：「フエイト〜。私はどうする〜？」

フェイ：「アルフは美由希さんとエイミィと一緒に居てくれる？」

アル：「はいよ〜」

ティア：「あいつ等、一体なんなんですか？」

クロスミラージュを双銃形態『ガンズモード』にチェンジして、銃身を人型に向けながらティアナが当然の疑問を声に出す。

スバ：「…あつ！？もしかして、私達が探してるロストログアだったりして」

ティア：「そんな訳ないでしょ!？」

シャマ：「いえ、スバルちゃんが半分正解よ」

スバ・ティア：「「え?」」

シャマ：「あの人型からロストロギアの反応が出てるの。それも捜索中のロストロギアと同じものが」

なの：「シャマル先生、さっき半分正解って」

シャマ：「ええ、あの人型から別の反応が出てるの。や「闇の書の残滓ですね?」!？」

隊長陣・アルフ・エイミィ：「「「!?!」」」

FW陣・アリ・すず・美由希：「「「闇の書の残滓?」」」

私の声にシャマル先生と当時の事情を知っている者達は驚愕し、そうではない人達は不思議そうにその単語を呟く。

セイ：「私は元『闇の欠片』ですからね、流石にこれだけ近づけば感覚で分かりますよ」

あの黒い木偶人形を見ていると胸を締め付けられるような感覚に襲われる。

ルシ：「マイロードが今朝から感じていた不快感は、この事を予期してのものだったのかもしれませんが。推測ですが、10年前の『闇の欠片事件』で目覚めなかった欠片がこの海鳴市に出現したロストロギアに内包された魔力によって覚醒、更にそれを吸収して暴走したといったところでしょう」

はや：「そんなとこやろな。シャマル、封鎖領域の準備は？」

シャマ：「何時でも大丈夫ですよ」

はや：「向こうさんは律儀に待ってくれてるみたいやね。ほんなら、シャマルの封鎖結界展開完了後はヴィータ以外の隊長陣は各自連携を取りながら敵を撃破、FW陣は4人一緒に必ず行動して無闇に敵に突っ込んで囲まれないように、星華ちゃんとヴィータはマンツーマンで行動。敵はロストロギアを取り込んでるからどんな特性を持つとるか分からん、十分以上に警戒してな。以上や！！」

全員：「「了解!!!!」」

なの：「アリスちゃん達は結界には取り込まれないから安心してね？」

アリ：「私達の事はいいから、あんた達こそ無茶するんじゃないわよ!」

すず：「セイカちゃんも気を付けてね？」

セイ：「はい、鋭意努力します」

すず：「う、うん（何だか自分の事を度外視してるみたい、大丈夫かな）」

シャマ：「それじゃあ、いきます！クラールヴィント、お願いね？」

クラー：「はい。封鎖領域、展開します」

シャマル先生がアームドデバイス『クラールヴィント』のサポートを受けて、私達と人型を世界から切り離す為のフィールドが形成さ

れていく。

が、それを上回る速度で領域が黒く塗り潰されていく。

クラー：「主！展開中の封鎖領域が書き換え、いえ、侵食されています！！」

シヤマ：「そんな！！？」

セイ：「どうやら奴等の特性は『侵食』のようですね。ということは接近戦は推奨できませんね、魔力を吸収する為に体ごと取り込まれる可能性があります」

ルシ：「恐らく、此方^{こちら}が結界を張るのを待っていたのでしょう。認めるのは癪ですが、ある程度の知能があることを前提に戦った方がよさそうです」

セイ：「差し詰め、私達は奴等の胃の中に閉じ込められた食料といったところですか？」

なの：「くら！！物騒な事を言わない！！」

セイ：「すみません」

レイ：「ですが、今の状況を考えると強ち違うとも言えません。どうやらアリサ嬢達をも逃がすつもりが無いようですから」

黒い封鎖領域が完成してしまった上に、アリサ達一般人も一緒に閉じ込められたようだ。

セイ：「言い方は悪いですが、誰かを守って戦う方が隙ができますからね」

シグ：「それを分かってやっているとしたら、確かに厄介だな」

黒型：《《タリナイ・マリヨク・シュウシュウ》》

相手が逃げらなくなった事を悟ったのか、不気味な動きをしながら距離を縮め始める。

唯一の救いは移動スピードがかなり遅いという点ですか。

ヴィー：「それも倒しちまえば関係ねえよ！アイゼン！！」

グラ：「了解！シュワルベフリーゲン！！」

ヴィー：「喰らええええええ！！！！」

鉄槌の騎士が放った4つの鉄球が、誤る事無く複数の人型を貫き爆散し、人型を木端微塵に吹き飛ばす。

ヴィー：「どうだ！！」

スバ・エリ・キャロ：「「「やった！！！！」」」

フェイ：「ううん、効いてない」

ヴィー：「何！！？」

フェイトの言葉通り、四方八方に飛び散った黒いゲル状の塊が集まり何事も無かったかの様に元の人型に復活する。

はや：「どうやら、ロストログアが備えとった物理攻撃無効化の能力も吸収したようやね」

セイ：「厄介ですね。では、魔法はどうでしょう？」

ルシ：「クロスプラスト」

セイ：「ファイア！」

試しにスフィアを2つだけ使った収束砲を接近中の人型の内の一体に放つ。

が、着弾する直前に能面だった人型の顔が裂けて魔法を口（？）の中に呑み込む。

黒型：《マダ・・タリナイ》

ティア：「砲撃魔法を喰ってる……」

幾ら攻撃力の低い砲撃魔法でも、それをあっさりと防ぐどころか喰われたことに全員がショックを受ける。

スバ：「な、何だかあいつ、でかくなってませんか？」

確かに、私の魔法を喰った人型の体が一回り大きくなっている。

セイ：「無効化ではなく、取り込んで己の力にする。恐らく、結界を破壊しようとしても、それさえ吸収してしまう可能性がありますね」

はや：「物理攻撃も魔法攻撃もあかんとはな。簡単な任務やと思ってたけど、えらい事になってもうたな」

リン：「で、です」

口調には出していないが、はやての顔には焦りの色が見える。隊長陣も同程度だが、FW陣やアリサ達は顔が真っ青になっている。

セイ：《状況は最悪、どうしたのですかね》

ルシ：《こちらでも打開策を検索していますが、絶望的ですな》

シグ：「っ！！？全員、散開しろ！！！」

その言葉を聞くと同時にルシフェリオンを待機状態に戻し、近くに

居たアリサとすずかを抱えて飛び退る。

アリ・すず：「きゃっ!？」

可愛らしい悲鳴が聞こえたが気にしてられない。先程まで固まって居た場所を注視すると人型を数体確認した。球体状の封鎖領域の内側を張り付いて移動し落下してきたようです。

セイ：「怪我はありませんか？」

着地して抱きしめる形になっているアリサとすずかに声を掛ける。

アリ・すず：「は、はい／／／／／」

何故か顔を真っ赤にして返事をする2人、更に数箇所から突き刺さるような視線を感じます、私が何かしましたか？

セイ：「そうですか、っ!？ヴィータ!後ろ!!」

黒型：《マリオクワ・ヨコセ!》

ヴィー：「！！？」」

回避したヴィータの真後ろに迫っていた人型が大口を開けて彼女を呑み込もうとしていた為、大声で叫ぶ。

セイ：「（グラーフアイゼンのサポートは間に合わない！！）ルシフェリオン！！！」

ルシ：「プロテクション！！」

セイ：「バースト！！」

ぎりぎり間に合った防御魔法が人型の捕食行動を遮り、私の合図で外側へとバリアが爆発して人型を吹き飛ばす。

ヴィー：「セイカ！！？」」

ヴィータが助かったのを見て、油断したのかもしれない。

私は自分達の後ろに落下した人型に反応できなかった。

反射的にアリサとすずかを突き飛ばす。

次の瞬間、全身が黒い何かに覆われ次第に体から感覚が失われていく。

そして、私の意識は深淵の闇に溶けて消えた。

星華 side out

To Be Continue . . .

闇の侵食

A n o t h e r : s i d e

「そ、そんな……」

誰が呟いた声だったかは分からない。

だが、その言葉はそこに居た誰が口にしても可笑しくなかった。

そして、全員が心に抱いたであろう絶望がそれには込められていた。

ヴィー：「て、手前^{てめえ}ええええええ！！？」

目の前の光景が心の琴線に触れたのか、ヴィータが星華を取り込んだ人型ヘグラーフアイゼンを振りかぶり突撃を慣行しよとする。

シグ：「待て！ヴィータ！！」

それをショックで動けないアリサとすずかをFW陣に任せたシグナムが、寸^{すん}での所で羽交い絞めにして押さえつける。

ヴィー：「離せ！？シグナム！！」

はや：「ヴィータ、落ち着き！奴の中にはセイカちゃんが居るかもしれないのや、絶対に無闇に攻撃は加えたらあかん！！」

ヴィー：「っ！？……怒鳴って悪かった、シグナム」

夜天の主の叱咤の声でヴィータが正気を取り戻した。

シグ：「ふっ、気にするな」

なの：「だけど、昔のはやてちゃんやフェイトちゃんの時とは状況が違うよね。どうやって、闇の残滓をセイカちゃんから切り離せば……」

フェイ：「なのは……っ！？」

星華が取り込まれて一番取り乱す可能性のあったなのはが冷静でいる事にフェイトは安堵するが、なのはの強く握りこんだ手から血が

滴っているのを見て息を呑む。なのは抑えきれない感情によって心のコントロールが失われないように、必死に自分を押さえいていたのである。

エリ：「だけど、変じゃないですか？あいつ、セイカさんを取り込んだ筈なのに全く変化してないですよ？」

ティア：「そうね。さっきは魔力を吸収した直後に変化が起きたのに……」

黒型：《《《！？》》》

全員：「「「！！？」」」

どんな攻撃をも無効化していた人型の内一体が、突如苦しみだしたうち回る。しかも、まるで水面に落ちた石が周囲に波紋を広げるかの如く全ての人型に伝播していく。

はや：「何が起こってるんや！？」

シヤマ：「分かりましたよ、はやてちゃん！奴等は吸収したロストロギア的能力を使って分裂してたんです」

はや：「ちょい待ちい！やったら、奴等が苦しみだつたのつてもしかして…」

シャマ：「はい。たぶん、この中で一番魔力量の多いセイカちゃんを取り込んだまではよかったけど、何らかの要因が拒絶反応を引き起こし、元は一つである為に全体に影響を及ぼしているんだと思います」

黒型：《《《………！！》》》

そして、人型達がこの世のものとは思えない絶叫を上げた瞬間、なのは達は光に包まれ、世界は反転した。

A n o t h e r : s i d e o u t

なのはside

視界が光に埋め尽くされて何も見えなくなる。

なの：「レイジングハート、何が起きてるの!？」

レイ：「すみません、マスター。今の状況を明確に表現できる言葉がありません」

珍しく不明瞭な答えを返すパートナーを不思議に思いながら、漸く
光に慣れた目で眼前の光景を見る。

なの：「えっ!？」

そこには先程とは全く異なる情景が広がっていた。

空は星が瞬く事の無い暗闇に彩られ、海は何も映さずに時折波間に
不気味な深淵が覗くだけ。

そして、私達はその海に突き刺さる様に聳え立つ摩天楼の屋上に立
っていた。

はや：「ぜ、全員無事か？」

はやてちゃん呼びかけに応じてそれぞれが声を上げる。

リイン：「皆さん無事みたいでよかったです」

キャラ：「それにしても、ここは一体何処なんでしょう？」

??：「この世界は、我が盟友の深層意識そのものだ。竜使いの少女、そして我が同胞よ」

キャラ：「え!？」

フリー：「キュクル」

キャラの呟きにお腹に響く重厚な声が応える。

なの：「貴方は『トロイメライ』!！」

トロイ：「久しいな、セイカと似て非なる星の輝きを秘めし少女よ」

厚い暗雲に覆われた空に存在しているにも関わらず、その漆黒の巨躯は闇に霞む事の無い圧倒的な存在感を放っている。

そう、セイカちゃんと盟約を結んだ漆黒の守護竜が強靱な翼を広げて私達の頭上に現れたんだ。

フエイ：「深層意識そのもの？」

トロイ：「深層意識が作り出す空間・世界、此处とは種類は違えどもこの中には実際に体験した者も居るのではないか？」

フエイ：「……」

はや：「闇の書の夢……」

トロイ：「その通りだ、最後の夜天の主よ。恐らく、『闇の書の残滓』はセイカを吸収して『闇の書の夢』を発動させたのだろ。だが、所詮は残滓のやること、その発動プロセスの途中で主の強大な力を吸収しきれずに暴走し、プログラムは御主達を本来は彼女の為に用意された捕獲空間に誤って？み込みんだ。此处は深層意識が夢に塗り潰される直前で停止した場所、つまりはセイカの心の在りよ

うを写した世界という訳だ」

はや：「や、やけど。この世界がセイカちゃんの心の在りようやなんて到底思われへんで」

はやてちゃんの言う通りだった。この情景は如何見ても悪夢以外にしか見え……

なの：「……まさか!？」

トロイ：「そうだ。闇の残滓が内包していた負の想念がセイカの心を蝕んでいる。このまま放置すればこの世界は闇に？まれ、彼女の心は…崩壊する」

スバ：「そんなんっ!？」

ティア：「?でしょう?」

アリ・すず：「「セイカ(ちゃん)」」

心が、精神が壊れる。それは実質的な死を意味していた。

セイカちゃんの笑顔が二度と見れない。

それを想像するだけで、絶望が胸を締め付ける。

フェイ：「なのは、大丈夫？」

なの：「フェイトちゃん」

フェイトちゃんが、俯く私の肩に優しく手を置いてくれる。

彼女も言葉にはしないが、その表情はとても辛そうだった。

キャロ：「何か方法はないんですか！」

トロイ：「……」

なの：「！……あるんですね？セイカちゃんを救う方法が」

キャロの問いに答えないトロイメライを見て、彼が何か知っている可能性に思い至る。

トロイ：「うむ。危険な賭けになるが、1つだけ方法がある…のだが、どうやら悠長に説明している暇は無い様だぞ？」

全員：「「「!?」「」」

トロイメライの言葉に皆が視線を周囲に向ける。

すると、摩天楼の縁を次々と黒い手が掴み、さっきまで対峙していた黒い人型が大量に這い上がってくる。

黒型：《《《ガアアアアア！！》》》

そこには既に理性など欠片もなく、まるで野獣の如く襲い掛かって来る。

アリ・すず・エイ・美由希：「「「きゃっ!?!」「」」

トロイ：「グロリアス・プレベントー!!」

黒型：《《《グギアアアアアア!?!?》》》

アリサちゃん達の悲鳴に応えるかの様に、私達の周囲を神々しい程の光を放つ巨大な盾が取り囲み、飛び掛かった人型達は容赦なく弾き飛ばされ断末魔を上げながら摩天楼から墜落する。

エリ・キャロ：「す、凄い!!」

フリー：「キュクー!!」

トロイ：「守護竜の名は伊達ではない。だが、この盾も長くは持たん、第二派が来る前にセイ力を救う方法を教える。高町・なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神・はやて」

なの・フェイ・はや：「は、はい!!」

トロイ：「この世界は深層意識の世界と言ってもその表層でしかない。御主達には更にその奥、セイ力の心其のものに干渉してもらう」

フェイ：「干渉するって言っても如何どうすれば？それに、どうやって其処そこに行くんですか？」

トロイ：「如何すれば良いかは御主達自身で考える。これは、行っ

て何とかなるという単純な問題ではない、蝕まれているセイカの心を救わなければならんだ。移動方法は任せてもらおう、契約者と竜は一心同体、その真髄を魅せてやろう！」

その言葉と共に私達の目の前の空間が歪み、左右に竜と人が描^{えが}かれた堅牢な扉が現れる。

トロイ：「我に出来るのは此処までだ。この扉を潜^{くぐ}るか如何かは」「行きます！」「……愚問だったな。我が盟友を頼む」

私達の返事に『トロイメライ』が少しでも優しい貌をした気がする。言葉にしないで、彼もセイカちゃんを心配しているんだ。

スバ：「なのはさん、セイカさんをお願いします！」

ティア：「お願いします」

なの：「うん、必ず助けるよ」

エリ・キャロ：「フェイトさん！！」「」

フェイ：「大丈夫、直ぐに帰ってくるから。セイカと一緒にね」

エリ・キャロ：「はい!!」

はや：「ほな、行ってくるな？」

シャマ：「はやてちゃん、気を付けてね？」

シグ：「主、はやて。バニングス達は必ず守り通します」

リン：「セイカさんと一緒に必ず帰って来て下さいです」

ヴィー：「……」

はや：「どないしたん？ヴィータ？」

ヴィー：「あいつに、セイカに謝らなきゃいけない事があるんだ。だから……」

はや：「任せときーやから、皆のこと頼むで？」

ヴィー：「うん！『鉄槌の騎士』の名に賭けて、必ず！！」

アリ：「あんた達、首に縄つけてでもセイカを連れて帰って来なさいよ」

すず：「アリサちゃんってば。なのはちゃん達も気を付けてね？」

アル：「フェイト達なら何があっても問題ないだろうけどな」

美由希：「状況が全く分からないけど。なのはならきっと大丈夫だよ」

エイ：「フェイトもみんなも頑張ってるね」

なの・フェイ・はや：「「うん！」「」」

皆からの激励を受けて、私とフェイトちゃん、はやてちゃんは扉を開きセイカちゃんの心に飛び込んだ。

なのは side out

トロイメライside

我が用意した扉が役目を終えて消滅していく。

それを最期まで見届けた後、防御体制を整える為、我も摩天楼に着地する。

そして、計ったかのように黒い人型共が先程の倍以上の数を揃えて這い上がってくる。

トロイ：「有象無象共がゾロゾロと。…非戦闘員は我の下に集まれ。他の者達は遠距離攻撃が出来る者は足止めを、そうでない者は有事に備えて待機しろ。一瞬たりとも気を抜くな！！」

この場に存在する全ての者達が、指示に応える為に一斉に行動を開

始する。

この者達とならば数刻は持たせる事も可能だろう。

セイカと彼女達のことを頼むぞ『トワイライト』。

トロイメライsideout

ToBeContinue...

不屈の心に魅せられて

【『トロイメライ』が顕現させた星華の心の奥底へと繋がる扉を潜ったなのは達3名は、別々の心象世界へと飛ばされしもう。なのは海鳴市近海上空、フェイトはミッドチルダ近郊のリニアール上空、はやては機動六課の訓練場にある。それぞれの世界に共通するのは、なのは達以外の生命体が存在せず静寂に包まれているという唯一点だけであった】

なのは side

なのは：「レイジングハート、フェイトちゃんとはやてちゃんの反応は？」

レイ：「……マスター、どうやら私達は別々の心象世界へと飛ばされたようです。バルディッシュとシュベルトクロイツの信号も確認できません」

なの：「そう」

扉を潜った先に広がっていたのは、私とセイカちゃんが10年前最後の決戦を繰り広げた海鳴市近海の上空でした。だけど、あの時とは違い空は暗雲に覆われ、小雨がぱらついている。

レイ：「マスター！？前方の空間が歪曲していきます」

なの：「えっ！？」

レイジングハートの警告を受けて前方を注視していると、確かに空間が捻じ曲がり『何か』が這い出してくる。

それが完全に姿を現すと同時に雨脚が強くなり、『何か』を覆っていた黒い靄が洗い流される様に消え去る。

なの：「セイカちゃんなの？」

現れたのはバリアジャケットを展開し、ルシフェリオンを利き手で掴んで佇んでいるセイカちゃんだった。

その顔は俯いている為かはっきりと見えない。

セイ：「なのは？」

なの：「っ！？」

私の呼び掛けに応え、顔を上げたセイカちゃんの瞳は何も写さずただ虚ろだった。

セイ：「……何をしに来たんですか？」

なの：「セイカちゃんを助けに来たんだ。皆の所に一緒に帰ろう？」

セイ：「助けに？一緒に帰る？」

彼女の瞳が虚ろなものから変化する。だが、それは憎悪を宿して濁った光を放っていた。

その事に気付き、手で触れる事が出来る距離まで近づこうとするが。

ルシ：「パイロシューター」

なの：「なっ!？」

レイ：「!？プロテクション!」

だがその瞬間、ルシフェリオンから『パイロシューター』が放たれ、私に直撃する寸での所でレイジングハートが張った防御魔法がそれを防ぐ。

なの：「何をするの、セイカちゃん!？」

セイ：「ずっと待ってました、助けに来てくれるって信じて待ってた!けど、なのは何時まで待っても来てくれなかった!」

セイカちゃんは自分で流す涙にも気付かずに叫んでいる。

私には彼女の言う事は支離滅裂で全く身に覚えがない。だが、私の耳に届いた彼女の慟哭には?が混じっていない気がする。

なの：「一体、どうなってるの!？」

私は訳も分からず、飛んでくるシューターを回避と防御で捌きながら頼れるパートナーに問い掛ける。

レイ：「皆目見当も付きません。先程からルシフェリオンにアクセスを試みているのですが、一向に反応がありません」

ルシ：「ブラストファイアー」

なの：「くっ!?!」

レイ：「アクセルフィン!」

シューターに翻弄されて出来る隙を的確に突き、収束砲を打ち込んでくる。

セイ：「何も見えない、感じられない闇の中で永遠かと思えるような時間を過ごす苦しみがかかりますか？以前の様に孤独ならこの程度の事には耐えられたかもしれない。だけど、私は貴女という希望を手に入れてしまった。なのはこの闇から救ってくれるかもしれないと少しでも思ってしまったんです!」

なの：「セイカちゃん」

私の存在がセイカちゃんの中でそんなに大きくなっていたなんて。

セイ：「貴女という存在が私を弱くするんです！だから、だから私の前から消えて下さい！！」

ルシ：「クロスプラスガトリングシュート」

なの：「っ！？カートリッジロード！！」

レイ：「ロードカートリッジ！プロテクションEX！！」

彼女の言葉に衝撃を受けて、足を止めてしまったところへセイカちゃんの殲滅魔法が直撃する。

カートリッジを2発ロードした防御魔法を展開して防いでいるけど長くは持たない。

レイ：「このままではマスターが危険です！反撃を！！」

なの：「駄目！…それだけはしちやいけない気がするの」

??：《正解。攻撃なんかしたら取り返しのつかない事になる。ただでさえ、マスターの心は闇の浸食で精神バランスが不安定な状態なのです、貴女が攻撃を加えが最後本当に壊れてしまう》

レイジングハートの提案を必死に否定した時、デバイスの電子音声ではあるがどこか中性的な美しく透き通った声が聞こえた。

なの：「誰!？」

??：《失礼。名は『トワイライト』と申します、あの主至上主義者^{オシ}の妹の様なものです、以後お見知りおきを。さて、闇の残滓の妨害プログラムを完全に中和しきれておらずあまり時間がありません、手早く貴女に今必要な情報を提供したいのですが宜しいですか?》

なの：「もしかして、セイカちゃんを助ける方法を知ってるの!？」

セイカちゃんのデバイスの妹だという点も気になるけど、今は救出方法を知る事が最優先だから後回しだね。

トワイ：《肯定。マスターは闇の残滓の侵食に因って、時間的感覚の喪失、負の感情の増幅等の多数の暗示、洗脳を受けている状態です。これを解くには……》

なの：「解くには？」

トワイ：《貴女がマスターに『キス』をする必要があります》

彼女の言葉を聞いた瞬間、頭がフリーズしそうになる。今、何て言った？

なの：「キス！！？」

トワイ：《疑問。キスは接吻、口づけの事です。それ以外に意味がありますか？》

なの：「そうじゃなくて！？今！この状況で！何で『キス』なの！？」

レイ：「落ち着いて下さい、マスター。トワイライト、説明をお願いします」

トワイ：《了解。マスターのレアスキルに関係あるのですが、そのスキルの副次的な作用に状態異常からの回復効果がありますので。今回はそれを利用したいのですが》

レイ：「その発動条件が『キス』という訳ですか。マスター、ここは一思いに」

なの：「レ、レイジングハートまで。流石にセイカちゃんのことを無視してそんな事…。た、確かに、セイカちゃんの事は好きだけど」

トワイライトとレイジングハートはそう言うが、彼女の気持ち確かめてもないのにそんなこと出来ないよ。

トワイ：《説述。マスターは高町なのは、貴女を大切に思っていますよ。先程の発言を逆に捉えてみればよく分かるはずですが》

『私の中から消えて下さい』の逆？

なの：「！……レイジングハート、サポートお願い。セイカちゃんの前まで真っ直ぐ、一直線に飛びたいんだ」

レイ：「オールライト、防御行動は任せて下さい。マスターには傷一つ付けさせません」

トワイ：《それではフェイト・T・ハラウンと八神・はやてにも同じ説明をしなければならいので、これにて失礼します》

その言葉を残して、トワイライトからの通信が途切れる。

なの：「フェイトちゃんとはやてちゃんにも？……レイジングハート、準備はいいかな？」

レイ：「イ、イエス、マスター！！」

なの：「どうしたの？声が震えてるよ？」

可笑しいね、何か恐ろしいものでも見たのかな？

レイ：「いえ！？ノープロBLEMです！！…マスター、砲撃が止みました」

砲撃魔法の雨が止み、爆炎が晴れた先には魔力を消費し過ぎて疲労困憊の様子の子が居る。

セイ：「はあ…はあ…はあ…」

それを見て、私は少しずつ彼女に近づいて行く。

魔力も底を尽きかけているのだろう、時折飛来するシューターには威力がなく簡易防御魔法を張るだけで事足りる。

何時の間にか降っていた雨も上がり、雲の隙間から光が覗き始めていた。

セイ：「こ、来ないで下さい」

最初の関係は敵同士だったかもしれない。だけど、その時に見せてくれた笑顔に何故か凄く惹きつけられる自分が居た。

セイ：「なのは、お願いします。私に近づかないで」

もう会えないと思ってたけど、再び会う事が出来た時は凄く嬉しかった。ちよつと、無自覚に周りを魅了していく天然さんな所は困るけど。

ん
」

セイ：「んっ!？」

私のファーストキスは、セイカちゃんの涙の味がしたけど、それが
気にならないくらいに甘酸っぱいものでした。

なのはsideout

……のガーディアンシステムの起動を承認

セカンドスキル『エンゲージリンク』に対象者の登録を開始しま
す

1stガーディアンに『高町・なのは』を登録完了

主と対象者のリンカーコア間にパスを接続完了

主の精神に異常を検知しました『スピリチュアルメディカライザ
ー』を使用して回復を試みます

エラー

出力不足の為、精神異常を誘発している異物の排除に失敗

出力確保の為、2nd・3rdガーディアンの登録を推奨

To Be Continue...

優しい光に包まれて

【なのはが無事に（？）星華とのファーストキスを終えた頃、フェイトは『トワイライト』からなのはが受けたものと同様の説明を聞いていた。星華の容赦の無い砲撃を必死に回避しながら】

フェイト side

フェイ：「本当に！それで！星華が！助かるの！？」

トワイ：《肯定。そこは私を信じてもらう他ありません。ですが、貴女がマスターに『キス』をするのが唯一の方法である事に変わりはありませんよ？時間もそう残されていませんし》

バル：「サー！砲撃接近！！」

フエイ：「くっ！？この状況でどうやって!？」

トワイライトから解決方法は聞けたはいいけど、闇に残滓に侵食された星華の砲撃を避けるのが精一杯で近づけそうにない。リミッターも解除できないし。

だけど、さっきから星華の攻撃には少々不可解なものを感じる……

フエイ：「バルディツシュ、戦闘開始からの星華の弾道を計算して、総合的な危険度の判断をお願い」

取り合えず距離を置いて一息つきながら、バルディツシュに演算を頼む。

バル：「イエス、サー」

トワイ：《疑問。どうかされましたか？》

フエイ：「気のせいかもしれないけど、星華の攻撃、最初から私を本気で落とそうとしてないような……」

バル：「演算完了しました。……マスターのご推察通りかと。どの

攻撃も危険度は限りなく低く、寧ろゼロと言っても過言ではありません」

第三者から見れば私がギリギリで避けている様に見えたかもしれないけど、長年の実戦経験から感じた違和感は確信に変わる。

フェイ：「……やっぱり。でも、どうして？」

トワイ：《…推察。まず、今のマスターの体は人間体ですが何者かの干渉を受けた事に関わりありません。そしてフェイト、貴女は自分が作られた存在である事で周りに引け目を感じたことはありませんか？恐らく、この2つが答えに繋がる筈です。……マスターを頼みます》

その言葉を最後にトワイライトからの通信が途絶える。

それを聞いて、『闇の書事件』の時に自分の存在を一度だけ卑下して、母さん達に優しくだけどしっかりと諫められた事を思い出す。

そして、気付いた。

星華がなのはや私達とどこか線引きをした付き合いをしていた事を。

もし、彼女が無意識の内に他人に受け入れられる事に対して恐怖心を抱いていたとしたら。

今の彼女の瞳が、私が執務官になって保護した子達にどこか似ている気がした事にも納得がいく。

フェイ：「今迄、星華が隠していたか自覚していなかった感情が、精神の侵食で表に出たんだ」

バル：「サー、ご命令を」

フェイ：「バルディシュ。……星華の説得をしながらの回避になるけど、サポートお願い！」

バル：「イエス、サー。ソニックムーブ！」

フェイ：「星華——！」

離れていた距離を、瞬間移動の如く一気に詰めて話し掛ける。

星華：「……」

ルシ：「パイロシューター」

そんな私を遠ざける様に、32個のシューターが縦横無尽に襲い掛かる。

フエイ：「星華！何をそんなに怖がつてるの！？」

回避行動を取りながら、星華に話し掛ける。

星華：「！！？」

バル：《魔法の制御に乱れが生じています》

バルディッシュの言葉通り、シューターの動きが殆ど停止した状態になる。それに合わせて、私も動きを止めて星華に近づきながら声を掛ける。

フエイ：「凶星かな？」

星華：「……さい」

もう一押しだね。

フェイ：「何？聞こえないよ？」

星華：「うるさい！！」

動きを止めた私に、星華の攻撃が殺到する。

バル：「マスター！？回避を！！」

フェイ：「大丈夫！」

バルディッシュが珍しく焦った声を出して回避行動を推奨するが、私は動かない。

そして目の前にまで攻撃魔法が迫り、桜色の光が視界を塗り潰そうとする。

星華：「っ！？」

しかし次の瞬間、全てのシューターが私への直撃コースから外れて消滅する。

フェイ：「ふう」

バル：「全く、冷や冷やしましたよ？」

フェイ：「ご免、ご」如何してですか？」「…ん？」

パートナーに窘められて謝っていると、俯いて黙り込んでいた星華が声を掛けてくる。

星華：「…如何して、避けなかったんですか？」

その顔は、今にも泣き出しそうな子供の様だった。

フェイ：「うん。星華の事を信じたから、かな？」

星華：「そ、そんな訳」

フエイ：「私は星華の友達だよ？信じたら可笑しいかな？」

星華：「！！」

フエイ：「あつ！でも、今は一寸違うかな？」

星華：「え？」

驚いた表情が悲しげなものに変わるのを見て苦笑しながら、少しずつ星華に近づく。

フエイ：「今は、星華の家族になりたいんだ」

星華：「で、でも私は素性も分からない様な異質な存在なんですよ？そんな者を家族だなんて気持ち悪ふみゅう！？」

言っではいけない事を言おうとした星華の両頬を引っ張って、言葉を遮る。

フエイ：「馬鹿な事を言うのはこの口かな？（怒）」

星華：「いひゃい！いひゃい！ごめんなひゃい！？（涙）」

涙目の星華を見てると弄るのを止められなくなるのは、何でだろう？

バル：「サー？」

フェイ：「はっ！？……星華は星華、一つの命なんだ、其処に生まれ方とか素性なんて関係ないよ」

我に返った私は星華の頬を引っ張るの止めて、代わりに優しく抱きしめながら囁き掛ける。

星華：「で、でも私は…んう！？／／／／／」

まだ何かを言いかける星華を唇を奪うことで、問答無用に黙らせる。

フェイ：「ちゅ……そして、一番の理由は私が星華の事が好きだから。それじゃあ駄目かな？／／／／／」

星華：「フェイト、ありが「もう、黙って…」…ん／／／／／」

もう私には星華しか見えず、再び彼女の言葉を遮って口付けをする。

星華は私を守るから、そう心に誓いながら。

フェイトsideout

【元『星光の殲滅者』は『優しき閃光』に優しく包まれ、安息の時を得る】

セカンドスキル『エンゲージリンク』に対象者の登録を開始

2ndガーディアンに『フェイト・T・ハラオウン』を登録完了

主と対象者のリンカーコア間にパスを接続完了

『スピリチュアルメディアカライザー』の出力確保の為、3rd
ガイディングの登録を再推奨

To Be Continued . . .

罪の在り処

【星華の心象世界での最後の舞台である『機動六課屋外訓練場』では、はやてがフェイト以上に必死に逃げ回っていた】

はやて side

はや：「はあ…はあ…はあ…」

私は今、機動六課にある屋外訓練場に形成されたビル郡の一角で乱れた息を整えてる真っ最中。

トワイ：「確認。大丈夫ですか？」

はや：「大丈夫な訳あるかい！？出会い頭に砲撃ぶつ放されて、その後も延々とシューターで追い掛け回されたんやで!？」

この世界に来たら既にフィールドは形成済みで、適当に探索しとつたら星華ちゃんに遭遇、問答無用で『ブラストファイアー』を撃たれ、辛くも回避したものの続いて32個の『パイロシューター』による縦横無尽の攻撃に晒された。その後、何とか隙を突いて隠れ、今に至る。

勿論、探知防壁は展開済み。

その後、通信してきた『トワイライト』から解決の糸口を聞いたはいいんやけど、状況は八方塞がりで手の出しようがない。

はや：「私はなのはちゃん程防御は堅ないし、フェイトちゃんみたいな高速機動もできひん。どないしたもんかな？」

次に発見されたら、確実に逃げられん。星華ちゃんは二度も隙を突かせてくれる程甘い相手やないしな。

トワイ：「推奨。心象世界のバランスが崩れています、急いだほうがよろしいかと。今頃は表層世界の方にも影響が出ている筈です」

はや：「ほな、急がんな。それにしても星華ちゃんの攻撃が容赦ないんは何でやろ？」

幾らなんでも、苛烈過ぎる。

トワイ：「推測。マスターは貞操の危機を察知しているのでは？（相手が八神・はやてじゃ仕方ありませんよね）ボソッ」

はや：「どんだけ！？っていうか、今何か言ったやる！？怒らへんから言ってみ？ん？」

トワイ：「賞賛。素晴らしいノリ突っ込みです、其処に痺れる、憧れる」（棒読み）」

はや：「全然、褒める気ないやんけ！？終いにや、棒読みか！！」

トワイ：「……」

はや：「……」

トワイ：「やりますね」

はや：「あんたもな」

はや・トワイ：「HA・HA・HA・HA」

莫迦みたいな漫才をしようと、向こうの方で轟音が響き幾つもビルが倒壊するのが見えた。

トワイ：「報告。どうやら、マスターは手当たり次第に砲撃を撃ちはじめた様です。普段なら、この程度の事で無闇な行動は起こさない方なのですが」

はや：「闇の侵食の影響か…勝機が見えたな。冷静さを欠いた今の星華ちゃんなら、私でも高確率で押さえられるはずや」

上手く行くかは五分五分やけど、今はこれしか手は無い。

トワイ：「（何か思いついた様ですね。その洞察力、流石は『夜天の主』^{ルシフェリオン}では私は愚姉の制御を取り戻しますので、失礼します。…月並みですが、マスターを頼みます」

トワイライトからの通信は、その言葉を最後に途切れる。

はや：「任しとき。星華ちゃんは機動六課の大切な仲間や、必ず助

けるで」

なのはちゃんとフェイトちゃん程やないけど、私も星華ちゃんに惹かれてきとるしな。

はや：「いくで！」

スレイプニールを使って飛び上がり詠唱を開始する。

はや：「灰白^{ほのしろ}き雪の王、銀の翼^も以て、眼下の大地を白銀に染めよ。
来よ、氷結の息吹」

はや：「^{アーテム・デメイセス}氷結の息吹！！」

私の魔法で完成した気化氷結魔法が圧縮された4個の立方体が地面に打ち込まれ、辺りの熱を奪い取って凍結させていく。

そして、訓練場に聳え立つビル郡全てが凍りつく。

と同時に星華ちゃんの魔力反応が接近する。

はや：「来たな。細工は流々、後は仕掛けをごろっじろつてな」

そして、シュベルクロイツの演算で弾き出したビルの陰に移動する。

すると、高層ビルが立ち並んだ道路の上空で星華ちゃんが停止するのが見えた。

勝機！

はや：「刃^も以て、血に染めよ。穿て、ブラッディダガー！！」

私の周りに文字通り血の色をした実体を持った短剣が21本現れ、全てが四方八方に放たれる。

しかし、それらは星華ちゃんに向かうことなくビルに当たり窓ガラスが爆散する。ガラスが凍っていた為に日の光が乱反射して、その光景は正しくダイヤモンドダストのようだった。

星華ちゃんは回避する事もできずに対物防御魔法を使い防ぐけど、完全に動きが止まっている。

はや：「鎖^も以て、彼の者を縛めよ。行^ゆけ、戒めの鎖！」

シャルが使う拘束魔法を使い、彼女を捕縛する。

星華：「っ！！？」

星華ちゃんは直ぐにバインドを解こうとする。

はや：「無駄やで。そのバインドは、対象の魔力発露を阻害する効果があるんや。腕力で切断せん限り逃げられへん」

星華：「……」

はや：「チェックメイトや」

星華：「…はやて？」

俯いてた星華ちゃんが顔を上げて声を掛けてくる。その顔は精彩は欠いとるけど、瞳には光が戻ってる。

はや：「目が覚めたみたいやね？」

星華：「ご迷惑をお掛けしました。……はやて、聞きたい事があるのですが」

はや：「何や？」

星華：「はやては10年前の『闇の書事件』の罪を、管理局に入つて償っています。ですが、元とはいえ『闇の欠片』である私は罪そのもの、存在自体が許されな「アホー!!」「ふみゃ!?!」

とんでもない事を言いだした星華ちゃんをハリセンで思いっきり叩く。
はた

星華：「痛いです（涙）というか、そのハリセン何処から？」

涙目で訴えてくるが、今回ははっきり言わせてもらおうで。

はや：「秘密や……それとな、存在が許されへんやと？そんなもんは、この世にない！それとも、星華ちゃんは産まれてきたこと後悔しとんか？」

星華：「い、いいえ!……私ははやて達に出会えて良かったですノ

／／／／／

嬉しい事を言ってくれるやん。それも、照れながらとか可愛すぎるで。

はや：「そやったら何も問題ないやん。星華ちゃんは私の仲間友達の子、それで十分やろ？」

星華：「はい」

はや：「あつ！一つ忘れとった、私は星華ちゃんが大好きや！」

星華：「あつ！……んう！？／／／／／」

涙を流しながら頷く星華ちゃんを抱きしめ、唇を奪う。

はや：「んう……ちゅ……んん」

星華：「ちゅ……はあ。はやてえ／／／／／」

ほんまに可愛いなあ、星華ちゃんは。

私を本気にさせたんやから覚悟しときや？

はやてsideout

セカンドスキル『エンゲージリンク』に対象者の登録を開始

3rdガーディアンに『八神・はやて』を登録完了

主と対象者のリンカーコア間にパスを接続完了

『スピリチュアルメディアライザー』の出力を確保しました

深層意識に寄生している『闇の残滓』の排除を最優先

『スピリチュアルメディアカライザー』 起動

……の主の意識を覚醒させます

T o B e C o n t i n u e . . .

覚醒する力

『『スピリチュアルメディカライザー』が発動した頃、星華の精神世界の表層では残った者達が闇の人型達の猛攻を辛うじて防いでいた』

Another:side

スバ：「一撃必倒！ディバイーン、バスター！！」

ティア：「クロスファイアー、シュート！！」

スバルとティアナの砲撃魔法と射撃魔法が地面に着弾し、巻き起こされた爆風が人型を吹き飛ばす。

エリ：「もう一度行くよ、キャロ！ストラダー！！」

キャロ：「はい！」

スト：「承知！」

エリオの声にキャラとストラダが応える。

キャラ：「我が乞うは、烈風の刃。若き槍騎士の刃に、祝福の風を」

ケリュ：「エンチャント・バイオレントウィンド」

キャラ：「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

ケリュ：「ブーストアップ・ストライクパワー」

キャラ：「ダブルブースト!!」

スト：「受諾！」

1つは槍に風を纏わせ、もう1つはエリオとストラダに力を与える。

エリ：「烈風!!」

スト：「ルフトメッサー！！」

周囲の空気を圧縮・加速した無数の斬撃が、暴風を巻き起こしながら人型達に飛来し、それらを切り刻みながら吹き飛ばす。

シグ：「飛竜一閃！！」

ヴィー：「アイゼン！！」

グラー：「シュワルベフリーゲン！」

此方こちらもFW陣にも負けない勢いで、シグナムとヴィータが次々と敵を屋上から吹き飛ばす。

そして、もう何陣目か分からない程の人型の群れを一掃する。

しかし、全員無傷ではあったが、疲労がピークに達し魔力も枯渴しかけていた。

スバ・ティア・エリ・キャロ：「「「はあ…はあ…はあ…」」」

シグ：「そろそろ不味いな」

ヴィー：「ああ、あたし達の残りの魔力量もやべえ」

トロイ：「私の『グロリアス・プレベーター』も使用限界だ（『グロリアス・エクスキュター』は此处で使用するには威力が高すぎる。急げ、星華よ！もう持たんぞ！！）」

シャマ：「っ！？次、来ます！！」

リン：「まだ来るですか！？（泣）」

全員：「「「！！？」」「」」

敵性体の探査に集中していたシャマルの言葉に、全員が息を？む。

黒型：《《《ガアアアアア！！！！》》》

そして、先程と変わらないかそれ以上の数の人型が彼女達に襲い掛かる。雄叫びを上げながら摩天楼を這い上がって来る。

しかし……

「デイベイン、バスター!!」

「プラズマ、スマッシャー!!」

「ブラスト、ファイアー!!」

黒型：《《ギヤアアアア!!!!》》

降り注ぐ3条の閃光が引き起こした魔力爆発が、全ての人型を悉く消滅させた。

Another:sideout

【覚醒した星華はなのは・フェイト・はやてを連れ、皆を助ける為に表層世界へと通じる扉を潜った。そして扉を出た先で、今正に皆に襲い掛かろうとする人型達が瞳に写った】

星華 side

星華：「っ！？なのは！フェイト！私に合わせて砲撃をお願いします！！」

なの：「うん！」

フェイ：「分かった！」

はや：「私は！？」

敵性体を確認

『エンゲージリンク』を発動

主と1stガーディアン『高町・なのは』・2ndガーディアン『フェイト・T・ハラオウン』のリンカーコアリンクを活性化開始

《リンカーコアの共鳴率上昇

「ENGAGE」

今、何かが聞こえた様な気が。

ルシ：「マイロード？」

星華：「大丈夫ですよ、ルシフェリオン」

今は敵を殲滅する事に専念しましょう。

星華：「ブラスト、ファイアー！！」

なの：「デイベイン、バスター！！」

フェイ：「プラズマ、スマッシュャー！！」

黒型：《《《ギアアアアアア！！！！》》》

そうして放たれた3条の閃光は、人型達を焼き尽くす。

星華・なの・フェイ：「くうっ!!?」「」

しかし、私達は自分自身が放った魔法の反動に思わず顔を顰める。

はや：「ど、どないしたん?」

星華：「砲撃の威力が上がっている?」

フェイ：「わ、私も」

なの：「星華ちゃんとフェイトちゃんも? レイジングハート、データ算出をお願い」

レイ：「イ、イエスマスター。……先程の皆様の砲撃は、リミッタ解除時よりは低いですがかなりの威力が出ていました。」

デバイスであるレイジングハートでさえ、戸惑いながら報告する。

彼女の言う通り、リミッターが掛かっている状態であの威力は可笑しい。

そして、ミッドチルダに帰還後にリミッターを掛ける予定だった私に至っては、異常と言っても過言ではない威力。

唯一の救いは、トロイメライが展開した防御魔法のお陰で皆に被害が無かった事ですね。

はや：「幾らなんでも、そんな訳は。レイジングハート、バルディッシュ、2人のリミッターは？」

レイ：「マスターと私のリミッターは正常稼働中です」

バル：「こちらも同様です」

はやての疑問にレイジングハートとバルディッシュが答える。

フェイ：「なのは、はやて、もしかして『トワイライト』の言っていた星華のレアスキルに関係あるんじゃない？」

星華・ルシ：「トワイライト??」

聞き覚えの無い名前ですね。

黒型：《グオオオオオ！！！》

全員：「「「なっ！！？」」「」」

その時、凄まじい雄たけびと共に海の深淵から現れたのは、巨大な闇の獣。

大きさは…『闇の書の防衛プログラム』と良い勝負ですね。

星華：「…どうやら、数で攻めるのは止めて一気に勝負を決める腹積もりの様ですね」

はや：「幾らなんでも反則やろ」

なの：「まともな攻撃は通じないよね」

物理攻撃は無効化、魔法攻撃は吸収するってどんな化け物ですか。

トロイ：「（確固たる絆を得た今ならばこの力を制御できる筈。ルシフェリオン、1stプロテクトの限定解除を許可する。星華、新しい力を以って闇を浄化するのだ）」

ルシ：「っ！？マイロード！私に掛かっていたプロテクトの1つが解除されています！！」

星華：「何故、今になって…っ！？」

突然の事態に驚くが、頭の中に『プラスモード』に続く新たな力の情報が流れ込む。

星華：「……ルシフェリオン！『アカシックモード』起動！！」

ルシ：「イエス、マイロード！『アカシックモード』を起動します」

私の声に応えて、ルシフェリオンの形が先端に二門の砲塔が装備された三叉戟型のデバイスへと変化する。

バリアジャケットも同様に、ロングスカートへと形が変わる。

なの・はや：「星華ちゃん！？」
「フエイ：「星華！？」

星華：「続いて『フェザーオブメシア』を展開」

主の『フェザーオブメシア』の起動要請を確認

『エンゲージリンク』を追加発動

主と3rdガーディアン『八神・はやて』のリンカーコアリンク
を活性化開始

リンカーコアの共鳴率上昇

|| ENGAGE ||

そして、背中に桃色・金色・銀色をした3枚の羽で構成された片翼
が現れる。

なの：「…綺麗」

フェイ：「…うん」

黒型：《グオオオオオオ！！》

？？：《苦しい！助けて！》

『フェザーオブメシア』を通じて闇の欠片の心の声が聞こえる、救済を望む声が。

私を生み出した闇の残滓、まだあの中に欠片が残っているなら。

助けたい。いえ、必ず助ける！

星華：「集え^{あかほし}明星！全てを救済せし^{ほむ}焰となれ！」

『フェザーオブメシア』が、その翼を広げて輝き出す。

頭上に掲げたルシフェリオンに桜色・桃色・金色・銀色の魔力光が収束する。

星華：「アカシック、ブレイカー……！！！」

放たれたのは破壊と再生の光、闇を打ち消し一撃で浄化する。

そして、世界は光に包まれた。

星華 side out

To Be Continue . . .

深まる絆と謎

Ⅱ第97管理外世界『地球』・海鳴市バニングス家所有の別荘Ⅱ

星華 side

星華：「・・・此処は？」

知らない天井ですね。木造建造物でしょうか？

ルシ：「マイロード！？目が覚めたんですね、本当に良かったです。もう、目が覚めないんじゃないかと心配で・・・」

星華：「ありがとう、ルシフェリオン。貴女のようなデバイスの主になれた私は幸せ者ですね」

ルシ：「勿体無いお言葉、今後も私はマイロードを支え続けます。例えこの身が砕けようとも」

星華：「それは困りますね、ルシフェリオンには私のパートナーとせずと居てもらわないと」

ルシ：「マイロード（泣）」

さて、そろそろ状況確認しないといけませんね。

星華：「ルシフェリオン」

ルシ：「イ、イエス。マイロードは深層意識からの脱出直後にお倒れになったんです」

星華：「原因は？」

ルシ：「私の『アカシックモード』の解放と、その後の『アカシックブレイカー』の行使が原因かと思われます」

『アカシックモード』？『アカシックブレイカー』？

星華：「ルシフェリオン。どうやら私には、なのは達と砲撃を放つてからの記憶が欠落しているようです」

ルシ：「！？・・・そうですか。実は『アカシックモード』はあれ以降、再びプロテクトがかけられたようで解析不可能となっていました」

星華：「私達の魔法の威力が上がった現象は？」

ルシ：「マイロードのレアスキルかと思われますが、詳細は不明です。ですので、呼称は決まっていません。あと、深層世界で高町・

なのは達に接触した私の妹だという『トワイライト』ですが、こちららは名前以外一切不明です」

益々私の正体が分からなくなった、という事ですか。

ふふ、こんなネガティブな事を考えてたらなのは達に怒られますね。謎を解く為の『ピース』が増えたど、前向きに考える事にしましょう。

ルシ：「それと、大変申し上げ難いのですが………」

星華：「???」

これ以上何かあるんでしょうか？

ルシフェリオンが口ごもるとは珍しいですね。

??：「うん」

そう思っていると、私の隣から可愛らしい間延びした声が聞こえてくる。

??：「あっ!?!主様が起きてる!?!」

そう大声を上げて布団の中から飛び出して来たのは、リインをショートヘアにし顔を少しボーイッシュな感じにした融合騎。

星華：「……………ルシフェリオン、この子は？」

ルシ：「そ、それが。お倒れになったマイロードの腕に抱かれていたのです」

??：「主様……。僕を無視しないで」

星華：「すみません、少しだけ待っててもらえますか？」

??：「にゅあ~~~~／／／」

泣きそうな顔で縋ってきたのを、頭を撫でて慰める。

綺麗な髪ですね。それに、反応が猫みたいで可愛い。

ルシ：「（おのれ新人、私を差し置いてマイロードのご寵愛を受けるとは……）」

星華：「それで、この子が生まれた原因は？」

ルシ：「は、はい。簡易検査では全くの問題なし、間違いなく融合騎・ユニゾンデバイスです。原因ですが、トロイメライが言うには

マイロードの『アカシックブレイカー』によって闇の残滓が浄化されて、中に残っていた闇の欠片が変化したのがこの子ではないかと」

星華：「トロイメライが……」

ルシ：「マイロードの『アカシックブレイカー』使用時の魔力を検査したのですが、性質は不明で管理局の記録上にも存在しませんでした」

それをトロイメライが『浄化』と呼んだ。

彼は何かを隠している、初めて儀式召還した時もあれほど強大な竜を呼び出せるとは思っていなかった。

これは、一度調べてみる必要がありますね。

??：「主様、僕に名前をくれませんか？」

星華：「……私でいいのですか？」

??：「うん！主様は僕を助けてくれた、だから」

名前ですか、誰かに付けるのは初めてだから緊張します。

ルシフェリオンの妹分になるわけですね。ルシフェリオンの意味は『明けの明星』、金星ですね。確か金星の女神の名前は……

・

星華：「・・・イシュタル。貴女の名前はイシュタルです」

イル：「イシュタル。うん！僕の名前はイシュタルだね！主様、ありがとう！」

星華：「これから宜しくお願いしますね、イル。ルシフェリオン、貴女の妹分です。仲良くして下さいよ？」

ルシ：「モチロデスヨ」

星華・イル：「「???」」

返事が片言の様な気が。

ヴィー：「目、覚めたのか」

星華：「ヴィータ」

ドアを開けて室内に入って来たのは、ヴィータ。

手に持っている水の入った容器を見るに、気を使ってくれているのだろう。

ヴィー：「あのよ。少し話があるんだけど」

星華：「？」

そう言つて、イルの方を見る。

誰かに聞かれたくない話のようですね。

星華：「イル、ルシフェリオンを持つて外で遊んで来なさい。ルシフェリオンの言うことをよく聞いて、遠くに言つては駄目ですよ？」

イル：「はい、行こう姉様」

ルシ：「へ？ちょっと！イル、離しなさい！マイロード！マイロードー！」

ふわりと飛んだイルが、ルシフェリオンを掴んで外に出て行く。

叫び声が聞こえた気がしますが、気にしない事にしましょう。

ヴィー：「あ、あのよ！今日はその、助けてくれて………ありがとな」

星華：「あの時の事ですか、私は気にしていませんよ？」

ヴィー：「どうして、私を助けたんだ？気づいてただろ、私がお前を好く思つてなかったの」

星華：「あの時は、無我夢中でしたから。それに、私も助けてもらいました、お相手ですよ？」

ヴィー：「今度から・・・」

星華：「ん？」

ヴィー：「今度から、お前は私が守ってやる！はやてとなのはの事は勿論だけど、星華の事も守ってやる。だから！・・・もう、あんな無茶するんじゃないぞ」

ヴィータは顔を赤くしながら、目尻に水滴を湛えてる。

私の存在していなかった10年間に何かあったんでしょうか？

人の過去を調べるのは気が進みませんが、これも少し調べた方が良さそうですね。

なのはの教導を見ていて感じた違和感の答えがあるかもしれません。

星華：「分かりました。けど、後悔はしていませんよ？あの時、ヴィータを助けた事を（ニコ）」↑星華のキラースマイル発動！！

ヴィータ：「そ、そうか！水は此処に置いとくから！なのは達を呼んでくる！（なんだよ、この気持ち
は！？）」↑ヴィータに9999のダメージ！！

更に、顔を紅潮させたヴィータは凄い勢いで部屋を出ていく。

私、何かしましたか？

■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

星華：「なのは、私は何で正座をさせられているんでしょうか？」

私はあの後に来た、なのは・フェイト・はやてによって床に正座させられています。

他の皆は、『スーパー銭湯』に行ったらしい。（ヴィータは凄いスピードで皆の後を追いかけて行ったそうです）

あと、今回の任務は日帰りの予定だったそうですが、皆の疲労困憊の様子を見て一泊する事になったと聞きました。

なの：「やっぱり分かってないんだね」

フェイ：「これが星華なんだよ」

はや：「正か、ヴィータまで犠牲になるとはなあ」

星華：「ヴィータがどうかしたんですか？」

なの・フェイ・はや：「」「はあ」「」

溜息を付かれる程の事をした覚えがないんですけど。

はや：「これも、惚れた弱みなんかな？」

フェイ：「・・・だね」

なの：「にやはは」

惚れた？その言葉で思い出すのは、深層世界での三人との・・・
・キス。

星華：「ふえ~~~~／／／／／」

顔が尋常じゃないくらい赤くなるのに気付いて、布団で顔を隠す。

駄目です、心臓の鼓動の音が大きくなるのを抑えられません。

なのは達には聞こえて無いでしょうか？

フエイ：「あれ？今思い出したの？私達とのキス」

なの：「ふふ、何で顔を隠すのかな？もしかして、嫌だった？」

星華：「違います！ただ少し恥ずかしくて、なののは意地悪です／
／／／／」

絶対に分かってやってます。確信犯です。

はや：「まあ、取り合えず恋人からやね」

こ、恋人／／／／／

別に嫌ではないんですけど、余りにも話が急で。

はや：《目標は私達のお嫁さんになってもらう事やで？》

なの：《私達が争っても、百害あって一利なしだからね》

フエイ：《これ以上、星華に惚れる人が増えても困るし》

はや：《それが一番の問題なんや。なんせ星華ちゃんは無自覚な天然さんやから》

なの：《それじゃあ、協定を結ぼうか。抜け駆けは無しだよ？》

フェイ：《うん》　はや：《了解や》

【これがなのは・フェイト・はやてによって後に『SSS団』と呼ばれる組織が結成された瞬間だった。』SⅡ星華が・SⅡ好きで好きで・SⅡ仕方が無い』】

星華：「（ゾクッ）！！？」

今の寒気は一体？

なの：「取り合えず。無茶をしたお仕置きはしないとね？」（黒笑）

え？

はや：「そやね。取り合えず皆が帰ってくるまでの間、順番に星華ちゃんを可愛がるゆうのはどうやる？」（黒笑）

冗談ですよ？

なの：「流石ははやてちゃん、いいアイデアだね？」（黒笑）

嘘だと言っして下さい！？（泣）

はや：「フェイトちゃん、私、なのはちゃんの順番でえええよな？
（黒笑）」

フェイ：「いいんじゃないかな（黒笑）」

なの：「それじゃあフェイトちゃん、星華ちゃんを宜しくね」（黒笑）」

はや：「交代時間になったら、通信で連絡するからな」（黒笑）」

そう言っ出て行った、なのはとはやて。

フェイ：「それじゃあ行こうか？」

星華：「あっ！？／／／」

この格好はお姫様抱っこですか！？

フェイトく、平然とこんな事をしないで下さい。

フェイ：「優しくするからね？」

星華：「は、はい／／／」

何だか、凄く流されていつてる気がします。

私は明日を無事に迎える事が出来るんでしょうか？

星華 side out

はや：「そういえばフェイトちゃん、今日は鼻血を出してないような？」

なの：「血が滲む様な努力をしたらしいよ？」

はや：「それは大量に血も滲んだやろうなあ」

イル：「姉様、次は何して遊ぶ？」

ルシ：「そうですね（マイロードの所に帰りたい。でも、マイロードの命令は絶対です。私は如何すれば？）」

イル：「姉様？」

T
O
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

彼女達の日常？

星華 side

星華：「はあ・・・はあ・・・如何してこうなったんでしょう？」

ルシ：「今回ばかりは私にも分かりません 本当は分かってるんです。マイロードが美し過ぎるのがいけないんです」

私はたった今、機動六課の隊舎の影で荒い息を吐いています。

イル：「主様、今のところ接近中の反応はありません」

星華：「ご苦労様、イルは本当に優秀ですね」

イル：「にゅあ、にゅあ／＼／」

ルシ：「おのれイシュタル、マイロードのご寵愛を又しても（怒）」

ユニゾンデバイスであるイシュタルは察知と空間把握の能力に非常に優れており、私の砲撃と合わせれば強力な力になる。

はや：《機動六課部隊長八神・はやてから総員に通達！星華ちゃん

の魔力反応を隊舎付近で感知！一番に捕まえた奴には星華ちゃんと一日デートする権利をプレゼントや！！》

星華：「は、はやて〜！！？」

はやての無茶苦茶な課内放送を聞いた私は、戸惑いの声を上げながら今朝の事を思い出していた。

■ □ ■ □ ■ 回想開始 ■ □ ■ □ ■

星華：「んう・・・ううゝ・・・朝ですか」

イル：「主様、おはよう」

星華：「イルは早起きですね？」

イル：「うんゝ」

イルは基本的に早寝・早起きで、何時も私の周りを元気良く過ごしているのを見ていると妹が出来た様で嬉しい限りです。

星華：「お早うルシフェリオン」

ルシ：「グッドモーニング、マ・・・イ・・・ロード？」

星華：「どうかしたんですか？」

ルシ：「マ、マイロード。御体が少女化しています 嗚呼、小さくなった御姿も素晴らしいです！！」

星華：「え！？」

慌てて自分の体を確認すると、確かに体が9才前後のものへと変化している。

寝起きの頭では気付けなかったのか、それにしても『High Speed Magic Recovery』を使用した覚えは無いのですが。
↑以降は『高速魔力回復』の事を『HSMR』と表記します

なの：「星華ちゃん？もう起き・・・た・・・の？」

私の声が大きかったのだろう隣で寝ていたのはが起きてしまい、私の姿が彼女の視界に入ってしまう。

それはもうバツチリと！！

星華：「ルシフェリオン、バリアジャケットを」

ルシ：「バリアジャケット、セットアップ」

なの：「え！？」

星華：「戦略的離脱！」

イル：「離脱」

すぐさま思考を再開させた私は、バリアジャケットを展開し部屋から飛び出した。

■ □ ■ □ ■ 回想終了 ■ □ ■ □ ■

飛び出す際になのはから声を掛けられた気もしたが、本能が叫んでいたんです『逃げろ』と。

海鳴市に行く前なら、可愛がられる程度で済んだがなのは達との『恋人同士？』な関係を考えるとどんな目に遭うか想像もつかない。

そうして、私は体が元に戻るまでの逃走劇を開始しました。

男性隊員1：「居たぞ！星華さんだ！！」

男性隊員2：「星華さん！俺の為に一生味噌汁を作ってくれませんか！！」

男性隊員3：「ち、小さい星華さん。萌え〜〜〜！！」

星華・イル：「「ひい！！？」」

はやての放送があつた直後に現れた男性局員の集団。

目が、目が肉食獣のそれですよ！？

なの：「デイベイン、バスター！！」

フェイ：「プラズマ、スマツシャー！！」

獣達：「「「ぎゃあああああ！！？」」」

男性局員だったもの達が私に向かって突っ込もうとした瞬間、桃色
と金色の閃光が獣達を葬り去る。↑非殺傷ですよ、ここ重要

なの：「大丈夫？星華ちゃん？」

フェイ：「何もされてない？」

星華：「は、はい」

なの：「良かった♪それじゃあこっちに来て？」

フェイ：「私となのはが護ってあげるから」

そう言つて微笑む顔を見ていると安心出来るんですが、目が笑つてませんよ？

星華：《ルシフェリオン、逃走ルートの検索を》

ルシ：《イエス、マイロード》

魔王^{なのは}：「あれ？どうして後ろに下がるのかな？かな？」↑一瞬、ひぐらしの鳴く声が

死神^{フェイト}：「おかしいね、私達は星華ちゃんを助けたいだけなのに」

星華：「あうあうあう・・・」

こ、壊される。今捕まったらいろんな意味で壊される。

獣1：「待ってもらいましょうか、高町一等空尉、ハラオウン執務官」

獣2：「星華さんに返事を貰うまでは倒れん！」

魔王：なのは「へえ、そんなにお話されたいのかな？」

死神：フェイト「なのは、私も手伝うよ」

ルシ：《マイロード、今です！！》

後ろから聞こえる阿鼻叫喚と爆音を聞きながら私は駆け出した。

局員けだものだった者達：「「「エースオブエースが何ぼのもんじゃあああ
あああああ！！？」」「」

魔王：なのは「少し頭冷やそうか？」

ありがとうございます、名も知らない人達！そして、さようなら！
！（涙）

■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

あれだけの人間が外に居たんです、六課の本棟なら隠れる場所も有

る筈・・・

シグ：「大人しく私に捕まってくれ、星華」

と、思っていました（泣）

星華：「シ、シグナムまで私を狙っているんですか？」

シグ：「ば、馬鹿をいうな！？私は好敵手である星華を助けようと思っ
て探していただけだ！！／／／／／」

星華：「そ、そうですか。ありがとうございます」

烈火の将を疑うなんてどうかしましたね。

シグ：「それでどうする？お前が元に戻るまで何処かの部屋に隠れる
のが有効だと思うが」

はや：「ところがどっこい、そうわ問屋が卸さへんで」

シグ：「主はやて！？」

はや：「シグナム？まさか主である私を裏切ったりせえへんよな？」

シグ：「しかし主、今回のやり方は些か納得いきません！」

そう言ってレヴァンティンを構えるシグナム。

はや：「そか。なら押し通るまでや！」

シグナムに対抗してシュベルクロイツを構えるはやて。

シグ：「主の間違いを正すのも騎士の勤めです！-！」

イル：「おゝ、カッコイイ！-！」

はや：「よう言った！なら止めてみい！-！」

シグ：「はい！」

あゝ、何だか蚊帳の外みたいですな。

でも、この二人が本気でぶつかったらこの機動六課が消滅してしまうかもしれません。

星華：「ルシフェリオン、イリユージョンミストを全力全開で展開」

ルシ：「イリユージョンミスト」

イル：「フルバースト」

はや：「ぶわっ!？」

シグ：「な、何!？」

ルシフェリオンから放たれた大量の桜色の魔力粒子がはやとシグナムを呑み込むだけでなく機動六課本棟の内部を蹂躪する。

はや：「ゲホッ、ゲホッ。星華ちゃん、一体何すんねんって何やこれ!？」

シグ：「これは幻術魔法か!？」

その通りです。

今散布した粒子には私の姿を写す効果があるから、今頃この建物の内部には私の幻影が溢れかえっていることだろう。

因みに、質量は最低限しか持たせてないので触れるだけで消滅するだろうが。

氣勢が削がれたのか、はやとシグナムも呆然としているようだし、これにて失礼します。



星華：「やれやれ。やっと落ち着けそうです」

イル：「主様、大丈夫？」

星華：「そうですね、少々疲れましたしあそこの木陰で休みましょ
うか？」

イル：「休む。あれ？スバルが居るよ？」

私の角度からは見えませんが、イルがそう言うなら・・・

スバ：「きゅ～～」

本当に居ましたよ。

しかも何故か気絶して、もしかしてなのは達の戦闘の流れ弾にでも
当たりましたか。

星華：「このまま、地面に寝かせておく訳にはいきませんね」

スバ：「うん」

ルシ：「マ、マイロード、何を!？」

星華：「只の膝枕ですが？」

イル：「僕も」

星華：「いいですよ」

イル：「わーい」

星華：「ルシフェリオン、雑音の遮断と魔力隠蔽の魔法をお願いします」

ルシ：「イエス、マイロード 体の無いこの身が恨めしい!!」

星華：「ありがとう。この騒動が収まったら、私がフルメンテしますからね?」

ルシ：「は、はい」

海から聞こえてくるさざ波の音と暖かな木漏れ日を体で感じながら、
こっという騒がしい日も悪くないと思っている自分に苦笑した。

星華 side out

【結果的に星華とデートするのはスバルとなり、今回暴走した三人娘は始末書を書かされた上に少しの間星華と口を聞いて貰えなくなる等、散々だったらしい】

【因みに、エリオとキャロはティアナによって保護されて無事だった】

To Be Continued . . .

機人の姉妹

スバル side

こんにちは、スバル・ナカジマです。

今日は、機動六課の同僚で囑託魔導師の星華さんの付き添いでミッドチルダ首都・グラナガンの中央駅に來ています。

因みに、制服は少女サイズになったイルも含めて三人共地上部隊の物を着ています。

「すみません、スバル。」

訓練があるのに付き合わせてしまって」

「ごめんね、スバル」

「い、いえ！気にしないで下さい。」

誰も手が空いてない状態でしたし、仕方ないですよ」

「ありがとうございます」

「ありがとう」

ロングアーチスタッフは急に入った決済の処理作業で缶詰状態。

フェイト隊長は調査任務で、シグナム副隊長とヴィータ副隊長は出向任務、なのはさんは教導隊からの呼び出し。

その為、私達の訓練を見る人が居ないのでティアがエリオとキャロの自主練の監督を任せられ。

私が星華さんの同伴を命じられたんだけど・・・要するに他に誰も居ないからお鉢が回って来たんだよね。orz

あと、男性局員に任せるといふ案はなのはさん達の殺意という名の無言のプレッシャーで廃案になった。

「タクシーは・・・」

「スバル・ナカジマ、案内の再開を」

「あつ、すみません。こっちです」

うう、幾ら呆けてたからってデバイスにまで諫められる私って・・・

移動中

「ここが開発局本部ですか」

「大きいね」

「地上本部には負けますよ」

「あちらはミッドチルダの象徴とも言える建造物ですから、比べるのは酷というものでしょう」

「そうですね。此処では魔力の出力リミッターの設定でしたっけ？」

「それもありますが、依頼していた物が出来上がったそうなのでその受理も兼ねているんです」

それは聞いてないよ!？

「因みに、何を受理するんですか？」

「それはですね・・・」

「そ、それは? (ゴクッ)」

「秘密です」

「「!?!?!?!」↑限界点突破!スバルとルシフェリオンに9999のダメージ!!」

せ、星華さん。

その笑顔で、お茶目なポーズは反則です。

初めて会った時は、助けて貰っておいでどうかと思うけど酷く冷たい印象を受けた。

だけど、海鳴市から帰ってからは少しだけ雰囲気が和らいだ感じがして只でさえ美人だったのに更に美しさに磨きがかかった様な気がする。

そして、子供サイズになったイルが甘えてくるのを優しく抱きしめている星華さんを目撃して今の私の様に精神的ダメージを受けて悶える局員が少なからず居るらしい。

噂では誰かがファンクラブまで設立されたとかされてないとか。

高ランク魔導師・美人・料理上手の三拍子に加え、普段のクールな振る舞いの中で時折覗かせる優しさ・・・普通にファンクラブがあってもおかしくないような。

「私とイルはこのまま受付に行って所用を済ませますが、スバルは

どうしますか？」

「そうですね・・・ロビーで待ってます」

「分かりました。」

少しの間、イルの事を頼みます」

「はい。イル、行こうか？」

「うん」

受付へと向かう星華さんを見送り、イルと手を繋いでロビー近くの待合室へと歩を進めた。

「キャアアッ！！？」

「何！？

「ふえ？」

女の子の悲鳴が聞こえたのは、休憩室でイルと一緒に売店で購入したジュースを飲んでいる時だった。

「人質を解放して、投降しなさい！」

「黙れ！・・・手前こそ、^{てめえ}一步でも動いたらこの女がどうなるか分かってるよなあ！！」

「た、助け・・・」

「くっ！？」

イルを休憩室から出ないように言い含めて、ロビー方向から逃げてくる人達の波に逆らって突き進むと、一般人の女性を後ろから片腕で羽交い締めにして剣型のデバイスを正面に突き出す格好で構えている三十代後半の男性が居た。

そして、それと対峙する様に戦闘態勢をとっているのは・・・

「ギン姉・・・」

私の姉で、陸上警備隊第108部隊に所属しているギンガ・ナカジ

マでした。

スバルside out

ギンガside

幾ら自分達の管轄で起きた事件の容疑者だからって、情報を出し渋るからこういうことになるのよ！

私達、陸士108部隊に応援要請が来たのは犯人が担当地区の部隊の包囲網を突破した後。

私が発見したのは、追い詰められた男が人質をとって開発局本部に入って行く姿。

そしてたった今、人質を盾にしながら武装局員に一般的に貸与される剣型のデバイスをこちらに向ける男と対峙している。

「私は陸士108部隊所属捜査官、ギンガ・ナカジマ陸曹です。

これ以上、罪を重ねる前に投降して下さい」

「誰が！」

「・・・ん？ナカジマだと？」

「そうか・・・お前、クイント・ナカジマの娘か！」

「・・・何で母さんの名前を？」

嫌な予感がした。

だけど、どうしても聞かずにはいられなかった。

「くくく・・・そりゃあ、元上司様の名前は忘れねえよ。

そして、まだ管理局に居た頃・・・今から十一年前に俺達の部隊が
助けたお前等『戦闘機人』^{化け物}の姉妹の事もな！」

「っ！！!?」

「それから直ぐに不正がばれてクビになったから、お前等がどうな
ったかなんて知らなかったが。

逆か、化け物の癖に市民を守る管理局員とはなあ」

「貴方には関係ありません!!」

落ち着け！

相手が私の過去を知つていようと、するべき事は一つだけ。

如何に、人質を無傷で解放して相手を無力化するか。

念話で失礼します。

私は機動六課所属の囑託魔導師の星華、貴女に協力をしたいのですが

ギンガ・ナカジマです。

星華さんは今何処に？

犯人の死角です。

デバイスも展開済みで、何時でも射撃可能です

・・・奴の武器だけに当てる自信はありますか？

私は本来、狙撃型ではなく砲撃型の魔導師なので以前なら一か八かの賭になりましたが・・・

今は融合騎とユニゾン状態で精密射撃が可能です。絶対に外しません

・・・では、私が人質を奪い返す為に走り出すと同時に犯人のデバイスを無力化して下さい

了解。

ではカウントお願いします

3・・・2・・・1・・・

GO!!!

カウント終了と同時にブリッツキヤリバーを床との接地面から白煙が出る程の出力で走行させる。

「なっ！？人質がどうなっても、ぐあっ！！？」

私の行動を認識した男が剣を女性の首筋に当てようとするが背後から飛来した桜色のシューターが手の甲に直撃し、骨が碎ける音とデバイスが床に落ちた音がほぼ同時に聞こえた。

「はあっ！！！」

「ぐばあっ！！？」

人質から手を離し後ろによるめいた男と交差する瞬間、疾走する速度を緩めることなく放った拳が男の顔面に突き刺さる。

「づがま
”
つでだま
”
る
”
が！」

「しまっ!？」

吹っ飛んだ男が、拳打が浅く入ったのか数回転がった後、鼻血を流しながらも起き上がって近くにいた女の子に迫る。

あれは・・・スバル！？

何故此処に居るかは分からないけど、呆然自失の状態で動こうとしない。

「罪深き者を終焉の十字架をもつて裁きを与えん」

「【クロスエンド・ドライブ】」

「シュート」

「!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

スバルに向かって「逃げて!!」と叫ぼうとした瞬間、男の体を複

数の剣の様な物が貫き地面に縫いつける。

良く見ると5発のスフィアで構成された巨大な十字架で、攻撃対象を完全に封殺し無力化した。

非殺傷設定なので肉体に直接的なダメージは無いようだが幾ら何でもこれは・・・

・・・本当に死んでないわよね？

「少し殺り過ぎましたか？」

「いえ、人質を取るような屑相手に遠慮はいらないかと」

そこに、地上部隊の制服を着込んだ美女が歩いてくる。

スバルがメールで自慢するのが良く分かるわね。

今の物騒な発言は聞かなかったことにしましょう。

「星華さんでしたよね？」

「協力ありがとうございました」

「それより、スバルは・・・」

「あ・・・わ、私は」

近づいてみるが、何時もの天真爛漫な表情が嘘のように青ざめて、その怯えた視線は私ではなく星華さんに向いている。

スバル・・・貴女。

「・・・・・・・・星華さん。
後でお時間を頂けますか？」

「構いません」

「ありがとうございます」

私はその場で拳を握り締め、たった一人の大事な妹の心は絶対に守ろうと決意した。

ギンガsideout

星華 side

男を遅れてやってきた管理局員に引き渡した後、私とイルはナカジマ姉妹に連れられて近場の公共公園へと足を向けるが、スバルは終始黙って俯いたままでその雰囲気には引きずられるように全員が沈黙を保っていた。

イルは初めてのユニゾンで疲れたのか、省エネモードに戻って胸ポケットで眠りにについている。

「スバル、此処に座って」

「・・・うん」

海が見えるベンチにギンガがスバルを座らせ、ギンガもその隣に座って彼女の肩を抱く。

「今から言う事は他言無用でお願いします」

「っ」

「勿論です」

「あの男が言っていた通り、私とスバルは“戦闘機人”。人体に身体能力を強化する為の機械部品をインプラントした存在の総称で、いわゆるサイボーグのようなものです」

「ですが・・・」

「はい。」

倫理的、技術的な問題からタブー視されていますが、非合法組織では未だに開発が進んでいるらしいです。

そして、私達の母親である“クイント・ナカジマ”とは本当の意味での血の繋がりはありません」

「・・・」

「私とスバルは優秀な魔導師である母さんの遺伝子を使って産み出された子供で、投薬や機械移植等で後天的に優れた魔導師として開発されました。

それのある違法研究施設で発見した母さんと父さんが私達を娘として引き取って育ててくれたんです」

「・・・・・・」

「星華さんはスバルの「私は・・・」？」

スバルは恐れているのですね、誰かに自分の存在を否定される事が。

その姿は事情は違えど、海鳴市での私に酷似していた。

それなら、私が成すべき事は一つだけ。

「私はスバルの事を好ましく思っていますよ。

何事にも真っ直ぐ取り組む姿勢、模擬戦の時に決して諦めずに立ち向かう心の強さ、少し事務作業が苦手なところも。

そして、そのスバルの自慢のお姉さんも含めて」

『星華さん』

「そこに、産まれがどうだの、体が他人と少し違うだのの些事は関係ありません」

『さ、些事ですか』

私のあまりな物言いに、先程までの深刻そうな顔が面白い程に愕然とした表情に変わる。

それを見て、私は座ったままの二人を優しく抱きしめる。

『え・・・ええっ!?!?』

「辛い事を話させてしまいましたね。

ですが、此処で誓いましょう。

もし世界の悪意が貴女達を襲ったとしても、私はこの身朽ちるまでスバルとギンガの味方で有り続けると」

『は、はい』

ふむ？

二人の体温が少しずつ上がっているような気が・・・

「寧ろ、二人のことを悪く言った奴は吹き飛ばしましょう、ルシフ
エリオンブレイカーで。

それで無問題モーマンタイですね」

「さ、流石にそれは・・・」

「問題あるかと」

「それで「むう~~~~!?!」?」

「主様〜!息が出来ないです〜!!」

『ぷっ!・・・あははははは・・・』

「何で笑うんですか〜!?!」

夕焼けに照らされた公園にイルを除いた全員の笑い声が響き、スバルとギンガの目の端に溜まった涙はとても美しかった。

星華 side out

Another: side

ミッドチルダ某所の怪しげな研究室では白衣の男が巨大なモニターを見ながら手元のパネルを操作している。

顔に隠しきれない笑みを浮かべる様は、新しい玩具を手に入れた子供の様だった。

「ホテル・アグスタのオークションかい？」

「ええ、どう致しますか？」

巨大なモニターの横に小さく表示された画面には一人の女性が映し出され、その話を聞いていた白衣の男は報告の中に興味の引かれる内容があったのかパネルの操作を止めて女性に視線を移す。

「特に興味は無かったんだけど、彼女が来るのなら話は別だ」

「あれ等を実戦投入するんですね？」

「ああ、折角作った物を使わない手はないだろう？」

これがどう未来に影響を与えるのか、はたまた只の道化に終わるのか。

実に興味深いよ、アハハハハハハ・・・！！」

「Wooooooooo！！！」

狂った様に笑い出す男が見つめるモニターには、一瞬だがギラギラした血の様に紅い複数の双眸が映り、不気味な唸り声が響いた。

A n o t h e r : s i d e o u t

T
O
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

ホテルアグスタ事変 導入編

— Side Another

六課結成からもはや日常化しつつある魔王監修スパルタ基礎訓練でバテバテになったFW陣の見送りを終えたのはは何時も通り訓練データの整理を終えて愛機レイジングハートと共に女性寮へと向かっていた。

「『地上部隊魔導師、立て箒もり犯を見事確保！』か、逆か雑誌に取り上げられるとは思わなかったよ。ね、レイジングハート？」

「Yes, me too」

その手に持っているのは『管理局ジャーナル』というミッドチルダで最も購読者数の多い月刊誌である。

内容は注目されている局員の特集だったり、その月に起きた事件を割と踏み込んだところまですっぱ抜く過激な一面も。

かく言うのはも何度も特集を組まれており、それが彼女の人気を後押ししている一因だ。

雑誌の出所はヴァイスであり、星華が写っていると知ったのは
が彼から譲って貰ったらしい。

あくまで自主的にであり強制ではない、と信じたい。というか信
じて欲しい。

「うーん、地上本部の広報活動の一環ってことで許可したんだと思
うけど。」

それにしても犯人を絶対零度の表情で見下す星華ちゃんも可愛い
の」

ああ、ここまでくると最早病気である。

因みにレイジングハートはというと主の望みが自分の望みと豪語
するだけあって、星華に関することも全面的にバックアップしてい
る。

以外にも、ルシフェリオンとの関係は良好で周りから姉妹機のよ
うだと言われている。まあ実際、ルシフェリオンの基礎フレームは
レイジングハートのコピーなのだから事実そうなのだが。

・・・ええ・・・それで・・・します

「この声、星華ちゃん?」

歩くこと数分で寮に辿り着き、正面ロビーに入ると我らが天然キラの星華の微かな声がなのはに耳に届く。

なのはがこっそりと声の聞こえた方向を覗くと、ロビーから死角になった場所で彼女は通信を行っていた。

本来なら聞き逃すだろうが、これも愛の成せる『業』か。え、字が違う？これで合ってますよwww

では明日……現地で……君……

「……………」『君』？」

そして、会話の最後に聞き逃すことの出来ない単語が含まれていたことなのはの思考はフリーズする。

「ねえ、作者さん」

は、はい！？何で御座いましょうかッ！！？

「直ぐにSSS団に召集を掛けたいんだけどお願いできるかな？かな？」

イエス、ママ！直ちに実行します！！

「星華ちゃん、浮気は駄目なの。ふふふふふ……」

さて、場所は変わって機動六課のとある会議室。

誰も居ない筈の暗闇に閉ざされた室内に三つの蠢く陰が存在した。

「では、これよりSSS団の緊急会議を始めたいと思います。

『魔王』さん報告を」

「了解です『乳揉み魔』さん。

本日二。：。に我らが女神が女性寮のメインホールで通信を行っていました。

そして通信先は特定できませんでしたが、君付けで呼んでいたこ

とから対象は『男性』である可能性が高いと思われます」

「「!？」」

なの、『魔王』の報告に驚愕する影二人。

「ですが、幸いにも対象は我らが女神とホテルアグスタにて接触する模様。

『乳揉み魔』さん、『二浪』さん、ここは索敵^{サーチ}&殲滅^{デストロイ}ということで如何^{いかが}でしょう」

「異議なしや」

「い、異議なし」

この上なく物騒なことを口走ってはいるものの、ふざけている様子は見受けられない。

明日、ホテルアグスタには血の雨が降る・・・かも？

「そついえば『勇者王』さんと『エターナルロリータ』さんは？」

「『勇者王』さんは訓練で疲れて爆睡中、『エターナルロリータ』さんは・・・まあ、子供は寝る時間ということで」

「なら仕方ないね。」

「だけど、このコードネームだけは如何にかならないかな？」

「『魔王』さんはまだええやん、私なんか『乳揉み魔』か『歩く口ストロギア』の二択やったんやで？」

「何て言うか、ご愁傷様？」

「言わんとして、余計悲しくなるわ」

「は、ははは。」

「そういえば、私も『二浪』か『親バカ』の二択だったよ」

「こうして今日も六課の日々は過ぎていく（笑）」

—— Side out

To Be Continue . . .

ホテルアグスタ事変 前編

—— Side 星華

「ほんなら改めてここまでの流れと、今日の任務のおさらいや。

これまで謎やったガジェット・ドローンの製作者、及びレリックの収集者は現状ではこの男。

違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者“ジェイル・スカリエッティ”の線を中心に捜査を進める」

「こつちの捜査は主に私が進めるんだけど、みんなも一応覚えておいてね」

『はい！』

今、私たちが居るのは今日の任務の舞台である“ホテルアグスタ”へと向かい空を駆けるヘリの中。

骨董美術品オークションの会場警備と人員警護が目的だが、取引許可のあるロストロギアが何点か出品される為、その反応をレリックと誤認したガジェットが出現する可能性が高い、とのことで機動六課の出動と相成ったわけです。

この場に居ないシグナムとヴィータは先行し、既に会場入りしているそうです。

それにしても、先ほど表示された“ジェイル・スカリエッティ”
という男。

あの顔を見てみると妙に心がざわつく。
少なくとも好意的なものではない・・・これは敵愾心？会ったこ
ともなければ、見たこともない筈なのに。

「主様、如何かしたの？」

「ッ、何でもありませんよイル」

「ならいいです」

「あの、シャル先生。

さっきから気になってたんですけど、その箱って」

「ん？ああ、これ？

んふ、隊長たちと星華ちゃんのお仕事着」

はい？

—— Side out

星華たちを乗せたへりは無事予定通りに“ホテルアグスタ”へと到着し、なのはたち三人はシャルマルの言っていた仕事着へと早速着替えていた。

「なのはさん、凄く似合ってます!」

「にははは、ありがとスバル」

なのはが着ているのは自信の魔力光と同色であるピンクを基調としたドレスで、言うなればちょっと背伸びした可愛い系。

スバルは憧れの人の普段とは違う大人びた格好を目の当たりにして少し興奮気味に目をキラキラさせている。

「フェイトさんも綺麗です。
ね、フリード」

「キュクル〜」

「そ、そうかな。」

「ありがとうキャラ、フリードもね」

変わってフェイトは彼女のバリアジャケットと同色の黒を基調としたドレスで他の二人より若干露出部分が広い為、その美貌と相まって“妖艶”という言葉が当てはまるだろう。

キャラもスバル同様、姉の様に慕っているフェイトが初めて見せる艶姿に少々はしゃぎ気味だ。

恐らく、将来自分もあんな素敵なおドレスを着てみたいと思っていることであろう。

が未来というのは残酷なものである（涙）

「だ、誰も私のこと褒めてくれて如何いうことや」orz

「や、八神部隊長も十分お綺麗ですよ。ねえ、エリオ」

「はい！」

「そーか！そーか！二人は素直やなあ」

何とも手軽に機嫌の直る子狸である。

それでいいのか機動六課部隊長。
補足しておく、はやてが着用しているのは純白に染まった正当
派ドレスだ。

「あれ、星華さんはどうしたですか？」

「それが星華ちゃん、最後まで着替えるの渋っててなあ。
シャルがクラールヴィントで縛って強制連行したから、そろそ
ろ戻ってくると思うんやけど」

「はやてちゃん！星華ちゃんの着替え終わりましたー」

「お、お待たせしました」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

そして遂に、六課メンバーのところへシャルに付き添われた星
華が姿を現した。

その出で立ちを目の当たりにした瞬間、全員の頭に電撃が走り思
考の一切が停止する。

星華は胸元と肩部分が大きく露出し裾に深いスリットが入った少
々挑発的な深紅のドレスを着用の上、普段はクールな表情はどこへ
やら頬は上気し瞳は潤んでいた。

その威力たるや核弾頭、いや反応弾級である。

「あ、あの・・・似合ってますか？」

そこで照れ臭そうにはにかむ我らが主人公、武器弾薬庫に火を放つに等しき行為だとは勿論気付いていない。

「ええと・・・クリアールヴィント、封鎖領域展開お願い」

《了解》

空気を読んで、極小規模の封鎖領域を展開するシャマル先生。料理以外はデキる女である。

その後、結界内でどんな騒動が起こったかは皆様の想像にお任せする。

決して文章で表現できそうになかったからではないと追記しておく。

— Side Out

— Side ルシフェリオン

《大丈夫ですか？マイロード》

「ええ、何とか」

「本当に大変だったみてえだな」

封鎖領域内での騒動から無事生還されたマイロードは会場入り後、妙に艶々した高町なのは他二名と別れ現在鉄槌の騎士ヴィータと行動を共にしている。

先程の出来事に関しては、何時もなら彼女達に対して苦言の一つでも提すところだが、マイロードの艶姿を拝見してオーバーフローを起こしていた身としては何も言えなかった。

勿論、映像は問題なく残してある。

マイロードに関わることで私に抜かりはありません、フフフ。

「そ、それとよ。」

そのドレス中々似合ってたんじゃないか

「ヴィータに褒めてもらえるとは、着替えた甲斐があつたかもしれ
ませんね」

「ヴィータのお顔真つ赤」

「う、うつせー!？」

「何故逃げるのですか？」

「待って」

むう、矢張りヴィータもマイロードのことを憎からず想っている
ようですね。

ブラックリスト確定なのは“高町なのは”“フェイト・T・ハラ
オウン”“八神はやて”“スバル・ナカジマ”“ギンガ・ナカジマ
”の五人。

予備軍入りしているのは“アリサ・バニングス”“月村すずか”
“ヴィータ”の三人。

“シグナム”は好敵手として、“シャマル”は可愛いものを愛で
ているだけだろうが油断は出来ない。

現にシグナムは、先刻ドレス姿のマイロードを見て顔を赤らめて

いた。

SSS団の活動も活発化しているようですし留意しておかねば。

——Side Out

ToBeContinue...

ホテルアグスタ事変 中編？

— Side Vita

あの後、星華の提案でもう一度巡回することにしたアタシ達は前回とは異なる視点で互いに意見を出し合うことで警備の穴を埋めていった。

「これで、警備箇所の再チェックは終了ですね。
ルシフェリオン、不備はありませんでしたか？」

《イエス、マイロード。警備マニュアルに照らし会わせた結果でも問題はありませんでした。

ただ、過去の事例と併せて検証した場合、地下搬入口の警備が若干手薄ではないかと》

「そうですね。……では正面に配置している人員の内、数名を地下搬入口に回しましょうか、ヴィータ？」

「おう、こっちで連絡する」

星華のデバイスは慇懃無礼で余り好きになれない奴だけど、主に恥をかかせないようにしているのか仕事に関しては一切手抜きがねえ。短い付き合いとはいえ、そこだけは信頼しているので、直ぐさまシャマルに連絡を入れる。

今回の任務で現場指揮を任されているシャマルに配置変更を伝えながらこっそりと横目で星華の様子を窺うが、まだアイツは眼前に展開した『ホテル・アグスタ』の全体見取り図と睨めっこしていた。やっぱり、見た目や雰囲気が違うつつても根っこの部分ではなのはと同じ、バカみたいに大真面目で放っておくと直ぐ無茶ばかりしやがる。

「おら！休憩だ、休憩」

「にゃ！？」

だから、コイツが間違った事してたらアタシがアイゼンでぶっ叩いてでも止めてやる！！

— Side Teana

ティア、何か気になるの？

……別に

そう？じゃ、また後でね

スバルとの念話を終えて、前々から抱えていた疑問は更に膨れ上がるばかり。

それは機動六課の戦力は無敵を乗り越して、明らかに異常だとい

うこと。

八神部隊長がどんな裏技を使ったは正直知りたくはないけど、隊長格全員がオーバース、副隊長でもニアスランク。他の隊員達だって前線から管制官まで未来のエリート達ばかり。

あの年でもうBランクを取得済みのエリオとレアで強力な竜召喚師のキャロは、二人共フایتさんの秘蔵っ子。危なっかしくはあっても潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。

やっぱりウチの部隊で凡人なのは私だけ。

でもそんなの関係ない。私は立ち止まる訳には『ティアナ、急いで事は仕損じますよ』！？

そうして決意を新たにしようとした私だけど、警備配置に向かう前、星華さんに掛けられた言葉が脳裏を過ぎる。

囑託魔導師で、管理局に身を置いて日の浅いあの人が事情を知っている筈がない。だけど、私を見詰める瞳はどこまでも優しく、最後の言葉は胸に突き刺さった。

ヴィータ、シグナム、ザファイラが複数の経路から侵攻するガジェットを各個撃破していた頃、星華は唯一ガジェットが出現しなかったホテルアグスタの背面に鬱蒼と広がる森林を探索していた。

《湖の騎士が微弱なガジェット反応を検知した地点というのは此処ですね》

「……………」

シャルのデバイス『クラルヴィント』はヴォルケンリッターでの彼女の役割と同じで、サポート系の機能に優れている。その為、本来誤認と判断されるようなものでも、念のために確認するだけの必要性が出てくるのだ。

尤も、ロングアーチも含めて警戒は厳にしているので、わざわざ六課の切り札の一人である彼女が出撃することもないのだが、星華は周りを押し切って此処に居る。

別に確固たる理由があるわけではない、ただ嫌な予感というか気配を感じたがゆえの行動。普段の論理的な思考に基づく行動から大幅に外れてはいたが、今首筋をチリチリと焼く様な殺気に予感は確信へと変わった。

だが、周囲にばらまいたサーチャーは敵影を捉えることはできず、また熱源反応もない。

「……………！ルシフェリオン、私を中心に半径百メートルに反響定位」
エコーロケーション

そこで何かに気付いた星華は頭上に掲げたヒートヘッド（魔導杖）形態のコアから音を発し、その反響を受け止めて周囲の状況を知るエコーロケーションを指示。サーチャーから送られてくる映像とエコーロケーションで得られた情報を比較すれば自ずと敵の位置が判明する筈だと考えたのだ。

《御推察通りです、マイロード。

敵性体を5体確認、位置特定完了、如何しますか？》

「無論、先手必勝です。ルシフェリオン」

《ブラスターヘッド。ロード、カートリッジ。——ブラスト》

「ファイヤー!!」

敵の手の内の一つを早々に見破った星華は、砲撃戦専用形態へと形を変えたルシフェリオンを構えファイヤリングロックを解除。カートリッジが二発装弾された瞬間、彼女は迷う事無く戦闘開始を告げるトリガーを引き絞った。

——Side Out

初手で放った砲撃は確かに直撃しました。しかし、非殺傷設定を解除した魔法が破壊できたのは完全な光学明細を可能としていたと思われるオプション装備のみ。

爆煙から無傷の敵が飛び出してきたのが映像で確認できた。

「これは………狼、ですか？」

その姿は体長2メートルはあろう四足歩行の巨体をガジェットに似た漆黒の装甲で覆った見た目、狼のような異形の獣。鋼鉄の爪は鋭く、前足の肩にはビーム砲が二門ずつ備わっていたのです。

《敵性体より生命反応とガジェット反応の両方を検知。知的生命体を戦闘兵器に改造したものと推測します》

「さしずめ『バイオガジェット戦闘機獣』と言ったところですか、悪趣味ですね」

《他四機の『戦闘機獣』、背部ユニットをパージしステルスを解除。全機こちらに向かってくる！マイロード、これは！？》

「どうやら私は、ジェイル・スカリエッティ 奴の実験場に招かれたようですね」

《来ます！！》

では、見せてもらいましょうか——新型の実力とやらを！！

——Side Out

To Be Continue . . .

ホテルアグスタ事変 中編？

— Side Another

ミッドチルダの何処かに存在するスカリエッティの根城。

マッドサイエンティストの名に相応しい巢窟の最深部、此処の主の自室としても使われているラボにて主であるスカリエッティと彼の秘書にしてナンバーズ最古参のウーノの二人が星光の殲滅者と戦闘機獣が繰り広げる激戦を観察していた。

「エコーロケーション反響定位。オガジェット考えたじゃないか」

「光学迷彩も存在そのまで隠せる訳ではないですから………ですが」

「如何な歴戦の魔導師でも、こつも容易く弱点を見極めるのは難しい。

本当に興味深いよ、彼女は。居る筈のない存在だといのに」

大型モニターには、リアルタイムで送られてきている戦闘映像だけではなく、星華が初めて機動六課と接触した時のものからシグナ

ムとの血戦と評すべき模擬戦まで、更には公にされていない筈の闇の欠片事件での記録映像すらもが映し出されていた。

「言うなれば、この世界にとっては完全にイレギュラーな存在」

「我々とは少々毛色が違うようだがね。だからこそ彼女の全てを識る必要がある」

彼らは星華を、いや星光の殲滅者の一挙手一投足を見逃さまいとしていたが、急に思い出したかのようにスカリエッティがウーノに問いかける。

「そういえば、君の妹達は元気かね？」

「ええ、とても役に立っていますよ」

言葉だけで判断するなら誰かを案じているのだと思うのだろうが、二人が共通して浮かべた酷薄な笑みからは身の毛もよだつ不快感しか得られない。ただ、狂気の科学者自身は簡潔且つ短い報告を聞いて直ぐさま興味を失ったようで、直ぐさま次の行動を開始する。

「ふむ……そろそろ、レリックウェポン達にも舞台上がってもらおうかな」

「では、私は新型の最終調整に着手します」

「宜しく頼むよ、私ウーノ」

「お任せ下さい、私Dr」

ある目的を遂げる為、動き出す闇達。だが彼らは気付いていなかった。既に自分達の意志などというものは異質な何かに浸食され、歪められて元の形を保っていないことに。

『全ては静寂なる世界の為に』

終演の鐘が打ち鳴らされる刻は近い。

初期段階でこそ大量のガジェット？型、？型を相手取った状態でも圧倒的な力量差で押していたシグナム、ヴィータ、ザフィーラたちヴォルケンリッターだったが、敵側の召喚師の登場で状況は一変してしまう。

召喚された銀色の小型の虫が、無機物であるガジェット群を自動操作に切り替えることで性能を底上げし、反撃に転じたのだ。

このままではFW陣の居る最終防衛ラインにまで回り込まれると判断したヴォルケンリッターの将シグナムの指示でヴィータが彼らの援護に向かうが時既に遅し、転送魔法のエキスパートでもある召喚師が発動させた遠隔召喚によりガジェットの急襲を受けてしまう。

戦闘訓練より格段に動きの良い奴らに翻弄される中、ティアナの焦りは頂点に達していた。

防衛ライン、もう少し持ち堪えてね。ヴィータ副隊長が直ぐに戻ってくるから

『はい！！！！』

現場指揮を執るシャマルの指示にスバル、エリオ、キャロの三人は応えるが、矢張り彼女だけが咬みつくような勢いで反対意見を唱える。

「守ってばっかじゃ行き詰まります！ちゃんと全機墮とします！！」

ちよ、ティアナ大丈夫！？無茶しないで！！

「大丈夫です。毎日朝晩練習してきてんですから」

心配するシャーリーの言葉も無視して独断でFW陣のフォーメーションを勝手に変更してしまう。

最初にエリオをセンターに下がらせて自分とスバルのツートップというものだったが、危険も孕んでいた。その事に気づかない筈のないティアナだったが、頭に血が昇った状態では冷静な判断ができる訳もなく。

ウイングロード上を駆け抜けるスバルを囫にし、彼女を追撃する為にまんまと誘い集められたガジェットをティアナが一網打尽にする作戦が決行されようとした時、シャーリーからの緊急連絡が入り全員に衝撃が走る。

嘘っ！？星華さんの反応が途絶！！

落ち着いてシャーリー！六課のレーダーシステムが敵のジャミングの影響を受けただけだから

ご、ごめんなさい

あの星華がそう簡単に墜とされる訳がない。誰もがそう信じ自分の成すべきことに再び集中する中、頭から冷水を掛けられかのように目が覚めた者が居た。

——Side Out

今私は何をやるうとしていた？

二人で密かに練習してただけで実際に模擬戦で使った訳でもないフォーメーションを無理矢理慣行して、エリオとキャロを蔑ろにするなんて愚の骨頂もいいところ。しかも、この後のカートリッジを4発もロードした連続射撃でミスショットでもすれば危険に晒されるのは私じゃなくてスバルだ。この状況で最善なのは、シャマル先生が言ったように防戦に徹してヴィータ副隊長を待つことなのに。何がランスターの弾丸は全てを貫けることを証明するだ。

「私って、ほんとバカ」

「ティア！危ないっ！！」

「…………え」

自己嫌悪に浸っていた思考がスバルの声で引き戻されると背後に何時の間に遠隔召喚されたのかガジェットドローン？型が。

突然の事態に頭が働かず、クロスミールージュの引き金に掛けた指先も力が入らない。私が間の抜けた声を上げると、3門搭載され

ている？型の砲門が輝いたのはほぼ同時だった。

——Side Out

To Be Continue . . .

主人公&デバイス

シュテル・ザ・デストラクター
星光の殲滅者

● 性別 / 女性

● 年齢 / 9 歳前後

● 容姿 / 相変わらずなのはに似た顔立ちだが、伶俐な瞳が彼女とは正反対の印象を与える。髪の色は濃い栗色でショートカットのまま。

● 性格 / 普段は常に冷静沈着で、戦闘ともなれば非情に徹する一見冷たい印象を受けるかもしれないが、それは感情の機微に疎いというだけで、極めて親しい相手なら感情を表に出すこともある。あと、本人は認めないかもしれないが若干天然。

● 趣味 / 夜天の書の一部だった影響か、本を読み知識を蒐集する事が楽しいらしい。また、最近料理を始めたようで、和洋中の基本的な料理ならはやて並の腕前。

● 特技 / 特別な三基の闇の欠片の中でも理、要するに知性を司っていたので長年に渡って夜天の書に蓄積された膨大な情報を有しており、それらを利用した新機軸の魔法や技術を構築、開発することができる。

● 階級 / 囑託魔導師

● 魔力ランク / SS

● 魔力光／赤色

● 術式／ミッドチルダ式

● デバイス？／インテリジェントデバイス『ルシフェリオン』

○ ヒートヘッド／なのはのアクセルモードと同様の通常モード。

○ プラスターヘッド／なのはのバスターモードと同様の砲撃モード。

○ ディザスターヘッド／なのはのエクシードモードと同様のフルドライブモード。

全てのプロローグ

——Side SternTheDestructior（シュテル・ザ・デストラクター）

「あぐつ……………あ、ここは？」

脳髓に直接電流を流し込めれたかのような衝撃を切欠に意識が覚醒した私が目にした光景は、白以外の色が存在しない異様な空間。どちらが上か、どちらが下なのか、視覚を揺さ振られ平衡感覚が狂い吐き気を催しそうになる。

気持ちを安定させるように、目を閉じ胸に手を当てながら深呼吸を繰り返す。そうして心の平静を取り戻したところで、自身の記憶を掘り返していく。

「確か私は——」

闇の書の残滓を巡る戦いに於いて、高町なのはとの戦闘中に……………

「――そう、消滅した筈」

なのに五体満足とは、このような事態は流石に想定外ですね。ふむ、話し相手でも居れば気も休まるというものです……ルシフエリオンは呼び掛けに応えてくれませんし。

さて、如何したものか。

手の平の上で生成中だったパイロシューター――私の赤い魔力で構成されたスフィア――があたかも霧か幻の様に霧散する。

「矢張り、何者かに行動を妨害されている」

この空間が何処まで続いているのか？それを知る為にスフィアを飛ばす案を思い付いたが見事に頓挫した。射撃魔法は何かに阻害されて魔力子を結合する事すらできず、飛行魔法も言わずもがな。

いよいよ手詰まり。精神を徐々に蝕んでいく世界で進退窮まった訳だが、私に対して語りかける者が現れる。

「始めましてだな、シュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者よ」

「……………」

姿形は確認できないが、声から判断するに間違いなく性別は男性、年は30代後半。だがそれだけで、他の情報は一切得られない。ただ、私が置かれている現状に関与している人物であることは確かだろう。

「警戒させてしまったようだな。」

我が名はトロイメライ。名前しか明かせないことは心苦しく思うが、取り合えず話だけでも聞いては貰えんか？」

「…………いいでしょう。それで、話というのは？」

「何、貴様と取引をしようと思ってな」

「取引？」

「ああ、管理局に新しく設立された新設部隊『機動六課』にどんな形でも構わんから協力してくれ」

「む」

謎の人物が口にした管理局の名に思わず顔を顰める。彼らは碌に調べもせず闇の書、いえ夜天の書の事を危険な魔導書だと断じて幾度も封印しようとし、叶わなければ周りの被害も構わず破壊した。私達に罪がない訳ではないが、管理局の思慮無き行動がどれだけの生命が奪ったことか。思うところが全くないと言えば嘘になるが、遺恨があるかと問われても返答に窮してしまうだろう。

「勿論タダでと言わん。幾つかの条件を呑んだ上で引き受けてくれるなら、見返りとして貴様に人として生を与えてやろう」

「荒唐無稽な話ですが、その条件というのは？」

「一つ、私の存在を決して誰にも明かしてはならない。一つ、管理局の上層部を決して信用してはならない。ただし、機動六課に対する背信行為は禁ずる。一つ、無闇な破壊活動及び、無辜の人間を傷

つけてはならない。以上の三つを遵守してもらおう。
さあ、返答は如何に」

さて、如何しましょうか。相手は完全に正体不明、信用するなんて論外ですが、『人』^{ひと}としての『生』^{せい}といのには些か心惹かれるものがあるのも確か。それに生きてさえいれば『彼女達』との再戦が叶う可能性もありますし、何より負けたまま終わるといふのは我慢なりません。

「釈然としませんが。答えは『Yes』です」

「交渉成立だな」

「余りに一方的且つ、一方通行な交渉だとは思いますが」

「これは手厳しいな。では武運を祈っておるぞ」

「っ!？」

トロイメライが告げた瞬間、白一色だった景色に亀裂が入り、問いたです間もなく世界は砕け散った。体は虚空へと投げ出され、あらがう術のない私はそのまま落下。落下速度が上げるに連れて掛かる負担に耐え切れず、再び意識を失うのにそう時間は掛からなかった。

— Side Out

— Side Another

「……やれやれ、これで良かったのか？」

「ええ、完璧です」

「何も此処まで手の込んだ事をする必要はないだろう。此処にある最高性能のAMFまで持ち出しおって」

「演出から全て『彼女』に委任しましたから。AMFに関しては、こちら側の技術力の高さを披露するのは示威行為に繋がるとも言っていましたよ」

「ほう」

「あと、その方が面白いからとも」

「あんの小娘！矢張り面白半分か！！」

「面白全部かもしれませんが？」

「~~~~っ！！？.....あの娘で決まりなんだな？」

「ええ。魔導師としての資質、非常時に取り乱さず平静を保つことできる冷静さ、一番重要な魂と■■■の適合率の異常な程の高さ、全てのデータが彼女こそが最善であると示しています」

「お前がそう決めたのなら構わん。が、儼は儼で試させもらっ」

「御随意に。間もなく『彼ら』の総攻撃が開始されるでしょう。本丸を囿にし脱出、と同時に『星光の殲滅者』をミッドチルダへ転送します」

「相分かった」

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

—
S
i
d
e
O
u
t

再誕する星

— Side Another

第一管理世界『ミッドチルダ』。

時空管理局の運営に大きな影響を持ち、魔法文化が最も発達している世界。また、ミッドチルダ式魔法の発祥の地でもあるミッドの首都『クラナガン』郊外、リニアレールが走行する為に敷かれたレールが設置された山間を見下ろせる崖の上に少女は居た。

強風に揺さ振られる濃い茶色の髪、何の感情も映さない伶俐な瞳、黒を基調としたバリアジャケットを身に纏った少女らしからぬ少女。星光の殲滅者は赤い球状の宝石を片手に、何かが起こるのを只ひたすらに待っている。

《マイロードの御言葉を疑う訳ではないのですが。そのトロイメライという人物の言葉、信じて良いものでしょうか？》

「別に信じた訳でもなければ、信用した訳でもありませんよ。ただ、如何なる方法を用いたかは知りませんが、契約を履行して私を復活させた以上……自分に課せられた約定は遵守します」

彼女が目覚めたのは現在地から程近く離れた森の中、綺麗に削り取られたクレーターの中心に放置されていたのだ。首にはシルバーチェーンで飾り付けられた愛機『ルシフェリオン』が掛けられていて、中には星光の殲滅者に宛てられた最初の指令がインプットされていた。

内容は『指定した場所に移動して『レリック』と呼称されている第一級搜索指定ロストログアの回収任務に現れる機動六課に協力した後に合流。以後の行動は貴女の判断に任せます』、というもの。閲覧が終了すると同時に、最初からそう設定されていたのかデータはデリートされてしまいログを確認することも出来ず仕舞い。詮索するだけ無駄だと判断した彼女は指示された通りに移動し今に至る。

「今は新暦0075年……あれから10年ですか」

《……マイロード》

「心配ありません、ただの感傷ですから。

それにしたも人の身体というのも案外不便なものですね、何だか節々が痛いですし」

《マイロードの身体が変質させられた後遺症かもしれません。簡易生体スキャンの結果も問題ありませんし、時間が解決してくれるかと（おのれ、トロイ何某！マイロードの御身を弄繰り回すとは万死に値します！！）》

「態々そんな事まで。感謝します、ルシフェリオン」

《勿体無い御言葉。私を構成する部品、端末に至るまで全ては貴女の為に存在しているのですから》

「（本当にありがとう、ルシフェリオン）」

辛い言葉に対して返ってきた絶対の忠誠心に少しだけ相好を崩す少女。

それは年相応でとても微笑ましいやり取りでもあった。

星光の殲滅者とインテリジェントデバイスの和やかな時間は、蒼空で閃光が数度瞬き遅れて響いた爆音により終わりを告げた。反射的に立ち上がった少女は四肢に力を入れて、ジッと虚空を見据えている。

《……Search completion.》

現在地から5時の方向、3Kmの地点で魔法による戦闘を確認しました》

「いよいよ、ですね。ルシフェリオン、私の武器を」

《Yes, My Lord. Expand Device Mode HeatHead》

少女の手を離れた赤い宝石に、次々と物理法則を無視して現われた精密機械とフレームが合一、完成を果たした魔法杖が主の元へと帰参した。次いで星光の殲滅者の足元に描かれた真紅の魔法陣が回り出し、炎の如き翼が足の外側に2枚、足の内側に1枚展開される。

372

「さあ、我が魔導を『機動六課』とやらに魅せてあげましょうか」

《微力ながら、サポートはお任せ下さい》

黒衣を翻し飛び立った魔導師は、空を駆け抜ける感覚に酔いしれながら戦場へと向かう。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
.
.
.

—
S
i
d
e
O
u
t

過去の残光

— Side Nanoha

風が吹きつけ大雨が降り注ぐ海上で、彼女の猛攻を時には避け、時には防御魔法で防ぎ続ける。勿論、私も反撃はしてるけど相手はこっちの手の内を知り尽くした自分自身、どんな戦術を仕掛けても決定打にはならなかったの。

「何で………何で止まらないの！」

「言った筈です………それが私の存在意義だと!!」

「そんなこと!!」

接近戦に纏れ込み、デバイス同士が接触する度に激しく火花が飛び散る。

金属が擦れ合い嫌な音を響かせる中、諦めず目の前の女の子に話しかけ続けたけど、返ってくるのは明確な拒絶だけ。闘いこそ全てだと言われ、何故だか無性に悲しくなってしまう。けど、そんな情

けない私を奮い立たせてくれたのは意外にも彼女だった。

「何て顔をしてるのですか、高町なのは。

私を打倒しなければ『砕け得ぬ闇』が完成してしまうのですよ?」

「……………」

「見つけたのでしょうか?自分が進むべき道を……………他でもない貴女自身の意思で!」

「!?!?」

……………そうだね、貴女はある意味この世で一番私を理解してくれる存在。そんな彼女にこんな情けない姿なんて見せてられない!今なら視えるよ、シュテルちゃんを縛り付けてる黒い鎖が!!

「ありがとっ、目が覚めたよ」

「ならば決着をつけましょう!互いに魔導の全てを懸けて!!」

「うん!全力全開で!!」

互いにデバイスを弾き、砲撃型魔導師にとって必勝の距離を取る。エクセリオンモードに形状変化し、杖というよりは槍に近い形になったレイジングハートを空高く掲げ、大切なパートナーに勝つ為の指示を叫ぶ。

「「いきます！！カートリッジロード！！！」」

《Load cartridge》

私とシュテルちゃんのデバイスから、込められていた圧縮魔力を解放してその役目を終えた薬莢が次々に排出されていく。闇の書事件を切欠にレイジングハートに搭載されたカートリッジシステム、幾らか改善されたとはいえ魔導師とデバイスに掛かってくる負担は決して小さくない。だけど、ここで手を抜いたらきつと後悔する。

「（だから私は、この力を使うことを躊躇わない！）全力全開！！スターライト……………」

「（それでいいのです。それでこそ私のオリジナル）集え明星！全てを焼き消す焰となれ！！ルシフェリオン……………」

「「ブレイカー……………！！！」」

穂先から、集束魔力に加えマガジン内のカートリッジ全弾の魔力を併せた巨大砲撃を放つ。同じタイミングでシュテルちゃん撃つたブレイカーと私のブレイカーが射線上でぶつかり合う。集束魔法同士の闘ぎ合いの余波は凄くて、大気は震え海は波立つ。

だけど拮抗するのも束の間、徐々に押され始める。

「くっくっく……！！（このままじゃ競り負けちゃう！？）」

ここまでの連戦で消耗した身体じゃ、やっぱり無理なの？

《Master!!》

私達はまだいけます!!》

「そうだね、私とレイジングハートならまだまだいけるよね!!」

《Of course》

「それに、決めたんだ。皆の居るこの空を護れるよう強くなるって——だから、絶対負けない！（そして闇の書の闇の呪縛から貴女を解き放つ!!）」

押し負けていた私の魔法が、私の思いに応えてくれたかのように
威力を増幅。真紅の魔法を消し飛ばした砲撃はそのまま彼女を飲み
込んだ。シユテルちゃん

結果、戦闘は私の勝利で終わりを迎えたの。今はバリアジャケット
トがぼろぼろになり弱りきったシユテルちゃんを抱え込んで飛行し
ている状態。

「はあ……………はあ……………私の勝ちだね」

「ええ、私の負けですね」

ただ、こっちも一杯一杯なんだよね。正直、何時まで飛んでい

られるか、あははは……………。

それに、こんなに近くで彼女と見詰め合っていると、なんだか上手く表現できない気持ち湧き上がってきて胸の動悸が治まらないの。うるさい位に高鳴るドキドキがシュテルちゃんに伝わってしまわないか、うう……………心配で仕方ないよ。

「大丈夫ですか、高町なのは？随分と頬に熱を帯びているようですが」

「にやっ！？そ、そんなにやいよ！！」

「はあ？？？」

そろそろ魔力と心臓が限界に達しそうになった頃、彼女達が来てくれた。

「「なのは！！」」

「あ……………フェイトちゃん！ヴィータちゃん！みんなも！」

「大丈夫、なのは？顔が赤いけど」

「ええと、うん！問題ないよ、もう一戦ぐらい余裕でいけるくらい

に！！」

「そ、そう？」

私の言動を訝しむフェイトちゃんを無理矢理誤魔化してお互いの無事を喜んでいると、胸元の彼女が声を上げる。皆の視線も自然とそちらに向く。

「あなたがここにいるということは、他のマテリアルも敗れたようですね。」

「……………ああ、君で最後だ」

「クロノ・ハラウン。矢張りそうですか……………ふふ」

「手前え、何が可笑しいだよ！？」

「いえ、不快にさせたのなら謝罪します。ですが余りに予想通りだったもので」

「……は？」「」

シュテルちゃんが言うには、『闇の書の残滓』が復活し、『砕け得ぬ闇』へと成る為のプロセスは最初から破綻していたという。折角

の戦力を分散させて各個撃破されるなんて愚の骨頂等々、罵詈雑言の嵐。ここまで言われると闇の書の残滓がちよつとだけ可哀そうに思えてくる。

「何より一番力を振り分けられている筈の二人があれでは。『雷刃^{レイイ・ザ・スラッシャー}の襲撃者』は実力はありますが少々頭が残念なので、恐らく相手方に進んで情報を流していることでしょう。『闇統べし王^{ロード・ディーアーチェ}』は自分こそが頂点に立つ存在だと驕りが過ぎる傾向があるので、慢心のし過ぎで撃破されることなど想像に難くありません」

「あははは………」

「あ、当たつとる」

「素晴らしい洞察力だな」

何か心当たりがあるのか、はやてちゃんとシャルさんは苦笑い。リインフォースさんに至つてはしきりに感心していたの。

リインフォースを見て何かを思い出したのか、シュテルちゃんが待機状態のデバイスを取り出しはやてちゃんのシュベルトクロイツへと向ける。シグナムさんとヴィータちゃんが当然警戒するけど、リインフォースさんがそれを押し止めたの。

「これ、何のデータや？」

「夜天の書の管制人格が抱える問題を解決できるかもしれないデーターです」

「「「!?!?」」」

「ほ、ほんまなんか？これでリインフォースは助かるん？」

「可能性があるというだけです。余り期待してもらっても困りますが」

「うっん、まだ諦めんでええて分かっただけでも嬉しいんや。ありがとな」

「だから礼を言われる程のことでは……………っ!」

「きゃっ!？」

抱き付きそうな勢いでお礼を言うはやてちゃんにタジタジで、照れ隠しにそっぽを向く彼女に和やかな雰囲気流れるけど、突然強い力で突き飛ばされる。

私はフェイトちゃんに抱き止められ事無きを得たけど、一体何が？シュテルちゃんに抗議しようと開けた口が、目の前の光景を見て閉じることができなくなる。

「けふっ……………全く、往生際のっ……………悪い」

「い、いやあああああっ!!?」

それは誰の悲鳴なのか、もしかしたら気付いてないだけで私のものだったかもしれない。だけど、この手で抱き締めていた少女の胸元から黒い異物が突き出している事実だけは変えようがなかったの。

—— Side Out

To Be Continue . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2518k/>

魔法少女リリカルなのはMaterial ~ Wing of Revival ~

2011年10月14日14時21分発行